
宇宙狂時代

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙狂時代

【NNコード】

N6260C

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

はるか未来、宇宙船メーカー「ペガサス」のわずか十八才の社長でもあり、美少女でもあるミリィは、前代未聞の宇宙船によるレスを計画する。ライバル社の「クロノス」に打ち勝つため、なんとみずから宇宙船を操縦しようと言うのだ。彼女は勝利をつかむことができるだらうか？

ペガサス（前書き）

1950～60年代の少年向けSFを意識した作品です。ですから科学考証はめちゃくちゃです。ちょっとバカなSFを読みたいと言う人はぜひどうぞ！

「みなさん、今期のペガサス・コーポレーションの決算によると、受注数は前年比において三パーセントの減。生産高はさらにしたまわり五パーセントの減少が見込まれております。さらに株価も評価額がさがりつつあります。このままではいざれストップ安をつけるおそれもあります……」

銀河帝国の首都、地球の洛陽シティにある太陽系最大の個人宇宙船メーカー「ペガサス・コーポレーション」本社の会議室では重苦しい空氣のなか、重役以上の役員をあつめた決算報告をうけていた。手元の資料に目を落としたままたんたんと報告書を読み上げているは筆頭重役である遠山専務である。ひょろりとした長身の遠山は、じみなスーツに身を包み、この時代にしてはアナクロともいえるふとい黒縁の眼鏡をかけている。ときおりその眼鏡を神経質になおしているのが癖で、報告するその禿げ上がったひたいにはてらてらと汗がうかんでいた。いま報告しつつあるのは、ペガサス社が未曾有の危機的状況にあるという見通しであり来月にせまつた株主総会にむけての対策会議もかねていた。

時刻は午後十一時をまわりつつあり、ひろい会議室のまんなかにしつらえた巨大な長テーブルにはペガサス社の重役たちが全員顔をそろえていた。みなこの会社の草創期からいる古株である。

本来ならこのような会議にすべての重役が直接顔をあわせる必要はない。ホロ・スクリーンによる通信会議でじゅうぶんまにあうのだが、今回だけは社の意向で全員が本社の会議室に集まるよう厳命をうけていた。

この会議室は本社ビルの高層階にあり、不透明の状態にされてい

る窓を透明にすれば、銀河帝国の首都洛陽シティの豪勢な夜景が一望のうちに見渡せる。が、いまは窓はすべて不透明に偏光されなにも見えないでいる。

さまざまな数値をあげ現状を報告しあわった専務の遠山は、手元の水差しからコップに水をそそぎ、じっくりとひとくち水のみほして口をしめらせた。

「というわけであります、現在の危機的状況はみなさんおわかりになつたかと存じます。それでこんなかいの会議の目的は、この状況をいかに克服するか、その手段をみなさまのお知恵を拝借しまして来月の株主総会へむけての対策としたいと思います。みなさまの活発なご意見をたまわりたいと思います」

そう言つて全員の口の開くのを待つた。しかしいらぶ重訳たちはこそこそとおたがいの顔を盗み見ているだけで、だれひとり口火をきらうとする者はいない。

「みなさん、なにかご意見は？」

たまりかねて声をはりあげた遠山にこゝたえ、よつやくひとりの重役が口を開いた。

「えー、つまり問題はわが社の主力商品である個人用宇宙コットの売り上げが落ちていてるということにあるんだよな。つまり宇宙コットの売り上げが上向けばいいんだ」

「そうだ、モテルチエンジの時期を前倒ししよう！ それと宣伝だ！ もつと有名なタレントを起用すれば……」

ようやく会議は活発になりつつあった。遠山は重役たちの意見を几帳面に手元の入力装置にメモしていた。

会議はつづき重役たちの意見が出しつくしたこゝのドアが開かれた。

その方向を見た重役たちのあいだに緊張がはしつた。

社長が登場したのである。

ペガサス社の社長は、芳紀十八才になる美少女だった。

ミリイ川村。先代のペガサス社のひとり娘である。先代の創業社

長が事故により死亡したことにより自動的に社長に就任した。

燃えるような赤い髪にぬけるような白い肌をしている。おおきな瞳はあたたかな茶色で、きりっとした顎のラインにつすい唇がどことなく意志のつよさを物語っている。小柄で、一見すると十五、六才にしか見えない。しかしプロポーションは抜群で、よく発達したバストときゅっとしまったウエスト、そしてなだらかにふくらむヒップへとつづく。その肢体を髪の毛の色にあわせたまっかな宇宙パイルオーツの上下つながったスーツに包んでいる。足元もまた真っ赤なブーツでかため、まるで生きている炎のような印象だ。

ミリィはその情熱的な瞳でじろりと会議室に顔をそろえていた重役たちを見渡した。

彼女の視線があたりそつになる重役たちはみな顔をそむけるか、視線をはずすかでまともに目を合わせようとしない。みな、恐怖の表情をうつすらうかべている。

彼女が社長に就任した当初、創業時からかかわっている重役たちはまるで本気で彼女が社長をつとめるものと思つていなかつた。なしろ見ての通りの美少女であり未成年でもあつた。

しかしミリィが就任してすぐ、かれらは彼女のおそるべき手腕をまのあたりにする。

彼女の最初に手懸けた仕事はその重役の大量解雇だつた。いまいる重役たちの一倍の人数を彼女はあれこれと本人の能力のなさを証明し、つぎつぎと解雇していったのである。その証明はすべて事実であり、言い逃れることができないことであり、彼女の意向に逆らえるものはだれもいなかつた。いま会議室に顔をそろえていた重役の半数は解雇された重役にかわり彼女の手によつて引き上げられた者たちばかりである。その結果、ペガサス社の売り上げはのびミリィは自分の手腕を重役たちに見せ付けることになる。彼女が十五歳のことだつた。わずか十五才で経験豊富な重役たちをものともしないミリィの手腕にはわけがある。もともと父親のもとで経営について薰陶をうけたこと。そして法律などの知識を記憶RNAの投与に

よる手段でわずかな時間で身に付けられたことなどである。この時代、どんな職業につくのにも年令制限というものはなくなっている。そして義務教育というのもも撤廃された。生活に必要な基本的な知識は大量の記憶RNA投与によって身に付けられるからだ。もつとも法律などの高度に専門的な知識を身につけるための記憶RNA投与は大金がかかり、ミリイのよつた立場の者でなくてはできなかつたが。

そして三年、重役たちは全員彼女の言いなりといつてよかつた。もともとの才能もあるのだろうが、ミリイは生れながらの専制君主であつた。命令することになれ、ひとを動かすすべを彼女は生れながらに知つていたのである。

その三年のあいだ、新興の宇宙船メーカーがペガサス社のシェアを意外な方法で侵蝕してきた。

クロノス、というのがその新興の宇宙船メーカーである。

クロノスはペガサスがやらなかつた軍用宇宙船受注という分野に目をつけ、大量の宇宙戦艦の発注を帝国宇宙軍からうけた。その結果豊富な資金力を身につけ、その資金力を背景に今までペガサスの独断場であつた個人用宇宙ヨットのシェアを食い荒らしつつあつた。その結果、ペガサスは創業以来の危機にたたされたというわけである。

かつかつかつ……、とブーツの靴音をひびかせ、ミリイは自分のための社長の椅子にどつかりと腰をおろした。その間、ひとことも口を開かない。

そのままひとりひとりの重役の顔をじつと見つめている。

そんなミリイを専務の遠山ははらはらしながら見守つてきた。

かれはミリイをその生誕から知つてゐる。彼女が生まれてから、筆頭重役の責任として養育係りを自任してきたくらいである。それは封建領主のお姫さまを見守る忠実な家老といった役割であろうか。「あんたたちの改革案、部屋で聞かせてもらつたわ」

彼女の言葉は会議室の空氣をぴしりと切り裂いた。その口調に全

員がうなだれた。ミリイの怒りはまるで手が触れそなへりで、だれも言い返すことはできない。

「なんのあれば？ あれがあんたち精一杯の提案つてわけ？ まったくあきれたわ。これじゃクロノスに追いかれるわけね」クロノス、といふ言葉がミリイのくちから出ると重役たちの顔がいつせいに渋面にゆがんだ。この会議で当然議題にのぼらなければならぬクロノス社との競争にどう打ち勝つか、といふ議案はどう出なかつたのである。みな、その社名を口にだすことさえ避けていた。

ミリイは部屋を横切ると、窓を操作するパネルを開きスイッチに手を触れた。さつと会議室の一方の窓ガラスが透明になり、洛陽シティの夜景があらわになつた。重役たちはその夜景を田にすると田を逸らした。

「みんな、田を逸らさないで！ あれを見るのよ！」

ミリイがゆびさす方向に「クロノス」のロゴが夜景に煌々と輝いていた。ペガサス社の鼻先にクロノス社の本社ビルがそびえている。クロノス社はわざわざペガサス社の田の前の土地を買収して、そこに本社ビルを建設したのである。あてつけ、といつていい。

「みんな、この窓を不透明にしてあのビルがないふりをしているけど、そんなことをしても無駄よ。あれが田障りなら、うちが頑張らなければだめなの」

とうとうたまりかねてひとりの重役が口を開いた。このなかでもつとも年令のわかい、木村といふ名前の重役だつた。のつべりとした顔つきの、甲高い声の持ち主である。

「しかしどうすればいいと言つのです。社長になにかアイディアがあるとおっしゃるのですか？」

木村の発言にミリイはにやりと凄味のある笑いをうかべた。

「アイディアがあるか、つて？ もちろんあるわよ。起死回生のね」

「聞かせてもらいましょうか」

木村は憤然となつてそう言い放つた。

「それじゃ聞くけど、どうしてうちの主力である個人用宇宙コットの売り上げが落ちてきたと思つてるの？」

「そ、それは……」

「比較の対象がないからよ。いくら優秀な性能でも、それがはつきり目に見えるかたちで消費者にわからなければ意味がないわ。クロノスはおなじクラスの宇宙コットをうちより五パーセント値引きして売つてているけど、性能に注目すればかなうずうちのほうが優秀であることはわかるはずよ」

「しかし各販売店にはうちの宇宙コットの性能についてはじゅうぶんレクチャーしておりますし……」

「それじゃだめなのよ。数字だけの話しじゃない。もつとはつきり、だれが見てもペガサス社の宇宙船が優秀だということがわからなければね」

「どうということです」

木村は憮然となつた。かれの娘ほどの年令のミソイのまえで、かれはまったく手も足もでない格好だ。

「あんたたち、二十世紀の地球の歴史といつもの学んだことがあるかしら？」

なにを言い出すのか、と重役たちは顔を見合させた。二十世紀といえば、銀河帝国以前の時代であり、人類はまだ恒星間宇宙船も持たない未開の時代であった。なにしろ火星や金星などの内惑星に人類の植民地すらもないところの話しだ。

「そのころさかんにおこなわれていたものに、自動車レースというのがあつたのよ。自動車というのはそのころ主力の交通手段で、四つの車輪で地面を走る乗り物のことなの。その自動車のメーカーはさかんにレースに参加して、自社の技術水準を宣伝する手段にしていたわ。どう、おもしろいでしょ？」

「はあ……」

ミソイの話題がどこむかうのかさっぱりわからず木村は生返事をかえした。

「レースをするのよ！ 宇宙船のレースを！ 太陽系を一周する、宇宙船同士のレースをこのペガサス社が主催するの。このレースは太陽系にすむすべての視聴者が注目するはずよ。そしてペガサス社の宇宙船が登場して、優勝を勝ち取つてござらんなさい。どれほどの宣伝となるか！」

ミリィのほほは紅潮し、目はきらきらと輝いた。彼女の口調には熱がこもっている。ミリィはいつしか立ち上がり両手を動かして情熱的な身振りをおこなつた。

重役たちはあっけにとられていた。こうなつたらミリィはだれにも止められなかつた。しばしばミリィはこうこう状態になつて重役にじぶんの意見を通すことがある。こうなるとミリィはどんな困難があつても自分の意志をつらぬいてしまう。

「みんな、これを見て」

そう言つとミリィは会議室のスクリーンをゆびさした。みなが注目すると、そこには太陽系の概念図が描かれた映像があらわれていた。

「このレースは地球を出発して火星へむかい、アステロイド・ベルトを横断して土星のタイントン基地へ一氣にむかうの。そしてタイタンから太陽を一周するコースをとつてふたたび地球へと帰還するという手筈よ。この時期、各惑星は合の位置にあつて、ほぼ直列するからこれがいちばん効率的なコースになるわね」

「じぶん、手回しがいいですなあ。この会議をはじめるかなり前からずっと計画をすすめていたのですな」

木村のことばにミリィはうん、とうなずいた。重役たちはざわざわと私語をかわしあつてゐる。

「レースだつて？」

「馬鹿なことを……」

「わが社の名前が汚されるのでは？」

「もし負けたらどうなさる」

くちぐちに騒ぐ重役たちをミリィはひややかにながめている。し

だいにそんなミリィの様子を見て、重役たちはだんだん口数がすぐなくなつていつた。

しん、となつた会議室で木村がふたたび口火をきつた。

「わたしは反対です！ みなさん、わたしはこの場で社長の解任動議を提出します。遠山専務この発言を記録してください」

ミリィの目はほそくなつた。

「解任動議ですって？ 理由はなに」

「社をあやうくさせる無謀な計画をしたといふことドジゅうぶんでしょう。レースなど馬鹿馬鹿しい」

「なぜ、宇宙船のレースが馬鹿馬鹿しいといえるの？」

「あたりまえじゃないですか。レースとなるとわが社以外の宇宙船も出場することになるのでしょうか？」たとえば……

「たとえばクロノス？ そうよ、これは公のレースにするつもりよ。クロノスが出場するならもつけのさいわいよ。クロノスをたたきつぶすいい機会じゃない。なにが問題なのよ？」

「もしペガサスの宇宙船がクロノスの宇宙船の後塵を拝すことになつたらどうなるのです。その危険はないとはいえませんぞ」

「そうね、でもリスクは負わないと。そうでなくてはこの危機は回避できないでしょ。でも、あんたがそんなことを言い出すとは意外だわ」

「どうこうことです？」

木村はきつとなつた。

「この会議室からずつと亜空間通信装置の反応がでていたのよ。あんたがこの部屋へ足を踏み入れてからずつとね」

木村ののっぺりとした顔は蒼白となつた。

「あんたが重役になつてからうちの新型宇宙船のデザインや、設計図が外部に漏れていた証拠があるのよ。あんたが重役になつてね！」

そう、あんたはたしか設計部門の責任者だったわね」

ミリィは顎をしゃくつた。

と、木村の両側にすわつていたふたりの男がたちあがり、その腕

をがつちりと掴んだ。あつといつ間に木村の上着のポケットからちいさな通信装置が探し出された。木村はそのときになつてじぶんの両側にすわつていた男の顔を見たことのない者であることを気付いた。

「そのふたりはペガサスの防犯部の人間よ。こんどのために特別に配置させていたの。木村、あきらめなさい。あなたのことはすつかり調べてあるわ。あなたの口座には、クロノスから大金が支払われているわね」

木村は歯を食いしばっていた。顔色は蒼白からまつになつっていた。

遠山はおひおひと声をかけた。

「お嬢様、それでは今までの会議の内容はクロノスにつつぬけになつていたということになりませんか」

「遠山、お嬢様はやめて、と言つたじやない！ ともかく会議の内容がつつぬけにならうとたいしたことはないわ。それよりなぜ木村がスペイのようなまねをしたといつことが問題よ。ねえ、あんたどうしてこんなことしたの。なにが不満なのよ」

木村は肩をすくめた。冷笑が口の端にうかぶ。

「あんたのような小娘が、ペガサスの社長におさまるのが気にくわねえつていうんだよ！ けつ、お嬢様だかなんだか知らねえが、世間知らずのお姫さまが、社長でござことおさまりかえる。あんたのしたでこれからずっと働くことを思つとぞつとすらあ！」

ミリィの顔色がすうつ、としろくなつた。唇がこまかくふるえた。

「出でいきなさい。すぐ、ここから出でていつて！」

木村はべつと床に睡を吐くと、ゆつくりと背中を見せて会議室から出でていつた。

ドアの前にたつと、へるりと回れ右をして会議室の重役たちをにらむ。

「おー、おまえらー。いつまでこんな小娘のもとにいるつもりだ。男なら、さつさとこんな会社やめちまえ！ おれがクロノスに紹介

状を書いてやる。いいか、ペガサスにいるかぎりおまえたちの未来はないぞ！ いずれここはクロノスに吸収合併されるんだ。そうなつたら、おまえたちの居場所はなくなると思うんだな

重役たちは木村の言葉にいつせいに動搖した。ミリィは保安部のふたりに叫んだ。

「あいつをここから叩き出しなさい！」

つかつかと靴音をたて近付く保安部の人間をまたずに木村はにやりと不適な笑みをうかべるとドアをあけて出ていった。

ふうつ、とため息をつくとミリィはどすんと音をたてて椅子に腰掛けた。おろおろとしている遠山に命じる。

「遠山。クロノスのシルバーに映話をかけなさい」

「なんですと？」

「おなじこと一度言わせないで。シルバーと話をしたいのよ。はやく…」

ミリィの命令に遠山はびょん、とけいをく飛び上がるよつとして室内の映話装置のもとにかけよつた。震える手でスイッチを操作すると、天井の一部がひらき、なから映話装置の受像機があらわれた。受像機があかるくなつて、そこにひとりの男がすがたをあらわした。

ひろい両肩にがつしりとしたいかつい顔がのつている。頭はつるつるに禿げ上がり、ぎょろりとした目をした五十代はじめころの男がミリィをみつめている。眉はほそく、ほんと見えない。鼻もくちも巨大で、全体に蛙のような顔つきの男である。かれはくちもとにふとい葉巻をくわえていた。その葉巻をひとくち吸い付け、紫煙をはきだすと男はにやりと笑いかけて口をひらいた。

「やあ、ミリィさん。今晩は」

「シルバー、ひさしふりね」

クロノス社の社長、シルバーである。もともとペガサス社の社員だったが、いつの間にか独立してクロノス社を立ち上げ、いまは古巣のペガサス社を追い越さん勢いだ。

「「こんなよふけに」、いつたいなに」とですか。あなたのよつな美人は、あまりよふかししないほうがよろしい。美容によくありますんで」

「ぐだらない」と言わないで。あたしが映話をした理由はわかつているんじゃないの？ わりきまで、ここで話していた内容は聞いていたはずよ」

シルバーは肩をすくめてみせた。

「ふむ、それについては一コメントとしましょ」

ふたりは映話装置の受像機をはさんでじばらへこりみあつた。やがてミリィは首をふると口を開いた。

「まあいいわ。あたしは今度、わが社主催で宇宙船同士のレースをやろうと思つてゐるのよ。もちろん、参加する宇宙船のメーカーはペガサスだけなく、あなたのクロノスにもよびかけるつもりなん。どう思つうかしら」

「結構ですね。やうこわいとせどんやつたうよつし。宇宙船の技術発展にもよい結果になるでしょ」

「それでクロノス社にもぜひ、このレースに一枚噛んでもらいたいのよ。なにしる、業界一位のクロノスが出場してくれれば、このレースも盛り上がりりますからね」

「ははあ、業界一位……ですか」

シルバーはミリィの言つ方にひつかつたようだつた。

「よろしい。ぜひそのレースにはうちからも宇宙船と、パイロットを用意いたしましょ」

「それでね、もうひとつあるの。このレースにはペガサスの参加ももちひんだけど、そのパイロットにはあたしがなるつもつよ」

「お嬢様！」

遠山は悲鳴をあげた。黙つてから、とこづかづかは遠山をにらんだ。

「ほほお、ミリィさんがみずから操縦桿をこぎるのですか」

シルバーの両手がほそくなつた。

「どう、面白いでしょう？」

シルバーは笑い声をあげた。

顔に似合わず、けたたましい甲高い笑い声である。かれは笑いすぎたのか、くわえていた葉巻にむせ、しばらくけほけほと咳き込んでいた。ようやく咳き込みをおさえ、涙にじんじん顔をあげ受像機のスクリーンからミリィをのぞきこむ。

「面白い。ペガサス社がレースを主催し、しかもその社長がみずから操縦桿をにぎるとはマスコミがどびつくでしょうね？」

「ひとつ賭けをしない？」

「賭け？」

「そうよ、賭けよ。このレースの勝敗を賭けにするのよ」

「どういう賭けです？」

「あなたの手元にある、ペガサス社の株よ

「ミリィさん……」

シルバーの顔がふいに真剣なものになつた。さきほどまでのやや滑稽味をおびた表情はぬぐつたように消し去つていて、かれの本性が闇の中からぬつと現れたようだつた。

「シルバー。あんたがうちの株をひそかに買い漁つてているのは知っているのよ。あたしの計算では、あんたはうちの株を二十パーセント取得しているわね。代表質問権を獲得するにはじゅうぶんな数よ。来月の株主総会にあんたが顔をだすつもりでしょう」

シルバーの顔色はあおくなつたり、あかくなつたり見るまに変わつた。ざわざわと会議室の重役たちは私語をかわしあつた。

「ねえ、このレースでうちが勝てばあんたの手元にある株をひとつで引き取るわ。そちらが勝てば、あたしが持つてある株をあんたに売つてあげる」

「何パーセント売つてくれるのです？」

「三十一パーセント。過半数をこえるにはそれだけ必要でしょう」

重役たちはいっせいに立ち上がり抗議をした。

「なんということを！？」

「自殺行為ですぞ！」

「遠山！ いまの発言を記録から削除したまえ！」

「削除の必要はないわ！ シルバーどうなの？ ジの賭けにのつて
みない」

シルバーはぐっと唇をひきしめた。びくびくとこめかみに浮いた
血管が脈動している。うつすらと汗をかいていた。

「よろしいのですかな。その条件で」

ミリイは昂然と顎をあげ胸をはつた。

「あたしはいいわ。あんたが尻込みするのならそれでもいいけど
「そんなことはしない。よろしい、その賭けにのりましょ！」ミリ
イさんがこのレースでうちのクロノスに勝てばわたしの持っている
ペガサスの株をすべて差し出します。しかしうちが勝てば、過半数
をこえる株式をうちがもてるようになります。それでいいのですな」

「決まりね！」

ミリイはにっこりと笑った。

シルバーはにやりと笑い返し、接続をきつた。してやつたりとい
う表情が浮かんでいる。念願の、ペガサス乗つ取りが目の前にぶら
さがつていると確信している表情である。

ふう、とミリイは息を吐き出し、重役たちを見回した。

「今日の会議はこれでおわります。みんな、このレースの実現に動
いてもらつわ。いいわね」

あつけにとられている重役をしづめに、ミリイはさわと立ち上
がり会議室を出ていった。あとにのこれた重役たちちはひやひやと
言葉をかわしている。

遠山はおひおひとしていたが、やがて決意の表情をつかべミリイ
のあとを追つた。

「お嬢様！ おまちを！」

「なによ、遠山」

廊下で遠山はミリイに追い付き、声をかけた。はあはあとあらこ

息をついている。

「おやめください。あのような賭けなど」

「なぜ?」

「危険すぎます。ペガサス社を賭けものにするのもやうですが、レースにお嬢様がみずから参加なさるなど……。シルバーがどのような男か、知らぬわけではないでしょう」

「そうよ、どうこうやつかあたしが知っているからあんな賭けを申し出たの。いまごろシルバーはしてやつたりとほくそ笑んでいるでしょう。そこがつけめなの」

「しかし……」

「あのね、これはペガサスとクロノスの生き残りを賭けた勝負なよ。それに重役たちのこともあるわ」

「かれらがなにを?」

「シルバーがどうやつてうちの株式を取得したと思つているの?」

遠山はあつという顔になつた。

「そうよ、うちの役員がシルバーにうちの株を横流ししているにきまつてゐるわ。いまごろあいつら、うちを見限つてクロノスに頭をさげにいこつか考へてゐるわよ」

遠山はぼうぜんとなつてゐた。

ミリィとの会話があわり、クロノスの本社ビルにあるシルバーの私室では、シルバーが高笑いをたてていた。

「わはははは……あの小娘、とうとう血迷つてあんな賭けを申し出てきたわい! これでうちの勝ちだ!」

笑いがこみあげる。

机の引き出しを開け、あたらしい葉巻を取り出すと専用の鋏で吸い口を切る。口に咥え、火をつけおおきく吸い込んだ。

その姿勢のままぱんぱんと自分の膝をうす、シルバーは天井にむけて葉巻のけむりをふきあげた。

その日はきらめきをたたえ、これからあれこれについて物思い

をしているようだ。

ふいに真顔になるとシルバーは、テスクのスイッチをいれた。

「はい、御用ですか？」

即座にスクリーンに秘書ロボットの顔が浮かんだ。

「おい、宇宙船のパイロットに募集をかける。優秀なやつをさがすんだ」

「パイロット、ですか？ それならひらひらの組合に何人でもありますか？」

「そんなやつはいらん。おれは優秀なやつがほしいんだ。そう、たとえば宇宙軍のトップクラスとかな」

「はあ、わかりました。でも、どういうことですか？」

「レースがあるんだよ。宇宙船のレースがな！」

「レースですか？」

ロボットは無表情な顔をうなずかせた。レースというシルバーの言葉に、驚いた様子はない。

「そうさ、ペガサスを打ち負かすために、どうしても優秀なパイロットが必要なのだ。たのむぞ、すぐ募集をかける」

「わかりました」

スイッチをきり、シルバーはにやにや笑いをうかべていた。ぴしゃりと音をたててじぶんの禿頭を手のひらでつつ。

ミリィの自室はペガサス社の本社ビルの最上階にあった。彼女は裸になつて浴室にはいり、湯槽に湯をためるとゆつくりと肩までつかった。

ふと思いついたことがあるのか、浴室の通話装置をいれる。もちろん音声のみで、映像は切つてある。

「遠山、おきていろ」

「はい。なにかござりますか？」

「あたしのユーローン号の整備をたのむわ。優秀な整備工場をさがしておいて」

「はい、もちろんで、」
「それじゃ頼むわね」

通話装置をきるとミリィはふたたび湯槽にふかぶかと身をしづめた。放心したように天井を見つめる。

と、その目尻にひかるものがあった。

声をしのんでミリィは嗚咽をもらしはじめる。

泣いている。

ミリィは泣いているのだ。

彼女は木村の罵言に傷ついていた。今まで十八年の人生で、あれほどの悪意に直面したことはなかつたのだ。いみじくも木村がいはなつたようにお姫さまとしてきまにペガサス社に君臨してきた。それが手痛いしつべ返しをつけたのだ。

ミリィは泣き続けた。

パック（前書き）

もうひとりの主人公、パックの登場！
ミリィの計画した太陽系一周レースのことを耳にしたパックはなんとか自分も参加しようとすると……。

洛陽シティは銀河帝国最大の都市であり、太陽系の中心である。人口は数億にのぼり、地下数キロから成層圏までたつする巨大な複合構造体がまるで山脈のようにそびえたつている。

が、そんなきらびやかな印象とはべつにシティにも低所得者がすむ下町といつていい区画がある。ふるい建物が身を寄せ会うようにならび、巨大な山脈のようなシティの構造体を見上げる場所にあつた。まるで無計画に立ち並んだビルはふかい谷間をかたちづくり、迷路のような露地はでたらめな方向に四通八通している。その一角に、ちいさな宇宙船の整備工場があつた。

あちこちつぎはぎされたその工場は、いまにもたおれそうな風情でぜんたいにうつすらとほこりと錆で汚れ切つている。工場の建物には「パック宇宙船整備」と手描きの看板が墨痕もあざやかに掲げられていた。そんな一画にも朝日は平等にふりそそぐ。

この一帯は東南にそびえる細長いビルの影になり一日のほとんど時間は日陰にあるが、朝早いこの時間のみわずかに朝日がさし込むのだ。ビルのすきまからなげかけられたほそい光束はまともに工場の建物を輝かせた。

工場の二階部分は住居になつており、ななめになつた屋根は切り込みがいれられて窓ガラスになつていて、その窓ガラスからなかを覗くとベッドがひとつ。そこにはひとりの少年がいびきをかいて寝ている。

RRRRR……。

少年のまくらもとには日覚ましがおかれ、するどい金属音をたて執拗に目をさまそうとしている。少年はうーん、とひとつになると

片手をのばして田覚ましをさぐつた。指先が田覚ましにふれる。しかし田覚ましをとめるスイッチにはどどかない。少年はうん、と身体をのばし田覚ましをつかんだ。

どた、という鈍い音をたて少年はベッドからじろげおちた。がち
やん、と田覚えましは床にころがつた。よつやく音がとまる。

少年は床に毛布を身体にまきつけたまますやすやと寝息をたてている。いつたいなにを夢見ているのか。

ほたほたほた…… といニヤれらか足音がトテの方向から聞こえてくる。

きい……という音をたてドアが開いた。

クリスマスの日が黄色い色にならぬ顔二女三男

クリーム色のまんまるな顔には巨大な両耳がくっついていた。そのしたには顔いっぱいにひろがった口がある。鼻や耳はない。顔の天辺にはほそいホイップ・アンテナがふらふらとゆれていて、その先端にはちいさな球体がくっついていた。その妙な顔からは一本の自在関節の両足がによきりと生えていた。両足のさきには三本の指がついている。ロボットである。しかしロボットにしては奇妙なデザインである。

じつをいつどこのロボットはくろくろといつて、この部屋のあるじの少年のつくれたものだった。少年は工場の看板にあるよつにパックといい、この下町で整備工場を経営している。

パックは工場をやつていて、うち手が足りなくなつてロボットを作ることを思いついた。それでぽつぽつとロボットの部品を集め、こつこつ組み上げて、手足を制御する回路の設計がどうしてもうまくいかなかつた。ロボットの設計、組み立てには高度な専門的知識が必要なのだが、それに必要な記憶RNA投与をうけることが予算的にできなくて、パックは独学でロボット工学をまなんでいた。そのため手足を制御する回路設計について手を抜いてしまつた。その結果、顔から一本の足兼用両手という構成になつてしまつたという

わけである。

へロへロは部屋のなかを覗いて渋い表情になつた。へロへロの顔はやわらかなポリマーでできていて、表情をかなり豊富につけることができる。もともとへロへロは家庭用汎用ロボットであったため、人間とつきあうためさまざまな表情と人間並の感情をもつっていた。

べたべたべたと顔とおなじようなやわらかな足裏で木製の床をあらき、へロへロはベッドから転げ落ちているパックのそばに近寄つた。

「まつたく、また目覚ましを止めてるよ。これじゃ意味ないじゃないか」

「ぶつぶつ言いながらへロへロはパックの身体にまきついている毛布のはしを片方の足指でつかんだ。

「起きろよパック！ いつまで寝ているんだ？」

うん、とへロへロは勢いをつけてパックの毛布を引いた。まきついた毛布からパックの身体が転がり出る。こうこうとパックは寝たまま床を転がつた。まだ寝息はたてたままだ。

「まつたく毎朝これだものな」

へロへロはパックの片手をつかんだ。器用に片足で立つたままへロへロはパックの手をひっぱる。ようやくパックの上半身がおきあがつた。背中側にまわるとへロへロはパックをむりやり立たせた。パックはなんとか立ち上がつた。ふらふらと上体がゆれている。へロへロはパックの尻を蹴りあげた。パックはその勢いでぐらぐらしながらもゆっくりと部屋をでた。

「はやく皿をさましてくれよなあ」

へロへロはパックの手をひき、廊下を洗面所へ誘導していく。洗面所につくとへロへロはパックの背中をおして強引にそのなかに閉じこめた。ばたん、とドアを閉じると外から鍵をかけた。にたり、と不可解な笑みをうかべたへロへロは洗面所のスイッチをいれた。

じゃあーっ、という水音が聞こえ洗面所のなかからパックの悲鳴がひびいた。

洗面所のなかではパックが数十本のマジック・ハンドにがっかりと掴まれていた。天井からは身もこおるばかりの冷水がいきおいよく降り注いでいる。マジック・ハンドはパックの身体を掴んで、パジャマを脱がしはじめていた。パックは悲鳴をあげてそのマジック・ハンドからのがれようとしていたが、機械の手は容赦なくパックの着ているパジャマを脱がしている。

ついにパックは素裸にされて冷水をまんべんなく注がれている。ついで壁から石けんの泡がふきだし、マジック・ハンドにはブラシが持たれていた。ブラシは猛烈なきおいでパックの身体をくまなく「こじこじ」と洗い上げる。これはパックが発明した自動全身洗濯装置である。

プログラムはすすみ、今度は洗顔だ。「こじこじ」とパックの顔がみがかれ、ハンドはその口をむりやりこじ開けた。なかに歯ブラシがつっこまれ、歯磨きを開始する。うがいのための水が噴き出し、パックの全身はようやく磨きたてられた。

ぶおーっ、と音をたて熱風が洗面所のなかをあたためる。乾燥がはじまったのだ。パックの全身から水気がきられた。しかしこれでおわりではない。

ハンドの手には櫛と整髪料がある。パックの頭をつかむとハンドは髪の毛を梳りはじめた。さつさと器用な手つきでマジック・ハンドはパックの髪の毛を七、三に分けはじめた。

ようやくすべてがおわり、壁からはあたらしい下着とシャツ、ズボンが出てくる。マジック・ハンドはまたたく間にパックの身体に服を着せはじめた。

やつとおわった。

洗面所の鏡にはきちんとシャツのボタンを胸元までしめた少年がいた。

パックは鏡の自分を見て顔をしかめた。

きちんと分けられた髪の毛に指をつっこむとがしがしと分け目をほぐす。ようやくもとのざんばら髪になつて満足した。目はすっか

り覚めている。ぐびもどがきつちりしているのが気に食わなくてパツクはシャツのボタンをゆるめた。

洗面所から出るとヘロヘロが待っていた。

「ヘロヘロ、いつも言つけどなんで水の温度設定あんなに冷たくするんだよ」

「だつてそうしなくちゃ目が覚めないじゃないか。ぼくがどんなに苦労してパツクの目を覚まさせてやつているか知らないのかい」これにはパツクはぐうの音もなかつた。しょっぱい顔になつてパツクは首をすくめた。

ヘロヘロをしたがえ、パツクは廊下を歩いていった。つきあたりが階段で、ぎしぎしと音をたててきしむ階段をおりていく。踊り場から工場の全景がまのあたりに広がる。

工場を見下ろし、パツクのくちもどが自然にゆるんでくる。へへへ……、と自画自賛の笑みがこぼれた。

天井からの明かりとりの窓明かりに照らされ、スマートな船形の宇宙船がその姿をあらわしていた。最新鋭の宇宙船であることはすぐわかる。船殻は肋材のないシェル構造で、まつしろな塗装をほどこされている。船首はするどくどがり、ふつくらとした胴回りにつながつていた。船腹からはみじかい大気圏飛行のための主翼がつきだし、垂直につきだした船尾の翼は放熱板になつてている。全体にいかにも船脚がはやそうで、おそらくその目方とおなじプラチナとおなじ値段がするのではないかと思われた。それはちょっと船内に足を踏み入れてみればすぐわかつた。船内は個人用宇宙船に似合わずきわめて広々としている。それは最新技術の重力制御装置や、核融合炉を船殻にうめこむ設計をされているためである。ふつう機関部は船体の四十パーセント以上の空間をとるのだが、この船にあつてはわずか十パーセントしか必要としない。主要な機関は船殻のうすい部分にすべて押しこめられており、そのためゆつたりとした船室を実現できたのだ。船室もまた贅をこらしたもので、ふんだんにつかわれた金、銀、プラチナなどの貴金属重合素材が目もくらむば

かりの輝きをはなつてゐる。重合金屬は、金屬原子を特殊な方法でポリマーにしたもので、ほんらい貴金属がもつ性質を変えている。

たとえば融点だが、この貴金属重合金屬のもつ融点は八千度以上にものぼり、ほとんど太陽表面の熱にもたえる。重合金屬をつくる技術は高価で、ふつうもつとありふれた金属原子を重合させる場合に使われるが、この船ではわざわざ貴金属を使用しているのが贅沢のきわみである。船室にはそのほかに数か月分の食料供給装置があり、この供給装置からは古今東西あらゆる美食が自動調理されて出てくるようになつてゐた。こんな個人用宇宙ヨットはパックは見たことも聞いたこともなかつた。まるで王族か、けたはずれの大金持ちのために設計された特別あつらえの宇宙ヨットである。

その宇宙ヨットが昨日、パックの工場に運びこまれたのである。いきなり持ち込まれてパックは仰天したが、信じられないほどの高額な前払い金を支払われたのでなにも文句はなかつた。持ち込んだ係員によると、ちかぢか長期の旅行を計画しているので点検整備をたのむ、ということだつた。

前払い金ももちろんだつたが、このよつた最新鋭の宇宙ヨットの点検整備を依頼されパックは有頂天になつた。整備の仕事をはじめてから数か月、今まで手懸けた仕事といえば近所のこわれた炊飯器とか、洗濯槽の掃除とか宇宙船とはまるで関係のないものばかりだつたので、初の宇宙船整備がまいこんでパックはこれでじぶんの腕の見せ所とはりきつてゐた。

「パック、なににやにやしてんだい」

へ口へ口に声をかけられ、パックはわれにかえつた。

「だつてよう、こんなすげえ宇宙ヨットの整備がうちにきたんだぜ。すこしあおまえも嬉しがれよ」

へ口へ口は首をふつた。

「パック。これはきっとなにかの間違いだよ。こんなすげい宇宙船の整備をまかせるなんて、常識じや考えられないだろ。あとできつとあれは間違いでした、つて映話がかかつてきてもしらないぞ」

へ口へ口のじごく真つ当な意見にパックは頬をふくらませた。

「なんだと、そんな馬鹿なことがあるかよ！ きっとおれの腕のたしかさをどこかで聞き付けた金持ちが依頼してきたにちがいないさ！」

見てろよ、こいつの船首から船尾までみからすみまで点検整備をきちんとやって認めさせてやる！」

大声で叫び、パックは両手をふりまわしながら階段を降りはじめた。へ口へ口はあつと口を開いた。

「あぶない……！」と言い掛けるのも間に合わず、パックは足を階段から踏み外し、どじどじど……と音をたてて転げ落ちた。

「パック、だいじょうぶか！」

へ口へ口は叫んだ。

見ると階段を工場の床まで転げ落ちたパックは、大の字になつてのびている。

と、その目がぱちりと開いた。

にやりと笑う。

よかつた、命に別状はない。へ口へ口はほつとなつた。とんとんとん、と階段を駆けおりパックのそばに立つとくうー……、という音が聞こえてくる。

「パック？」

「腹が減つた……」

へ口へ口とパックは顔を見合させ、笑いだした。

炊飯器からしろい蒸氣が噴き出し、スイッチが保温になつた。へ口へ口が釜の蓋をひらくとほわんと炊きたての米の匂いがあたりにひろがる。杓文字をにぎりつてへ口へ口はパックと自分のどんぶりに飯をよそつた。

朝食は炊きたての飯に若布と豆腐のおみおつけ。こんがりと焼け目がついた鮭の切り身に大根の浅漬け。それに昨夜の残りの昆布の煮付けなどである。

「いっただきまーす！」

ふたりは声をあわせて叫ぶと、箸を握つて飯を食いはじめた。

人間のパックがこのような食事をするのはあたりまえだが、へ口へ口もまたパックにまけずにしろい飯をくちに運んでいる。

もともと家庭用に設計されたへ口へ口の体内にはあらゆる物質を分解し、エネルギーにしてしまう物質変換炉が備えられている。そのためほんらいなら、そこらの石や砂を食べてもエネルギーに変換できるのだが、やつかいなことにへ口へ口の口の中には人間と同じ味覚感覚回路があるのだ。したがつて食物の味も判別でき、土や泥を食べるには相当に心理的抵抗を覚えるのである。

一杯、また一杯とふたりとも飯をおかわりしていく。炊飯器のながみはたちまち残り少なくなつていつた。

「おかわり！」

ふたりは同時に叫んだ。

どんぶりを卓袱台のうえにつきだしたふたりははつしと睨み合つた。

「ぼくがさきだ！」

「おれだつて！」

へ口へ口とパックは言い合つた。

むつ、とふたりのあいだに火花がちつた。

わつとばかりにふたりはもつれあうよつてして炊飯器に飛び付いた。へ口へ口がさきに杓文字を手に取つた。遮一無一釜のなかの白飯をじぶんのどんぶりによそう。しかしパックも負けてはいない。へ口へ口のどんぶりを奪い取りながみを口のなかに掻き込んだ。

「あつ、きたねえぞパック」

「ひやひにふつたひょうははちは！」

さきに食つたほうが勝ち、と言つていいようだ。口のなかに白飯をいっぱいにしてもぐもぐして勝ち誇つたようににやりと笑つた。

「かえせ！」

へ口へ口はパックからじぶんのどんぶりを奪いかえそうとせまつた。パックはどんぶりをかかえたまま走りだした。

ふたりは工場のなかを追いかけっこはじめた。パックは追い付かれる前にすこしでも飯を搔き込もうと手掴みで食べている。

「ふいに頭上から聞こえてきた金属音にふたりはたちどまつた。きーん……。」

甲高い音が近付き、工場の窓ガラスがこまかく振動している。さつと明かりとりの窓に影が横切つた。

「なんだろう……」

パックはつぶやいた。

音は頭上から工場の入り口あたりに移動している。パックとヘロヘロは出入口に駆け寄つた。

「あっ、あれ！」

ヘロヘロは片足をのばして空を指差した。

めずらしいほど晴れ上がつた青空にぽつん、とひとつ飛行モービルが浮かんでいる。モービルには四基の斥力プレートが下向けにいており、青白い光をはなつていた。

飛行モービルはゆっくりと下降しあじめてきた。どうやらパックの工場の前庭に着陸するつもりらしい。

モービルは真っ赤な塗装で、金色のほそいラインが横腹にひかれている。モービルが地上にちかづくと四基の斥力プレートがまきあこす反重力効果で空気が舞い上がり、ほこりがもうもうとつきあがつた。

ほこりがあさまるのを待つてモービルのガル・ウイングのキャノピーがはねあがつた。なから全身真っ赤なつなぎの少女が地面に足をおろす。

赤い髪の毛、茶色の瞳。しろい肌におもわず見惚れてしまうほど

のプロポーション。

ミリイだつた。

彼女はゆっくりと地面に降り立つと、ぶらぶらとあたりを見回しながら工場に近付いていった。ぼうぜんと立ち尽くしたままのパックとヘロヘロには目にもくれない。あとからひょろりとした瘦身の

五十代の男がしたがつてくる。遠山専務だった。

ミリイはパックとへ口へ口を無視したまま工場のなかにはいっていった。

内部にはじるとまつしろな輝きをはなつ宇宙コチトを見上げた。
「きたない工場ねえ。こんなとこにあたしのゴーパーン号を運んだの？ 手違いにしてもひどすぎるわ」

「はあ、まったくの手違いでして。恐縮至極です」

遠山専務はふきだす冷汗をあとからあとからじこさなハンケチでふいていた。神経質に眼鏡をとるとレンズを磨きはじめる。

「まったくなんでこのよつたな手違いが生じたのかせっぱりわかりません」

「責任者を追及して！ これはサボタージュといつていいわ」

「はあ、善処します」

「そんな返事じゃダメよ。いいわね、あとで報告書を提出してよ」

「わかりました」

遠山はがつくりと肩をおとした。

「こんな不潔な工場に一晩も置かれたなんて、とても耐えられないわ。ねえ、ペガサスの指定工場にもどしたら絶対、全船体を殺菌消毒してよ。それまでとてもじやないけど、手を触れる気もしないから」

ふたりの会話を聞いてパックはむらむらと怒りがこみあげてきた。どうやら昨日運びこんだ依頼主らしいが、あまりの言ことようである。怒鳴ろうと息を吸い込んだパックはそのとき発したミリイの言葉にその息を呑み込んでしまった。

「レースまで時間がないんだから」

「レースだつて？ あんた、いまそう言つたな」

ふいに割り込んできたパックにミリイは驚いた。いままでこの少年がものを言つとは思つてもいなかつたのである。

「なによ、あんた？」

「この整備工場の工場長さ！」

「ああ、あそこにはパックつて書いているあれね」

「それよりさつきのレースつてどういうことだい」

「知らないの？ 映話一コースで昨夜から何度もやつていいんでしょう。JのJ-コーン号は太陽系を一周するレースに出場するのよ。そしてあたしこの宇宙船のパイロットといつわけ。もつともこんな下町でほそぼそとやつていちゃ、一コースなんて見る余裕はないわね」

ミリイのそんな悪態もいまのパックには聞こえていなかつた。夢中になつてミリイの顔を見つめている。

「や、そのレースにはどうやつたら出場できるんだい？ なあ、教えてくれよ」

いまにもつかみからんばかりに迫られ、ミリイは後退りをした。「ちょっと、そのきたない手をつけないでよー。いい、レースに出場するにはペガサス社に出場する宇宙船の設計図を提出すればいいのよ。設計図で安全基準がみたされないと判断されれば、登録できるから」

「やうか……、レースがあるのか。太陽系一周レースかあ……」

ぶつぶつとパックは口のなかでつぶやきほんやりと夢見ているような目付きになる。

ぐつー、とパックは全身にちからをためて、ぱつと顔をあげた。皿があらきらとしている。

「やつたぞーーー！」

叫ぶところなりミリイをだきしめた。驚いてこるミリイの頬にキスをするとその両手をむりやり掴んでふりまわした。

「いやあー、すげえよー。レースだつてな。宇宙船のレースかあ！」あはははと顔を口にして笑うと走りだした。あつという間に工場の裏口へ駆けていくとその姿を消した。

ミリイと遠山、へ口へ口はあつけにとられたままである。

「あの、こつたいあのかたはどうなさつたのです？」

おぞるおぞる、といつた調子で遠山がへ口へ口に話し掛けた。

「さあ、ときどきああなるんです。『戻しなさい』でください」「変わったかたですか……」

「あの、それよつあの宇宙ワゴンの」とですが、やっぱつ手違いで搬入されてしまつたんですね」

「おそれります。まつたくの手違いで『戻しなさい』で前払い金はもうちんの」と、ペナルティ代もお支払にさせていただく所存です。ですからこのことは内密に……」

「え、ほんとうですか」

金をかえせ、と訴われるのではないかと黙つていたのでへロへロはほつとなつた。ふと見ると//コイガぼうぜんとなつてゐる。パックにキスされたほほをほんやつとわすつていた。

「ええと、そのお嬢さん……」

え、と//コイはくへロへロを見た。

「あの、ぼくへロへロつていいます。パックの手伝いをしてこの口ボットです。その……パックのしでかしたことですが気になさらないでください。あいつなにかに夢中になるとじぶんがわからなくなるんですよ」

「気にするですつて!」

//コイはきつとなつた。

「こここと、あたしはあんな馬鹿な子供のしたことなんかこれつぱかりに気にしていなから安心なさい。だれがあんな……」

//コイのほほが紅潮した。

ぐるりと背をむけると遠山専務に声をかける。

「こきましょつ。帰るわよ」

「は、はいっ!」

あたふたと遠山は//コイのあとを追つて走りだした。

飛行モービルに乗り込もうとしてふたりは思わず立ち去つた。なんとモービルの表面は田茶苦茶に悪戯がきをされている。つかかな車体はめいっぱいいろいろな塗料で汚され、キャノピーにも下品な言葉が書き連ねられていた。

「やーーー。」

見るとこのあたりの子供だらうか、うすよじれた格好をした十才前後の子供たちが手に手にマジックやクレヨンをもつてばたばたと逃げ散つていくところだつた。

ミリィは黙つてモービルに乗り込んだ。遠山はあたふたと運転席へもぐりこんだ。

「あ、あのお嬢様。いかがいたしますか？ このよつな悪戯をされて、被害届けをお出しになりますか？」

運転席から身をねじつてミリィを見つめて遠山は話しかけた。ミリィはじろつと遠山を見上げると首をふつた。

「よけいなことしなくてもいいわよ。被害届けなんか出したら、警察やなんらやで面倒臭いことになるこきまつてるわよ。あたしはいま、大事な時期なんだから。いいからほつときなさい。」

「は、はい。承知いたしました」

遠山は首をすくめると運転席のマイクにむかつてペガサス社にものどう指示をした。モービルは斥力プレートを輝かせて空中へ舞い上がつた。

「おーい、パック！」

工場でへ口へ口はうろつるとパックをわがして歩き回つていた。たしか裏口にむかつて走つてこつたと思ったのだが、パックはどこにもいない。

へ口へ口は途方に暮れていた。

いつたいパックはどうしてしまつたのだろう。だいたいにかに夢中になるとまるつきり前後の状況が見えなくなるのがパックのわるい癖である。その癖がいま出でしまつたのだろうが、あの少女の言つた話のどこにかれをそんなに夢中にわせるものがあつたのだろうか。

「おーいへ口へ口」

ふいにパックの言葉が聞こえ、へ口へ口はほつとなつた。きょう

あよのとあたりを見回すがビリにも姿はない。

「ビリだよパック」

「リリちだよ、リリちー。」

声は足元から聞こえてくる。

視線をおとしたへロへロはきよつとなつた。

なんとパックが地面から首だけだしてにたにたに笑いかけていた。

「パ、パック？」

「なにびっくりした顔してるんだ」

「え？」

よく見ればパックは地面にあいた四角い穴から顔をのぞかせていたのだった。それが地面にパックの生首が転がつているように見えたのである。

「あー、びっくりした。寿命がちぢまつたよ

「おまえ口ボットだるい。寿命があるのかよ」

軽口をたたいてパックはよいしょ、と穴から上半身をのりだした。

「さつき、やたら外がつるをかつたけど、どうかしたのか？」

「それがねえ……」

へロへロはミコイの飛行モーベルに悪戯をされたいきわつを話した。

「へえ、そんなことあつたのか」

「だいじょうぶかなあ、あんなことあつてミコイさん泣いてないかなあ」

「ミコイさん？」

「あ、あの女の子の名前だよ。あとでおつきの遠山をさりてひとから教えてもらつたんだ」

「おつきのひと、ね。お嬢様なんだ。あの女」

いまいましげにパックはつぶやいた。いまいじるになつてミコイが

吐いた悪態が腹立たしくなつてきたらし。

「それよりパック。そんな穴のなかでなにやつてたんだい」

へつへつへ……、とパックは奇妙な笑い声をあげた。ひりひりと

妙な目付きでへ口へ口を見上げる。へ口へ口はなんだか背筋がさむくなつた。パックがこんな目付きのときはなにか災厄の前兆にきまつてる！

「レースだよ、レース！」

「え？」

「さつきあの女が言つていたらう。宇宙船のレースがあるつて

「それがどうしたんだい」

「わからんねえかなあ。おれ、そのレースに出場するつもりなんだ」

「ええつ、でもどうやつて出場するつもりなんだい。宇宙船なんて、パック持つてやしないだろ？……まさか？」

「なにがまさか、なんだ」

「宇宙船の窃盗は犯罪だぞ！ 重窃盗で十五年の禁固刑……」

「馬鹿。なに言つているんだ。宇宙船ならちやんとあるんだよ。こつちについてきな」

そう言つとパックはふたたび穴のなかに潜つた。なんだろうとくろくろはついていく。穴のさきは階段になつていて。降りきつたところがシャッターになつていて、パックはそれを開けてなかにはいつた。へ口へ口がそれにづづくとパックはなかのスイッチを操作した。がくん、という下降する感覚があつてへ口へ口はそれがエレベーターであることを知つた。

「おい、パック……」

「しつ、だまつてろ。いまにわかる」

エレベーターはぐんぐん下降してついに降りきつた。明かりはまるでなく、あたりは真つ暗闇だった。がしゃん、とシャッターが開く音がして、ごそごそとなかにパックがあたりを動き回つている気配がする。へ口へ口がじぶんの視覚を暗視モードにしようつとするとパックが声をかけた。へ口へ口の視覚装置は赤外線から紫外線、またはミリ波まで見える。

「おい暗視モードにするなよ。びっくりさせたいから」

その言葉がおわらないうちにぱつと照明がともつた。だしぬけの

」とで、口へ口へ口の視覚は開放側のままだつたので目が眩んだ。

「わあ！」

「へ口へ口はたじたじとなつた。

見上げると、そこには一隻の宇宙船がそびえていた。

地下室いつぱいに鎮座している宇宙船はあちこちつぎだらけで、船首と船尾のデザインはあきらかに違和感があった。さらに右舷と左舷もちがう部品で大気圏飛行用の主翼さえも左右ちがつものでできている。

「い、いつたいこれはなんだい！」

「見てわからねえか。宇宙船だよ」

パックは宇宙船の着陸ギアのそばで誇らしげに立っている。

「で、でもこの地下室は……？」

「ああ、ここはおれが見付けたんだ」

「見付けた？」

「そうさ、ここで整備工場をやるときこ地下のケーブルとかパイプがないかと音波探査をかけたんだ。そしたら工場の地下にこいつら空間があつたのを見付けた。どうやら帝国樹立以前の洛陽シティの一部らしいな。ふるすぎて、記録さえ残つちやいない。ここが下町だつてことで、区画整理すらはいつていなか残されたんだろ？」

「そ、それでこの宇宙船はどうしたんだい」

「サルベージや。宇宙軍の放出品とか、航宙会社の耐用年限をすぎた宇宙船の部品をやすく引き取つて運んで組み上げたんだ。いやあ苦労したなあ。なにしろ部品ひとつひとつ規格がちがいすぎるから、繋ぐためにはいろいろ手をつかつたよ」

「へ口へ口はぼづせんとなつた。なんとパックの言つことを信用する」と、かれは宇宙船をいちからひとりで組み上げたのだといつ。

おそれおそれへ口へ口は口を開いた。

「そ、それでこの宇宙船どうするつもりなんだい」

「きまつてゐや。」れでレースに出場するんだ。そう言わなかつたか？」

「ああ、やうかい。ふーん」

じとじとへロへロのクリーム色の顔に汗がうかんだ。半笑いの顔で一步、一步と後退りする。

「そりかあ、パックはこの宇宙船で空へ飛び出すんだね。ざ、残念だなあ。ぼく、乗ったかったんだけどね。で、でも工場があるだろう。あの仕事はぼくにまかせてくれよ。それじゃ……」

へロへロはくるり、と回れ右をしてエレベーターに走った。

「待てへロへロ！」

パックの鋭い命令がとぶ。

その声にへロへロはたたらを踏んで立ち止まつた。これがへロへロの弱点だつた。ロボットであるへロへロの人工頭脳には人間のつよい命令に服従するプログラムが書き込まれており、たとえへロへロが内心服従したくない命令でも、はつきりと強制的に発せられた命令にはしたがうよう設計されている。

「じつちへくるんだへロへロ」

パックは声の調子をさらに強めて命令した。ぎくしゃくした動きで、へロへロは操り人形のようにパックのそばに立つた。うらめしげにパックを見上げる。

「なあへロへロ。おれはこの宇宙船でレースに出場したいんだ。いつまでもこんな下町で、整備工場を続ける気はないんだ。それにはこのレースが絶好のチャンスなんだよ。もしこのレースでいい結果が出れば、おれの腕が認められることになる。そうなれば、きっと大企業から声がかけられることになる。出世のチャンスなんだ！

なあ、おまえもそう思うだろ？おれとこつしょに夢をつかもうぜ」「でも、なんでぼくもいつしょについていかなければならぬんだい。そんなにレースに出場したければ、パックひとりで出ればいいじゃないか」

「それがそういかねえんだよ。ついてこい。コックピットを見せてやる」

パックは宇宙船の搭乗口にへロへロをつれていった。搭乗口から

は急傾斜の階段になつていて、ひとりひつやつと通れるへりこの通路になつてゐる。

「梯子といつていいほどの急角度の階段をえつひひむひかひめむと、そこが口シクピットだった。」

「せまいなあ

「くロくロはおもわざ感想をもらした。それくらに口シクピットはせまくるしへ、座席がふたつならんでふたりがすわるともつにつぱいこつぱいだ。ミリイのユーローロン号にくらべると天国と地獄である。」

「こつちが主操縦席。おまえのすわるのが副操縦席だ」

「おこおこ、勝手にきめないでくれよ

「くロくロは口をとがらせた。

「つべこべ言わずにわいつれと座れ

パックはやつぱつとくロくロの身体をかかえて無理矢理座席にすわらせた。

くロくロは座席にむかへ、と座つてやのコンソールをながめた。かくん、と口が開きぱなしなになら。

「なあんだいこつや。すいぶんふるい形式のコンソールだなあ

「そつや。なにしり部品とりのため、サルベージしたのは半世紀はまえの宇宙船の口シクピットだ。航路計算も手動だ」

「手動だつて?」

くロくロはあきれた。

「だからおまえが必要なんだよ。おれひとりじゃ航路計算は無理だからな」

「ええつ、それをぼくにやらせるつもりなのかい」

「おまえはロボットだらう。計算はおてのものじやないか。おまえの電子頭脳に航路計算のためのプログラムを書き込めばいいだけのことだ」

「おこ、氣楽に言つけど、そのプログラムを組むのはだれなんだい」「おれか。もう、アセンブルもすませてこる。じよとおまえの外

部入力端子を貸してくれ。ちょいちょいって書き込むからさ」

「冗談じゃないよ。もしそのプログラムにバグがあつたらどうする

つもりなんだ。書き込むのはぼくの電子頭脳なんだぜ」

「心配するな。おれがデバッグもすませていいから。動くんじゃない！」

強い調子で命じられ、へ口へ口の身体は硬直した。パックは鼻歌まじりにへ口へ口のあたまから突き出しているアンテナの先端部分にケーブルを接続した。

データが雪崩込む感覚にへ口へ口は歯をくいしばった。

「よし、入力はおわったぞ」

パックの言葉にへ口へ口は自己診断プログラムを起動した。ファイルを点検すると、あらたな項目がふえている。ファイルを開き走らせてみる。たちまち太陽系すべての惑星、小惑星、衛星、そしてオールト雲の彗星などの軌道がへ口へ口の脳裏にうかぶ。しばしへ口へ口はその感覚に陶然となつた。

「どうだ、なんかへんな感じはするか」

気が付くとパックがへ口へ口の顔をのぞきこんでいた。その表情をひとめ見てへ口へ口は叫ぶ。

「あ、やつぱり自信なかつたんだな！ もしかしたらバグがあると思つていたらう」

「へ、ばれたか」

「やめてくれよ、本当にもつ……。もしバグがあつたらぼくが困るんだぞ」

「なあ、いまのプログラムでこの船の軌道計算はできるだろ」

へ口へ口はパックの言葉で脳裏に太陽系の縮図を思い浮べた。たちまちデータの奔流にくらくらとなる。そのデータの海のなかで、パックが組み立てた宇宙船が自由にへ口へ口の想像上の宇宙空間をさまざまな軌道を描いて突進していく。

「ああ、なんとかね。でもこの計算を実際の操縦にいかすには、コンソールにはひとりじゃたりない……。あつ、といふことはそう

「ううとかー、ぼくを軌道計算専用の計算器にするつもりだつたんだ」

「ううう。なんしろ複雑な計算だからな。おまえが航法装置を受け持つてくれれば、おれは操縦に専念できるからな」

「ちえ、ロボットをなんだと思っているんだい」

「そう怒るなよ。ほら、これを買つてきたから」

ふいにヘロヘロの臭覚器官にこい匂いがただよつて、ヘロヘロの口中に唾がたまつてきた。

「バナナだ！」

ヘロヘロは歎声をあげた。

どういうわけか、ヘロヘロはこのバナナという果物が好物なのである。バナナさえあれば、前後をわすれるくらい夢中になる。

パックはコックピットのなかにかくしていたアイスボックスのなかから、黄色いバナナをひとつふさとりだしヘロヘロの皿の前にぶらさげた。

「なあヘロヘロ。協力してくれるよな」

ヘロヘロの両手はすっかり皿の前のバナナに奪われている。パックはゆっくりとバナナのふさを左右にゆらしている。それにつれてヘロヘロの両手も左右にゆれる。やがて身体全体がゆらゆら左右にゆれはじめた。

「返事は？」

うん、とヘロヘロはうなずいた。

「それ、食え！」

ほん、とヘロヘロの座席にバナナが置かれた。ヘロヘロはバナナのふさに飛び付いた。

「バナナでつるなんて、ひどいよ」

すっかりパックの術中にはまつたかつこのヘロヘロは、われにかえつて文句をいった。

「なに言つてんだ。ぜんぶ食べちまつたくせに

「それ言わるとつらい」

へ口へ口はしゅん、となつた。

「それよりあのミコイって女。映話ニユースでレースのことやつて
いるつて、言つていたよな」

「そうだっけ」

「そうだよ。ちゃんと聞いたんだから。ちよつと映話をつけて見よ
う」

パックはそういひつと、コンソールの映話装置の電源をいれた。メ
ニューを呼び出し、そこからニユースの項目をえらび、マイクにむ
かつて命令する。

「太陽系レースに関するニユースをたのむ」

映話サービスはパックの命令を受け取り、さつそく検索を開始し
た。すぐさま太陽系レースに関するニユースが選び出される。

「どのような情報が必要でしょうか」

映話サービスのロゴがモニターにうかびあがり、二十歳前後の若
い魅力的な美人がにつこりと微笑んでいた。映話サービスの送り出
している画像で、もちろんこの女性は現実には存在しない。

「レース出場に関するものを」

パックのこたえに女性はうなずいた。彼女の映像が消えると、そ
こにはペガサス社のロゴマークと、本社ビルを映し出す映像にきり
かわる。

「ここは洛陽シティにあるペガサス社の本社ビルです。この一階に
おいて、出場希望者は乗り込む宇宙船の形式、およびその設計図を
提出しなくてはなりません。設計図審査などにより安全にレースを
進行できることが証明されると、出場希望者には即時レース会場
へのバスが支給されます」

「ふうん、つまりその審査にうからないといけないってわけか……」

「そうです。設計図の規格はとくに決められていませんが、確実な
ものをと求められています」

へ口へ口が口をはさんだ。

「なぜ情報ネットで設計図のデータを送らないんだい。わざわざ本社ビルまで出向く必要があるのかい」

「それについてはペガサス社は説明の要を認めていません。ただ推測するに、情報の安全性を求めているのかもしません。セキュリティ・チェックが完璧といつても、どこかで情報のリークはありますし、それに出場するのはペガサス社の宇宙船ばかりでもありますからね」

パックがうなずいた。

「そうか、ペガサス社以外の宇宙船メーカーがそれを望んだってこともありまするね」

パックはペガサス本社ビルの地図のハードディスクを要求すると映話のスイッチをきつた。

「よし、あしたは出場権をとりにペガサス社にいくぞー。」

タイガー（前書き）

パックはペガサス社主催のレース出場をめざす。いっぽう、クロノス社のシルバーはタイガーと言つ評判の良くないパイロットを雇うことにして、このタイガー、一癖ありそうであるが……。

ペガサスの本社ビルと向かい合わせにあるクロノス社のビルは、全体が黒で統一されている。デザインとしてインカ帝国の階段ピラミッドをモチーフとしている。黒々としたガラスにはまわりの景色が映し出されていた。

そのクロノス社のビルを見上げる男がひとりいた。

一メートルちかい身長に、体重は百キロをかるくこえる。しかし肥満体という体付きではなく、全身筋肉のかたまりといった体格である。ふとい首筋には束のようにはり上がる筋肉がうかび、そのうえに載る顔はまるで岩石を鑿一本で彫りあげたような「つづつ」とした印象だった。たくましい顎には不精髭がうかび、頭にぴったりとはりついたようなヘルメットを被っている。

男の手には酒壇が握られていた。壇のそこにはわずかに酒がのこり、ちやぷちやぷと音をたてている。男はその酒壇をぐい、とあおり残った酒を一気にのみほした。唇に残った酒滴をぐつと片手の甲でぬぐうと、手の壇をひょいと投げ捨てた。がしゃん、と壇のわれる音を背後に、男はゆらゆらと歩きだした。

酔っている。

男の息は熟した柿のようすべすべ、田舎どろんと濁っていた。ぐらり、ぐらりと上体をゆらしながら男はクロノス社の受け付けに入つていた。

受け付けにはアンドロイドの女性が応対をしている。男は受け付けカウンターに肘をつくとにたりと歯をむきだして笑つた。

一週間は歯をみがいていないのではないかと思われる黄色い前歯を見せて男はにたにたと笑いかけた。

「はい、なんでしょうか？」

「アンドロイドはそんな薄汚い男にたじろぐ」となく、ほがらかな笑みをうかべた。

「姉ちゃん、ここで宇宙船のパイロットを募集しているって聞いたんだけど、ほんとうけえ？」

「ええ、その通りですわ。募集に応募なさりにきたのですか？」

「そおむ、おれさまはタイガーッてんだ。優秀なパイロットをさがしているんだる。だつたらおれはぴつたりだ」

タイガーと名乗った男はふたたび笑った。

クロノス社の最上階にあるシルバーの私室では、クロノス社最高責任者シルバーが窓から見えるペガサス社の本社ビルをながめている。その両目はらんらんと野心に輝いている。

「レースか……。ミリィのやつ、なにを考えておる……」

最初ミリィから取引の話を聞いたとき、これでペガサス社をのつとるチャンスが転げ込んできたと思った。しかしだんだん考えているうちに、むしろ彼女にうまうまと乗せられてしまったのではないかという疑念が黒雲のようにわいてきたのである。疑念は確信に変わりいまや焦りになつた。

そのとき部下から宇宙船パイロットのオーティショングがあるとう報告があつた。

そうだ、パイロットを募集していたんだつた……。シルバーは大股であるくと、会場に予定されている階へ急ぐためエレベーターに乗つた。

会場のある階でエレベーターの扉が開くと、いきなり大声の怒鳴り声がした。

「つるせえ！ てめえなんか、用はねえんだ。さつさとつせやがれ！」

いつたいなにがあつた……。シルバーは硬直していた。どすん、ばたん、という人があらそつ音がして数人の悲鳴があがつた。

フレベーターの扉からおそるおそる顔を半分だけだして外をのぞきこむ。

「だだだだ！ と数人の男たちがもつれあって転げ込んできた。

「わ！」

シルバーはその数人ともつれあい、床にころんだ。あわてて立ち上がると、床には数人の男がうめきながら横たわっている。みな顔や手足に打ち身をつくっていた。

「な、なんだ……こりや？」

ぱんぱんぱん、と両手を打合せる音にその方向を見やると、そこには床によこたわった男たちを見下ろして、上機嫌の大男がいた。「やあ、あんたがシルバーか。おれはタイガー。よろしくな！」「だれだ、おまえは？ いつたいここでなにをしている！」「おいおい。あんた、優秀なパイロットを募集していたんだろう。だからおれさまが来てやつたんじやないか」

「パイロット……、募集？」

あまりに強烈な無礼さに、シルバーはつるがきていた。馬鹿のようになりタイガーの言葉を鸚鵡返しにする。

「そうさ、ここにいるガラクタどもが何人いたって、レースには……いやペガサスには勝てねえぜ」

そう言うとタイガーはにたりと笑いかけ、その顔をシルバーに近付けた。息の臭さにシルバーが思わず顔をそむけるとタイガーはシルバーの胸ぐらをつかみささやいた。

「知っているんだぜ。ミリィちゃんとの賭け……」

シルバーはぎょつとなつた。タイガーはまたにたりと笑いかけた。「おれはそこらにいるパイロットとちがつて、どんな手を使つても勝つてやる。いいか、どんな手をつかつてもだ。この意味がわかるよな」

シルバーの視線がするどくなつた。

「タイガーとかいったな。ふむ、だんだん思い出してきたぞ。たしか数年前、帝国宇宙軍のなかで不名誉な罪で軍法会議にかけられた

将校がいたな。なんでも戦友を……」

シルバーが言い掛けるとタイガーはそれをさえぎった。

「おつと、それまでだ。どうだい、おれと手をくまねえか。あんたはこのレースで勝利がほしい。おれは金がほしい。それとレースで使用する宇宙船を、おれに無料供『つてことでどうだい』

「なぜだ。無料供『と』いうことば、つまり宇宙船をただでくれ、といふことだぞ」

「じぶんの宇宙船を持たないパイロットがどんなにみじめなものか、あんたは知らねえんだ。おれは宇宙船がほしい。なんとしてもな……」

シルバーの脳裏で複雑な計算がはじまっていた。損得をはかりおわり、シルバーは口を開いた。

「よし、おまえにいいものを見せてやる。いつしょにきてくれ」

シルバーはタイガーをひきつれエレベーターへもどった。タイガーはにたにたと笑いながらそれにつづいた。エレベータの操作盤にむかい、そこにのぞいているちいさなレンズにじぶんの瞳をちかづけた。

「網膜照合か」

タイガーの質問にシルバーはかるくうなずいた。

「ここから行くところは、クロノスの社員すら知らない。いわばうちのトップ・シークレットというわけだ。もちろん、網膜照合だけではないよ。この瞬間にも、このエレベーターのなかでは、おれたちの体組織のあらゆる特徴を透視している走査措置が動いているんだ。おまえにも、守秘義務をおつてもらつぞ」

「怖いなあ……」

ちつとも恐怖の色を見せず、タイガーはにたにたと笑っていた。

エレベーターは下降はじめた。最新の重力制御技術をつかっているので動いている感覚はない。しばらくエレベーターは下降していくが、やがてとまった。

「ここは地下十キロにあたる」

シルバーの言葉にタイガーは驚いた。エレベーターにはほんのすこししかいなかつたからだ。

「ずいぶんふかいな。地上からの探査をふせぐためにか」

「まあ、そうだ。ここは絶対秘密にしておかなければならんのだ」エレベーターをると、そこは通路になつていて。幅十メートル、たかさ五メートルほどの蒲鉾型にほりぬいた通路で、ちいさなランプが点々と天井にともり奥へと消えている。そうとう距離が長そうだ。エレベータのそばにはゴルフのカートに似た車があつた。シルバーはタイガーをうながしてそれに乗り込んだ。みずからハンドルをとり、動きだす。

電動のカートはかるいモーター音をたて、まつすぐにほりぬいた通路を走つていく。

「クロノスのようなおおきな企業になると、いろいろ世間に知られたくない秘密が生まれてくる。なかには永久に封印せざるをえないものもでてくる」

シルバーはつぶやくように語りはじめた。タイガーはうなずいた。「まあな、人間だってだれしも触れられたくない、脛に傷つてやつがあるわ」

カートは一時間ほど走つたるつか。ようやく通路の行き止まりに達した。巨大な扉が行く手をふさいでいる。

シルバーはその扉に手をおしあてた。

ただそれだけで扉は動きだした。ゆっくりと観音開きに開いていくと、地下室があわられた。

照明がともり、タイガーはぼうぜんとつぶやいた。

「こいつはすげえ……」

そこにはまがまがしいスタイルの宇宙船があつた。

ぜんたいに角張り、直線がおおい。おおきさは個人用の宇宙ヨットほどだが、その船体のいたるとこにレーザー銃座やミサイルのランチャー。機銃などがつきだしている。どう見ても戦闘宇宙船だつた。船体は迷彩色に塗装され、軍の記号があちこちに印されてい

る。

「聞いたことがあるぜ。なんでも帝国宇宙軍のだれかが奇襲用の長距離宇宙艇を提案したってことだ。しかし予算がつかなくて、数隻試験機がつくられただけでおわったといふことだったが、こいつがそつか……」

「おまえはべらべら喋りすぎまる。いろいろ鼻をつっこんでいるらしげ、そう口がかるくては長生きできんぞ」

「なあに、こうして話せるのもあんただけだよ。その気になれば、目のようことじてこるさ。こいつをおれにくれるつていうのか？」

タイガーはよだれをたらさんばかりだった。

「ああ、だがこいつを乗りこなすのは難しいぞ。速度、航続距離ともそこらの個人用ヨットとは桁違いだが、エンジンが敏感でいわば暴れ馬といつていい」

「楽しみだ。そうでなくちや、勝てねえよ。しかし気にくわねえところがひとつだけあるな」

「なんだ、そりゃ」

「塗装だよ。こいつはおれの好きなように塗り替えてくれ」

「ほら、行くぜ」

へ口へ口が声をかけ、パックは一歩足をふみだした。しかしその歩みはぎくしゃくとしていて、右足がぐると左手がぐて、左足がぐると左手が前へである。

不安になつたへ口へ口がパックの顔を見上げると蒼白である。

「だいじょうぶかい」

「あ、あたりまえだ。へ、平気だよ。なんでえ、受け付けくらい」

そう言いながらパックの膝はかくかくと震えていた。

パックはペガサス社の前にきていた。

それまで洛陽シティのこんな中心部に足を踏み入れたことはなく、天にまで届きそうな巨大なビル群に圧倒されていたのである。地上数キロにもたつする摩天楼の頂上うちかくは空にとけこみ、見上げる

だけで押しつぶされそうな気分になる。

ペガサス社のビルはそのなかでも図抜けてひろい敷地をもつていた。一階部分の前には自然がたくみにとりこまれ、公園のようになつていて、ああああとした芝生にはベンチや四阿が点在し、池には噴水がせいだいに水を吹き上げている。

そのなかを歩き回る人々はみな最新のファッショனに身をつつみ、忙しそうな早足で行き交つていて、それを見るだけでパックはおじ氣付いていた。

「さあ、行こうよ」

ヘロヘロはうながした。

パックはぼうぜんと立ち廻りして、ヘロヘロに言われてわかれにかえつたようだつた。

うん、とひとつうなずくと歩きだす。

ペガサスの本社ビル一階にある太陽系レース出場審査受け付けにはおおぜいの人々で、じつたがえして、レース出場を申請するパイロットとその関係者ももちろんだが、それ以上に報道陣があつまつていて、なにしろレースに出場しようとする人間はたいてい有名なパイロットばかりで、大金持ちがおおい。自前の宇宙船を持ち込んで出場するには、財力が必要なのだ。そのなかでおおくの報道陣をあつめているのはマローン少佐だつた。

かれは宇宙軍の退役将校で、いくたの冒険で知られている。

数度の大戦に参加し、また帝国アカデミーの深宇宙探査に出掛けている。そのため何度も生命の危機におちいり、その身体のほとんど部分は人工の臓器におきかえられたサイボーグになつていた。灰色のプラスチックの皮膚におおわれたマローン少佐は一見すると旧式のアンドロイドのように見える。いまなら完全に違和感のない人工皮膚が開発されているから、その気になればふつうの人間そつくりの外観にとりかえることができるが、かれはいつまでもこの見かけにこだわつていた。

そのほかにもペガサス社以外の宇宙船メーカーの参加パイロット

や、著名な資産家で趣味で宇宙船パイロットをしている有名人などが集まつてきていた。それらの人々に報道陣が同心円をえがいて取材をしていた。

それらがかもしだす喧騒にパックはたじろいだが、それでも目的を思い出してまつしぐらに申請受け付けカウンターへ急ぐ。

「あの、すいません。出場の申請をしたいんです」

パックはのびあがるようにして、受け付けのカウンターごしに話しかけた。受け付けの美人アンドロイドは顔をあげる。

カウンターが高く、奥行がありすぎるのと、パックがひといちばい背が低いため声だけが聞こえてパックの顔は見えない。

と、カウンターのむこうからパックの顔がひょい、とのぞいた。よじのぼるようにしてパックはカウンターに伸び上がった。足下にはヘロヘロが踏み台になつていて、パックが顔を出せるようがんばつていた。

「申請ですね。ありがとうございます。あなたの宇宙船の設計図を提出してくださいますか」

アンドロイドは感じのいいほほ笑みをうかべた。

パックは肩からななめにさげていたバッグの口をひらくと、なかから一枚の透明なプラスチック・カードをとりだした。かれの宇宙船の構造がファイルに書き込まれているデータ・クリスタルである。アンドロイドはカードをうけとると、手元の入力装置にさしこんだ。カードのデータがアンドロイドの内蔵している人工頭脳のなかへ装置を通じて転送される。ファイルの中身を開いて、アンドロイドはぐびをかしげた。

これはほんとうに宇宙船の内部構造なのだろうか？

今までかなりの量の宇宙船の申請ファイルを受け取つてきたが、これほど全体がこんがらかつた宇宙船の構造は見たことがなかつた。ファイルで見られる構造のなかにはあまりに古すぎて、その機能を推測することすらできないものもある。レースへの安全基準をまもる、というのが彼女に課せられた使命である。だが、これではこの

宇宙船が安全か、そうでないかを審査することはできない。

「申し訳ありません。これではレースに出場するのは無理かと存じますが」

「なんでだよ!」

パックは大声をあげた。

「あの、この設計図ではこの宇宙船が安全にレースをすることができないかどうか判断できません。わたしもは安全にレースをするよう義務付けられてあります。このような構造の宇宙船が安全に宇宙で航行できるかどうか……」

「なんだと、おれの宇宙船が飛ぶことができねえと言うのか!」

パックはかつとなつてカウンターをどん、と叩いた。その音にまわりの人々がえつ、というような顔になつて注目した。

パックはどんどん、とカウンターをこぶしで叩き続けて喚いた。

「この宇宙船はおれがじぶんで組み上げたんだ! 安全かどうかはおれがいちばんよく知つている。それともなにか、けちつけるつてのか!」

「お、お姫ちゃん……」

アンドロイドはパックの怒りにおひおおとなつてしまつた。なにしろ人間がこのように怒りをあらわにするのを見るのははじめての経験である。どうしていいかわからない。

「どうしたんだ」

やわらかなふとい男の声に、パックはアンドロイドをこうりんだまま答えた。

「このアンドロイドがおれの宇宙船にけちつけやがつたんだ。おれの宇宙船だぞ! 安全に宇宙を航行できるかどうかわからねえ、なんて言いやがる。けつ、なに言つてやがる。危険な宇宙船を、このおれさまが作るわけないだろ!」

「ほう、その宇宙船はきみがじぶんで組み立てたのかね」

男の声は興味深げになつた。

「そうや、部品をひとつひとつサルベージして探して、使えないの

は修理して……どんなに苦労したか

「それは面白いな」

「なにが……」

面白いんだよ、と言いかけうしろをふりかえったパックは絶句した。灰色の艶のない皮膚。ロボットのような外観。ふたつの視覚レンズが赤いひかりをはなつていて。

「マ、マローン少佐！」

「わたしの名前を知つていいのかね」

「は、はいっ！」

ほほを真っ赤にしてパックは直立不動になった。

「少佐の伝記を読みました。稲葉第四惑星での冒険とか、第三次銀河大戦での活躍とかみんな読みました！」

「そうか。それは嬉しいな。それで、どうしたのかね？」

おだやかな少佐の声にパックは説明した。

「ふむ、そうか。それではそのデータをわたしに見せてくれないか」

「は、はい……」

パックはデータのはいつたクリスタル・カードをマローン少佐にわたした。少佐はうけとつたカードをじぶんの腰にある挿入口に差し込んだ。瞬時にデータが少佐の補助人工頭脳に転送される。少佐はそのデータを通信装置によって洛陽シティの中央情報管理センターへおくつた。少佐はじぶんの管理優先権を利用して、そのデータの評価を要請する。中央情報管理センターでは、パックの作った宇宙船の設計図をもとにシミュレーションを開始する。

センターからの結論をつけとり、マローンはにっこりと笑った。

「ああ、いいようだ。この宇宙船ならじゅうぶんレースで戦える」

「ほんとうですか」

「うん、だいじょうぶだよ。きみ、だいじょうぶ。この少年の宇宙

船は、レースに登場していいよ」

アンドロイドはまうぜんとなつていた。マローンと中央情報管理センターの電子のやりとりを傍聴していたのだが、マローンのつか

つた優先権はかなり高度なレベルのもので、それをこのサイボーグがなぜ使えるのかわからなかつたのである。彼女にとつて世界のすべてはこの受け付けカウンターのみで、それ以外のことは想像の外だつた。

「マローンさん！」

女の子の声で、マローンはふりかえつた。

「うへつ！」

パックは驚いた。あのミリィがいたのである。ミリィもまたパックに気が付いた。

「あんた、なぜここにいるのよ？」

詰問調の言葉にパックはかつとなつた。

「レースの出場の申請にきたのさ」

ぶつきらめうて答える。ミリィは手を丸くした。

「あんたが？」

「ミリィくん。この少年と知り合ったのか」

マローンに尋ねられ、ミリィはなぜかほほを赤くした。

「ええ、ちょっと……」

「あの、ぼくパックといいます」

「ぼくへロへロです！」

「おまえは黙つてろよ」

「なんでだよ？」

パックとへロへロはマローンの前でにらみあつた。

そのマローンにミリィが話しかける。

「マローンさん。レースに出場するんですか」

「うん、宇宙船のレースなんて面白そりじゃないか。ぜひ、参加したいものだ」

「マローンさんが参加してくれればうれしいです」

ミリィの様子にパックはぐびをかしげた。

「あの……ミリィさん？」

ミリィはパックのそんな態度に眉をあげた。

「あら、今日ははずいぶん素直じゃない？」

「どうしてマローン少佐とそんなに親しいんだい？」

パックのひそひそ声にミリイはこつこつとなつた。

「あら、だつてマローンさんの乗る宇宙船はうちの設計による特別製品なのよ」

「うちの宇宙船……だつて？」

マローンは笑いながら説明した。

「彼女はペガサス社の社長なんだよ。この太陽系一周レースのね」

「ええっ！」

パックは驚いた。まじまじとミリイを見つめる。

「きみが、社長？」

「そうよ。びっくりした？」

ミリイはくすくすと楽しそうに笑つた。そんなミリイをマローンはにやにやしながら見つめてくる。マローンの視線に気付いたミリイはもの聞いたげに見上げる。

「いや、きみがこんなに楽しそうな顔を見るのはひさしごりだからね。このパックくんと、いい友達になりそうだな」

「そんな……」

ミリイは真つ赤になつた。

「よおよお、なにくつちやべつてんだあ？」

いきなりの胴間声にミリイはふりかえつた。

大男がひとごみをかきわけ、パックたちのほうへやつてくる。あしどりはもつれ、顔は真つ赤にほてつていた。

タイガーだつた。

タイガーはふらふらとやつてくると、ふーっと息を吐いた。むつとくる酒臭い息がかかり、ミリイは顔をしかめた。

「によーう、こつや可愛い子ちゃんじやねえか。びつやうペガサス社の社長さんのミリイちゃん、とお見掛けしますな」

そう言ってタイガーはにたにたと笑いながらミリイにしなだれかかつた。

「いやあー。」

ミコイは悲鳴をあげた。マローンは左手をのばし、タイガーの肩をつかんだ。

「いてえ！」

マローンのサイボーグのちからで肩をつかまれ、タイガーは悲鳴をあげた。

「なにしやがる……あつ、てめえはー。」

タイガーはものすごい凹凸になつてマローンをにらんだ。

「きさま、マローンか」

「そうだ。タイガーひさしふりだな。まだこんなことをやつしているのか」

「うるせえ！」

タイガーはマローンの腕をふりはらつた。

「お前もこのレースに出場するのか。え、どうなんだ」

「その口振りでは、きみも出場するらしいな」

「けつ、なにをえりそひに……ああ、そうだよ。おれさまもこのレ

ースに出るんだ。へへへ、お前とはライバルってわけだな」

タイガーはふいににたにた笑いをしてマローンを見つめる。しか

しそのまなざしは敵意にみちていた。

「タイガー。レースでは正々堂々と戦いたいものだな」

マローンは冷たい口調でタイガーの顔を見つめている。じばしタイガーとマローンのあいだに視線の火花がちつた。さきにタイガーは目を逸らした。

「へつ、レースが楽しみになつてきやがつた」

肩をゆするとわざとゆつくりと歩きだす。立ち去る間際、ふいに

ふりかえるとマローンに捨て台詞をはいた。

「マローン。レースでは氣をつけなよ。なにがおきるかわからないのがレースだからな」

「それはどういう意味だね。タイガー」

「さあな。とにかくレースが楽しみだぜ」

やう言つとタイガーは歩み去つた。

ミコイは不安そうにマローンを見上げた。

「マローンさん。いまのタイガーとはどういう関係なんですか？
なんだか、マローンさんになんだかすごい敵意をもつていたようで
すけど」

「あのタイガーとはわたしと昔にかけつとしたことがあつてね……
いや、これまでにしてくれたまえ」

きつぱりとした口調にミコイは口をつぐんだ。それほどマローン
の口調は有無を言わせぬものだった。

「シルバーさん。」存じのようになたしはペガサスを辞めてきましたよ。これでわたしは自由の身となりました。これからぱりぱりクロノスのために働きますよ」

クロノス社の社長室で、シルバーとむきあつてているのは木村だつた。あぶらのういた顔に卑屈な笑みをつかべ、シルバーを見上げている。シルバーは露骨にいやな顔をした。

「それは知つている。しかしなぜわたしに会いにきたのかね」

シルバーの言葉に木村は愕然となつた。

「シルバーさん、それはないでしよう。わたしはあなたのためにスペイのまねごとまでしたんですぜ。これからわたしの身の振り方になんらかの責任を感じてもいいはずだ」

「思わんな、そんなことは。わたしは有能なスペイにはいくらでも金をだす。しかし無能な素人にはびた一文もだそつとは思わん」

「なんだと！」

木村はたちあがつた。脣がわなわなと震えている。

「あんた、そんなこと言つていいのか？ おれがあんたのためにどんなことをやつてきたか、すべて明るみにだしたらクロノス社はどうなると思っている」

「どうなるというのかね？ たしかにきみはわがクロノスのためにいろいろ動いてきたが、そのことを証明する証拠はなにひとつない。

いいとも、やりたまえ。暴露でもなんでもやるがいい。しかし覚えておいてほしいが、この洛陽シティのほとんどの報道機関にはクロノスの息がかかっている。どこの報道機関にもつていても、門前払いされるのがおちだ。それと、なんらかの方法できみがやつたことをあかるみにだせたとしても、それでどうなる。きみのキャリアはもうおしまいだ。これからどこの企業もきみの再就職を受け入れるところはなくなるよ」

木村は絶句した。じぶしをかため立ち去っていった。

「き、きさま……！」

「まあ落ち着け。いままできみに支払った金額はそうすくないものではないはずだ。その気になればあと数年はしづかに暮らしていくだろ？ いいかね、あまりうろちよるするんじゃない。わたしは温厚な人柄で通っているが、その気になればいろいろ考えるからね」

最後のシルバーの口調はあきらかにどすをきかせたものだつた。木村は蒼白になつた。じばりくふたりは睨み合つていたが、木村はがくりと肩をおとした。敗北を認めたのだ。

「わたしの言い付けをまもりたまえ。すべてのことにかたがつけば、わたしそきみの身の振り方を考えんでもない」

「わ、わかつた……」

小声でつぶやくと木村はドアへむかつた。ちからなくドアをあけ、外へ出る。扉がしまつて、ようやくシルバーはほつとため息をついた。デスクのしたにかくしていった右手をだすと、そこには銃がにぎられていた。

「ずいぶん用心深いじゃねえか。あいつがおまえに襲いかかるとでも思ったのかい？」

社長室のとなりの部屋からタイガーがあらわれた。にやにや笑いをしている。

シルバーは皮肉な笑みをうかべた。

「そうなつたら、おれはあいつを見なおしたろ？ がね。どっちにしろ口だけの男だ」

シルバーは手ににぎった銃をデスクにもどした。

「話とはなんだ？ なにか問題でもあるのか」

「うむ、すこし改造をくわえたい」

「改造？」

「いや、改造というよりは装備の変更かな。これを見てくれ」

そう言ってタイガーはシルバーの前に宇宙船の設計図をひろげた。あの地下にねむっていた戦闘機の設計図である。それをひとめ見たシルバーは顔色をかえた。

「おい、これはどういうことだ。なぜ、こんな装備が必要なんだ」「レースの出場者のなかに気になるやつがいるんだ。この装備はそいつのための対抗策つてやつだ」

「しかしながらこんな装備を……、まさかタイガーまさか！」

タイガーはにやりと物凄い笑いをうかべた。

「そうさきまわりするな。おれはなんとしてもこのレースに勝ちたい。それだけさ」

押し黙つたままのシルバーの肩をどん、と叩いてタイガーはからからと笑つた。

「どうしたシルバー。これくらいのことでブルつちまつお前でもあるまい？」

宇宙へ！（前書き）

いよいよパックは自分の手で作り上げた宇宙船でレースに参加する。

最初の目的地は火星である。

パックは無事、到着できるのだろうか？

出場権をかちとったパックはじぶんの宇宙船を洛陽宇宙港へ運んだ。といつても運送の手間はすべてペガサス社がやってくれて、かれはなにひとつ働くことはなかつた。

「なんだか、いたれりつくせりじゃないか」

ヘロヘロは洛陽宇宙港にあつまつた、レースに出場する宇宙船のむれを眺めてつぶやいた。まったくそのとおりで、宇宙船の搬入から燃料の供給まで、ペガサス社のサービス態勢は万全の準備をしていた。

「レースを成功させるため必死なんだろう。パイロットからペガサス社が不公平なことをしていると言わせないためなんだろうな」

時刻は夕方ちかくで、夕陽が洛陽シティの市街構造体に没しかけている。オレンジ色の夕陽にてらされ、洛陽宇宙港の離着陸床に屹立した宇宙船の外板は金色のひかりをはなつている。

パックとヘロヘロのふたりはあすにせまつた出発にそなえ、コツクピットで最後の点検をいそいでいた。

「あ、パック。そろそろ時間だぜ」

ヘロヘロに言われ、うなずいたパックはコンソールの映話装置のスイッチを入れた。

「ユースのテロップがながれ、タイトルがつかんだ。

”太陽系宇宙レース特番

ペガサス社代表に聞く”

と、あつた。

派手なファンファーレとともに、ミリィが記者会見式場へ姿をあらわす。

「おー、あれがあのミコイかい？」

「へ口へ口が叫んだ。

「」の日のミリイはいつものスポーティな格好ではなく、たかく結いあげた髪の毛に入念な化粧をしている。あしもとまでかくれるドレスはスタジオの照明にあたるときらきらと輝いている。

「なんだか目一杯おしゃれしているなあ」

パックはにやにやしながらこたえた。

ふたりが映話装置のスクリーンに注目していくうち、記者会見がはじまった。ミリイは記者の質問にこたえながら「」のレースのコースを説明している。

そのうち、ひとりの記者が手をあげ発言をもとめた。

ミコイに指名され、記者はたちあがつた。

「どうも、洛陽新報の高木といいます。」のレースについて、すこし疑問があるので……」

「どのようなことです」

ミリイはすましそうたえる。

高木と名乗った記者はあみだにかぶつたソフト帽をちよつとさわると、手にもつたメモに目をやりながら質問を開始した。

「」のレースには太陽系の有力な宇宙船メーカーのほとんどが参加しているのですが、そのなかでクロノス社についてちょっとよからぬ噂を聞きました

「噂？」

「はあ、おたくとクロノス社のあいだでレースの結果についてなんらかの賭けをしているというのです。」のことにについてなにかひとこと」

高木の爆弾発言で会場は騒然となつた。

「賭けとはどういうことですか？」

「ミリイさん、なにかひとこと」

「クロノス社のシルバーとはどういう」関係ですか？」

フラッショウがたかれ、マイクが何本もミリイの目の前につきださ

れる。

ミリィの顔色がじょじょに紅潮してきた。

「あんたたち……」

いきなりミリィは会見会場の田の前におかれたテーブルに駆けあがると、そのまま洛陽新報の高木へむけてつかみかかった。

「あたしがどんな思いでこのレースを準備したかわかつてゐるの？」「この、この…」

ミリィは高木の首をしめあげた。高木は田を白黒させてあえいだ。

” しばらくおまちください ”

テロップがながれ、カメラは報道スタジオにもどされた。スタジオでこの様子を見守っていたキャスターはひきつった表情になつていた。

「ええ……、会場でたじょう混乱が生じたようです。ではおしゃせを……」

あわただしくそう言つと、CMがはじまつた。

「やつぱり変わっちゃいなかつたな」

パックは大笑いしていた。前代未聞の珍事である。

日が落ち、夜になつて洛陽宇宙港はひえこんできた。月はなく、夜空には無数の星々が燐然ときらめいている。パックは夜になつてもまだ宇宙船の整備をつづけていた。

「パック、いつまでつづけるつもりだい」

手伝いを無理矢理やらされているへ口へ口は不平の声をあげた。

パックはその声も聞こえない様子で、一心不乱に宇宙船の着陸ギアの調整をつづけていた。

「ちゃんとやつとかないと、命にかかるからな。宇宙に飛び出しあはいいが、そのまま帰つてこれなくなつたらこまのだろ」

「そんな可能性があるのかい」

へ口へ口はぎよつとなつた。

「まさか。だから、ちやんとやつとひつひつしているんだ」

「あーあ、これだからな。ねえ、本氣で優勝をねらつていいんか、もしかして」

「おい、文句を言つひまがあつたひやんと仕事じゅよー。」

「へいへい……」

と、足音にへ口へ口は顔をあげた。

「おい、パック……」

「なんだよ」

「ちよつと……」

「だからなんだつて！」

怒鳴うるとしたパックはぎくりとなつた。

いつのまにかミリイが立つていて、彼女の背後に宇宙港を照らすライトが逆光となつていてその表情は見えない。

「やあ、なんだい」

パックは立ち上がり、オイルに汚れた手をウェスでふきながら口を開いた。

「ちよつと、あんたの宇宙船を見学しようと思つてね。なにじゅうの船がここに搬入されてからずつと気になつていたものだから」

パックは顔をほころばせた。

「へえ、そりや光榮だ。どうだい、格好いいだらう？　こう見えて

も、こいつの性能は最新式のものにひけばとらないぜ」

「誤解しないで。あたしが言いたいのは、になながらくたがちんと飛ぶなんて思えないといふことなの！　このレースにはわがペガサス社の社運がかかっているんだから、あんたみたいなおつちよこちよいにしゃしゃりでてほしくないのよ」

「な、な、な……なにい！」

パックは真っ赤になつた。そんなパックをへ口へ口はぎよつひらしながら見上げている。

「なんでマローン少佐はあんたの宇宙船の出場権をとれるようつ力を

貸したのかしらね。すくなくとも、この宇宙船を直接見れば、ともにレースに参加させる気にはなれないはずよ」

怒りをパックは必死になつておもえていた。拳をにぎりしめ、ぶるぶると全身がふるえている。

「ねえ、相談なんだけどあんたこのレースを辞退してくれないかしら。あたしはこのレースに死亡事故なんかで汚点を残したくはないのよ。あたしの提案をのんびれれば、それなりの報酬をはらう用意はあるわ。あんたのあのみじめな整備工場を、ちゃんととした最新式のものにするくらいは払えると思うの」

「ああん、といつ音が響いた。

「パック！」

「へ口へ口は叫んだ。

ミリイは頬をおさえている。信じられない、といつ驚愕の表情がうかぶ。そろそろとその手がさがつた。おさえられた頬に、パックの手形があかく浮き上がつた。

「あ、お、おれ……」

あわてたのはパックだった。おもわすミリイの頬を平手で打つてしまつたのである。怒りにまかせたといえ、じぶんのしでかしたことにうろたえていた。

ミリイはパックをじっと見つめている。唇がこまかくふるえ、目がまつがだ。と、そのおおきな両目からぽろぽろと大粒の涙がこぼれおちた。

「「」ごめんよ。おれ……ほんとにごめん」

必死になつてパックはミリイに一歩近付いた。

「近付かないで！」

ミリイは叫んだ。じりじりと後退ると、ぱっと身を翻して駆け出す。あとにまほほぜんとなつたパックとへ口へ口が残された。

「パック、どうすんだよ。あんなことして」

「知らねえよ、思わずやつちましたんだ」

はあー、とため息をついてパックはすわりこんだ。

「ああ、じうじょう。あいつはペガサス社の社長だぜ。あんなことして、絶対出場権を取り消されるよ」「うーん、パックは頭を抱えた。

洛陽宇宙港にミリイの泣き声が響いている。

わあわあと大声で泣きながら、ミリイは歩いている。あたりの人目もかまわず、ミリイは泣いた。

「お嬢様！」

そのミリイの様子に驚いて遠山が飛び出しつきた。

「え、どうなさいたのです？ なにかあったのですか？」

ミリイは遠山を見た。きょとんとして、まるで少女のような表情になつている。が、すぐに顔がくしゃくしゃになると、また大声をあげて泣きだした。

「お嬢様……！」

「こないでよお……！」

ミリイは遠山を振り払つて走りだした。遠山はとまつてくれていた。こんなミリイは初めて見る。

「そうだ、こんなときはあの人に……」

あわてて遠山はふところから携帯映話器をとりだした。

「ミリイくん。どうしたんだ」「

わあわあと泣き続けて歩いていたミリイを呼び止めたのはマローン少佐だった。ミリイはマローンのすがたを認める足をとめた。無表情なマローンの顔がいまは有り難かつた。いかにも同情されているような表情は、いまのミリイにとって辛いだけだった。

「マローンさん……」

「遠山さんから連絡があつてね、わがしていたんだ

ミリイはしゃくづあげた。

「まあ、わたしの船へいり

マローンはミリイをうがした。ミリイは從順にマローンにした

がつた。

少佐の宇宙船はシリウス号といい、ペガサス社のものである。ミリイのユーローン号にくらべ、一世代は前の設計だが、マローン少佐はそれにじぶんなりに改造をくわえていた。

ペガサス社独特の、すべての機関、航法装置を船殻にうめこむ方式をとっているので、船内はこのクラスの船にしてはひろびろとしている。船室はマローンの趣味で、ややクラシックな趣に統一されていた。床材はこまかに組み木となっていて、壁もまた黒光りする木材になっている。ちょっと見ただけでは、これが宇宙船の内部とは思えないくらいで、どちらかといつとふるい帆船の内部といった趣だ。

「こんな身体になつて、いまは普通の人間の食事はとれないが、嗜好品だけは味わえるのだよ。コーヒーはどうかな」

「いただきます」

「鼻をすんすんいわせながら、ミリイはこたえた。

「砂糖はいくつかな。ふたつ、みつ?」

「みつ……」

シリウス号の船室に、香ばしいコーヒーの薰りがただよつた。

「ミルクはいれるかね」

ミリイがうなずき、マローンはコーヒーにミルクを垂らした。トレイに乗せてミリイの皿の前にはじぶ。

「まあ、飲んでみたまえ。これでもコーヒーを煎れるのは自身があるんだ」

ミリイは言われるままマローンの煎れたコーヒーを口にふくんだ。熱い液体が喉をとおり、胃に落ち着くとミリイの気持ちもおさまつってきた。マローンが言つたとおり、そのコーヒーは眞っかつた。口に含むとコーヒーの薰りが馥郁とひろがり、その苦さのなかにほのかに甘味を感じる。

ミリイの前にデスクをはさんですわったマローンはパイプをとりだし、煙草の葉をつめはじめた。火皿にパイプ用のライターで火を

つけ、口に呑む。

しばらく無言の時間が船室をみたした。ミリィはゆっくりとコーヒーを飲み、マローンは黙つて口に脚えたパイプを吸い付け、煙をはきだした。

一杯のコーヒーを飲みおわり、ミリィはまつとため息をついた。

「で、どうなんだね」

マローンに尋ねられ、ミリィは頬をあかくした。その頬がふるえている。

マローンは待つた。

「あたし、あんなことされたの初めてです」「ふむ。だれにも初めてということはある」「マローンの眉がうごいた。

「あたし殴られたんです。このあたしが！」

ミリィは堰を切つたように話しだした。パックに叩かれたいきさつをすつかりぶつけたのである。マローンはミリィの話の途中、注意深く質問をはさみこんだ。ようやくすべてを話しあわったミリィは肩で息をしている。激情が彼女の身体を震わせた。

「それで全部かね？」

マローンに言われ、ミリィは顔をあげた。

「え？」

「パックくんがきみを殴ったのはわかった。でも、どうしてそんなことをパックくんはしたのかな」

「そんな……、マローンさんはあいつの味方をするんですか？」

「味方だの、敵だのとそういうことじゃないよ。なぜ、あのパックくんがきみに手をあげたのかな、と思つてね。きみがそうしむけたのじゃないのかな」

ミリィは顔をふせた。図星だったからである。

ぱつりぱつりとミリィは話しだした。パックに言つた言葉をすべて話した。こんどはマローン少佐は黙つてミリィの話に耳をかたむけた。

「なるほど、それでいまはビビつつかな」

「どう思つて……？」

「ミコイくん、さみはパックくんに言つたことを後悔しているんじやないかな」

言われてつとミコイは胸をつかれた。

そうだ、たしかに彼女は後悔していた。なんであんなことを言つたのだろう。ミコイの顔色をよんとマローンは身を乗り出した。

「どうだい、パックくんと仲直りをしてみないか」

「仲直り……」

ミコイはつぶやいた。

「パック、『』飯が炊けたよ」

へロへロは宇宙船のコックピットを見上げてさけんだ。おう、とういう声が聞こえてパックが昇降口からどたどたと降りてくる。朝になつてへロへロは宇宙港の離着陸床にじかに七輪をおいて、金網をひいて魚を焼いていた。もうもつと煙が上がり、へロへロは顔をしかめながら団扇でばたばたと煙をあおいでいた。

「なにを焼いているんだ」

「鰯だよ」

「なんだよこれ、消し炭みたいになつてるじゃないか」

パックはあきれた。金網に乗つた鰯はまつくりになつっていた。
「ぜいたく言つなよ。金がないから、こんなのは手に入らなかつたんだ」

「しようがねえなあ」

パックは宇宙船のなから卓袱台をかかえて地面においた。へロへロは焼いた鰯を皿において飯を茶わんによそつた。ふたりは宇宙船のしたで朝食をはじめた。

「いい天気だなあ」

飯をかきこみながらへロへロはパックに話しかけた。しかしパックは沈んだ顔でいる。しかも手元の茶わんの『』飯に手をつけていな

い。

「パック、どうしたんだ。食欲がないのかい」

「え、ああ。そうか」

パックはへ口へ口の言葉にわれにかえるとそもそもと飯を口に運びはじめた。

「パック、どうしたんだよ。食べたくないのか。それともなんか心配があるのか」

「いや、なんでもない」

「昨日のことを気にしているのかい?」

かちやつとパックは茶わんと箸をおこした。どうやら図星だったようだ。

「なあ、へ口へ口。おれ、あんなことじつもレースに出られないだろうなあ」

「んー、どうかなあ」

へ口へ口は口籠もつた。本音を言つとレースなんか出場したくはないのである。だがそんなことを言つと、パックは怒りだすだろう。と、へ口へ口は目を見開いた。パックの背後を見つめている。パックはへ口へ口の視線に気付いて背後を振り返った。

「……！」

パックは目を丸くした。

なんとミコイが立つていた。となりにはマローン少佐がいる。

「やあ」

パックはびつり言つていいかわからず、まぬけな声をあげた。

「おはよー」

おずおずとミコイは口を開いた。

「ああ、おはよー……」

ミコイの意図がわからず、パックはあいまいな返事をした。

「どうしたんだ、出場権の取り消しでも告げにきたのかい?」

パックの言葉にミコイは顔をあかくした。

「そんなんじや、ないわ」

ミリィはなぜかもじもじしている。マローンがミリィの肩に手を置いた。ミリィはマローンの顔を見上げた。マローンはうなずいた。「あの、あたし。あんたに謝りつとおもつて……」「え？」

「あたし、わるかつたと思つてる。あんなこと言つて……。あんたが怒るのも無理はないわ」

「……」

パックは立ち上がった。

マローンが口を開いた。

「パックくん、ミリィくんと仲直りしてやつてくれないか」

「マローンさん……」

「ミリィくんは後悔していのんかいだ。どうだい、ここで握手して仲

直りしては？」

「じゃあ、おれレースに出席できるんですね？」

「そのとおりだ。ミリィくんと仲直りするかね

「もちろん!」

パックははねられとした笑顔になつた。ミリィに向かって、右手をのばす。

「ミリィ……つて、呼んでいいかな?」

「いこわ。あたしも、あんたをパックと呼ぶわ

「よし、ミリィ。仲直りだ」

ミリィの右手がのばされ、パックの右手をつかんだ。ふたりはマローンの田の前で握手をかわした。

「これがおまえの趣味なのか」

宇宙港でシルバーはにがにがしげに宇宙船を見上げた。そばにはタイガーがいる。

「ああ、いいだろ?」

タイガーは胸をはつた。かれの田の前の前の宇宙船はクロームイエローと黒の縞模様に塗装されている。

「おれさまの名前がタイガーだからな、虎の模様を塗つたんだ。黒の塗装部分は熱の超導体にしているから、排熱対策もばっちりだ」「なんという下品さだ。船名はつけたのか」

「フライング・タイガー号だ」

「おう、とシルバーはうめいた。まるでチンドン屋である。クロノス社の技術陣が叢知を結集した最新の宇宙船がこのありさまである。たしかに宇宙軍への納入がなくなつて、こうじつた機会にしか使えないのであるが、ほんらいならこのようなレースに参加させるべき機体ではないのだ。」

「かならず優勝するのだろうな。おまえにこの機体を提供するからには、かならずミリイのゴニゴーン号に勝つてくれないとこまるぞ」「あんな小娘！」

馬鹿にしたようにタイガーは鼻を鳴らした。

「おれのライバルはマローンだ」

「マローン？ ああ、伝説の人物だな。宇宙軍の英雄といつやつだ」「そうさ、數度の深宇宙探査でおどろくべき成果をもちかえり、三十年前の恒星間戦争では帝国銀星章をうけている。お偉いやつさ」タイガーはマローンの贊美をしているように見えて、そのくちぶりはいかにも苦々しげだつた。その目はくらい情熱を燃やしていた。そんなタイガーを見てシルバーは口をひらいた。

「どうした、なんだかマローン少佐に恨みをもつていいようだが……」

「あんたには関係ねえ！ これは、おれとやつとの問題だ」

タイガーはひくくうなつた。かれはマローンのことを考えただけで怒りがこみあげてくるようだつた。そんなタイガーをシルバーは不安そうにみつめた。タイガーが提案したフライング・タイガー号の装備について、シルバーは喉元までこみあげてくるおそれを感じていた。シルバーはタイガーのこのみで虎の縞模様に塗装されたフライング・タイガー号を見上げた。宇宙船は朝の日差しにまがまがしいシルエットを見せている。

洛陽宇宙港にはシティのあらゆる報道メディアがつめかけ、3Dイメージカメラの砲列が離着陸床に蝋集する無数の宇宙船にむけられていた。この日のためにあつまつた宇宙船のほとんどはペガサスか、クロノスの個人用宇宙コットでしめられている。この一社の宇宙船は、太陽系のほとんどの需要をまかなっていたのであるから、これは当然といえる。ペガサス社の宇宙船はどちらかというと優美なシルエットをもち、クロノス社のそれはややすんぐりとして見える。

そのなかでカメラが集中的に狙っていたのはミリィのコニコーン号と、マローン少佐のシリウス号であった。

下馬評によれば、この一機が今回のレースの話題をやがつかつこうになつていた。ミリィのコニコーン号は、彼女がこのレースの企画者であり、しかもスポンサーであることと、まだ十八才の美少女であるところとで、マローン少佐のほうはかれが宇宙冒険物語の伝説的な英雄であるということ、経験豊富なパイロットであるということで優勝候補とみなされていたからである。

ふたりが洛陽宇宙港をあるくと、ぞろぞろと報道陣がまとわりついていた。

「すじいねえ、ミリィちゃん。まるでスターだぜ」

ヘロヘロはパックの宇宙船のコックピットから宇宙港の離着陸床を見下ろして叫んだ。両手を望遠側に調節しているため、ふたつの目は顔からとびだしてまるで出田金のような顔になっている。

「そんなことはいいから、航路の数値を入力しておいてくれよ。ヘロヘロ」

ちえ、とヘロヘロは舌打ちをするとコンソールにむきなあつた。両腕をめまぐるしく動かして、コンソールのキーボードを叩く。

「手をつかつて数値入力をやるとは思わなかつたよ

ヘロヘロはぶつぶついしながら、レースの航路を入力した。なにしろ航路計算のためのプログラムはヘロヘロの頭のなかにあるのだから、その結果を入力するのはヘロヘロしかいないのである。

最初のレースはこの洛陽宇宙港から出発して、火星のシチルス・シティの宇宙港へ達するコースをとる。この時期、地球と火星は合の位置にあり、最接近していた。平均的な出力のエンジンを搭載した宇宙船なら一週間の距離だ。

ただしそれは経済的な放物線軌道をとった場合のことである。今回はレースということもあり、コースは最短距離をとることになる。予想される行程は三日である。

ヘロヘロがひつしになつて航路を入力しているあいだ、レースの開催は迫っていた。

ぼつぼつ出場を申請したパイロットは自分の機体に乗り込み、エンジンに点火をはじめている。ひゅうーん……という甲高いエンジンの始動音があちこちから聞こえはじめ、機体がこまかく振動しはじめる。

斥力プレートが青白くかがやきはじめ、反重力効果によつて上昇気流が発生し、かげろうがたちのぼつた。

「おい、いそげ！」

パックはヘロヘロを急かせた。ヘロヘロは黄色い顔にあぶらあせをうかせて夢中になつて航路を入力している。パックはヘロヘロの入力をまたずにエンジンの始動スイッチをいた。

けけけけけけけけ……！

けけけけけけけけ……！

パックは始動キーを何度もひねつたが、エンジンは後部で奇妙な音をたてるだけでいつこうに点火しない。

「入力おわりい！」

ようやくヘロヘロはすべての数値を入力しあわり、ほつとして叫んだ。ふと見ると、パックはコンソールで始動キーと格闘している。

「パック……？」

「くそおー。」

「ばん、とコンソールをひとつ叩くと、パックは操縦席から安全索をひきはがして立ち上がった。工具箱をひとつつかむと、だだだつと後部機関室へ駆け込んだ。

「へロへロ！ おれがいいと言つたら、始動キーをいれろー！」
パックの声がしたから聞こえてきた。

「えー？」

パックは機関室に駆け込むと、巨大な旧式のエンジンのしたにもぐりこんだ。カバーをひっぱがし複雑なパイプ類をむきだしにする。そのからみあつたパイプのなかに手をさしのべ、パックは調整をはじめた。

「パック！ レースがはじまっちゃうよー。」

心配になつたへロへロはたまらず機関室のパックの傍へやつてきた。

「ひつこんでろー！ おまえはおれの合図でキーをいれるんだ」

パックにひなられ、へロへロは後ろ髪をひかれる思いで操縦席へもどつた。はらはらしながら機関室をふりむいている。

「全機、発進せよー！」

その指令がすべての出場宇宙船のコンソールに発せられ、洛陽宇宙港の宇宙船はいっせいに飛び上がつた。

轟つ、といふ音とともに数十の宇宙船がブースターを噴射せしる。爆音がびりびりとあたりの空気をふるわせた。

そのなかでミコイのコニコーン号、マローンのシリウス号、そしてタイガーのフライング・タイガー号がすばやく飛び出していく。みるみる高度をあげ、宇宙船のむれはたちまち成層圏を飛び出していく。

「おおおおん……」といつ衝撃波がおくれてやつてきた。カメラの砲列はその宇宙船の群れを追つていつた。あつといつ間に宇宙船は

ちこちくなり、視界から消えた。あとには水蒸気がしろい煙の塔のようになつた。

「ああ、行つてしまわれた……」

ミリイの宇宙船の出発を見送つた遠山はつぶやいた。うすい髪の毛を気圧の変化により殺到した強風が乱していく。

くくくくく……！

ふと奇妙な音に遠山はふりかえつた。

「！」

遠山の太い黒縁眼鏡のおくの両目が見開かれる。

なんと、この期におよんでもまだ出発していない宇宙船がある！

パックの宇宙船だつた。

宇宙港の離着陸床にどっかりとすわりこんだパックの宇宙船はさきほどから奇妙なエンジン始動音をたててびくともしない。

くっ、けけけけ……けけ……ぐるるるるん……すぱん！

宇宙船は絞め殺されるような音をたて、身震いしている。しかしふつりあいに巨大なブースターに点火するよつすは微塵もない。

遠山はひきよせられるようにふらふらとパックの宇宙船にちかづいた。

耳をちかづけるとパックの声が外殻を通して聞こえてくる。

「ちきしじゅう、動け！ このやうう！」

エンジンにもぐりこんだパックは汗みずくなつていて。必死になつてあちらの弁をひらき、こちらのパイプを締め付ける。両手は汗と、機械油でぬるぬるしている。

「パック……、もうあきらめたほうがいいよ

操縦席でへ口へ口はふてくされていた。その声を耳にしてパックはかあーつとなつた。

「えいくそ！ このくされエンジン！」

パックはたちあがると、旧式のエンジンをおもいきりけりあげた。ぐわあんん！

パックの爪先がエンジンの外板をけりあげる。

卷之二

けりあげた痛みに、パックは爪先をかかえてぴょんぴょんと飛びはねた。その痛みでさらに怒りがわきあがつたパックは真っ赤になつて無茶苦茶にエンジンにハつ当りした。

「なんでだ、なんで動かない！　えい、動け、このやう！」

がんがんがん、
と響いてくる音に遠山は耳をぴたりと宇宙船の外
殻におしあてた。

なにがいいんだよ？」「…………？」

とその音がはがれと途絶えが

ひゅうん。

ふいにおきた甲

「わ、わ、わ！」

あたふたと宇宙船から逃げていく
宇宙船が如虹^のなるならぐ^のく
すできない。

ほおーーん！

猛烈な黒煙がバックの宇宙船のブースターから噴出した。その黒煙に遠山のひよろながい身体が見えなくなる。ついでそのブースターからオレンジ色のほのおがのぞく。

パックの宇宙船はようやく地上から離れはじめた。機首はふらふらしているが、確実に上昇していく。ブースターからは噴射剤の水蒸気が猛烈にふきだしている。パックの宇宙船は離昇していった！あとにのこつたブースターの噴射煙のなかで、「ほほほ」という咳き込む声がした。

遠山たつた

一 なんたることだ……「

遠山の全身はまづくろに煤けていた。もともと上等でないスーツ

は、宇宙船がのこした黒煙でまくろになつてゐる。遠山は顔にかけていた眼鏡をはずし、ポケットからとりだしたハンカチで神経質に拭きはじめる。その顔は、眼鏡のあとがしろくのこり、ほかはまつくるになつてゐる。うすい髪の毛はべつたりと顔にかかつてゐた。「これで全機ぶじに出発したというわけか」

ふいの声に遠山は全身を緊張させた。

シルバーだつた。

かれはにやにやと笑いながら、遠山のみじめな格好を見つめている。遠山はそう背が低いほうではないが、それでもシルバーはあたまひとつ高い。

「シルバーさん。あなたもお見送りですか」

「まあな、おれもこのレースに宇宙船を出場させていのからな」

「なにかご用ですか？」

遠山は上田遣いになつて口をひらいた。シルバーは苦笑いした。「まあそり、警戒することもないじゃないか。おれは、いつかきちんとじつくり話し合いをしたいとおもつてきたんだ。どうかな、こんど一席設けないかね？」

「なんのお話です」

遠山はきょろきょろとあたりを見回しながら、そつと囁いた。シルバーのくちもとにじんわりと笑みがうかんできた。じつめ、保身にはしつておれのさそいに乗ろうとしているな……。

「おたがい、得になることだ。なあ、遠山くん。おれはきみの手腕をかつてているんだよ。あの小娘を社長にいただいて、ペガサスが業績をあげておるのは、きみが筆頭重役としてうまくやつているからだと睨んでおるんだ。きみのような有能な人間はペガサス社にはもつたない。なあ、うちにこないか。おれはきみのような部下がほしいんだ」

「ひきぬきのお話ですか？」

遠山の田はきょときょとしていた。

ちつ、とシルバーは胸のうちで舌打ちをした。こいつはたしかに

有能ではあるが小心でありすぎる。しかしこいつの頭のなかにはいつぱいにペガサス社の機密がつまっているこちがいない。なんとかして、こいつを味方につけた必要があった。

「もうびくびくすることもないさ。ここは宇宙港だ。聞き耳をたてるやつはどこにもいない。おれはきみがうそにきてくれれば、クロノス社の株式を格安できみにゆずつてもいいと思つてあるのだ」

「そ、それは贈賄ですぞ！」

「おれときみのあいだだけの了解つてやつさ。そう神経質になることはない」

遠山の顔は蒼白になっていた。こめかみから汗がふきだし、わくわくと顎がふるえている。

「わ、わかりました。あとでご連絡をいたします」

シルバーの顔に会心の笑みがつかんだ。やつた、落ちたぞ！

「うむ。待つているよ」

じゃ、と手をあげシルバーは歩み去つた。

そのシルバーを、遠山は恐怖の表情で見送つていた。

「へ口へ口、そつちのスイッチをたおせ！ そつちじゃない、右だよー」

「ど、どつちのスイッチ？」

「ほら、その青いやつだ！ たおせつたら！」

がくんがくんとゆれるコックピットのなかで、へ口へ口は操縦席にしがみついて必死にパックに言われたスイッチをさがした。ゆれる視界のなかで、そのスイッチが目の前にとびこんでくる。無我夢中でへ口へ口はそのスイッチをいた。

とたんにあたりがしづかになり、宇宙船は安定した。それまでは宇宙船は上下左右にはねまわり、へ口へ口は生きたこじもしなかつた。ふつ、とへ口へ口は顔につかんだ汗を拭つた。

「いつたいどうしたんだい、あれは？ やたら宇宙船はあつこいつちにねまわつていたけど

「噴射安定装置のスイッチがはいつてなかつたんだ」
パックもためいきをついてつぶやいた。えーと、とへロへロはパックを見た。

「なんでそんな大事なスイッチをいれわすれていたんだ！ 死ぬかと思つたぞ」

「いいじやねえか、ついつかりしてたんだ」

「うつかりじやないよ……」

はあ、とへロへロは操縦席にへたりこんだ。最初がこれではさきが思いやられる。

ふと見ると、パックは満面の笑みをつかべ操縦席にむかつていて、「たのしそうだね、パック」

「ああ？ うん、そうだな。なんしろ、ちゃんと宇宙へむかつているんだからな」

「宇宙へむかわない可能性もあつたのかい？」

へロへロはいまさらながに恐怖の声をあげた。

へへへ……、とパックは笑つた。

「なんしろ、手作りだからなあ。ちよつぴり不安はあつたさ。でもなんとか出発できてよかつたよ」

「信じられないよ」

へロへロは首をふつた。

操縦席の前面は窓になつていて、その窓越しに、外は暗くなつてくる。濃いマリンブルーからインディゴに。そして真つ黒になつて、星が輝きだした。パックはコンソールの計器をよんであーあ、とのびをした。

「自動操縦にきりかえだ。おい、へロへロ。らくこじでいいぞ」

「ともそんな気になれないよ」

「なにくよくよ気に病んでいるんだよ。無事、出発できたんだぞ」「ぼくは無事、地球へもどつてきたいよ」

「ちえ、とパックは舌打ちした。

ぐう一つ、とパックの腹がなる。

「そりいや、腹が減つたなあ。おい、めしにしようぜ」

「ああ……」

ふたりは操縦席からはなれ、後部の船倉へむかつた。

船倉の扉をいっぺにひらいたパックは目をまるくした。

「おい、へ口へ口。食料はどこだ？」

「え、それはパックが運びこんだんじゃないのか」

「なにい？」

パックとへ口へ口は顔を見合せた。

「積込みをわすれたんだ！」

同時にさけぶ。

へたへたとパックは床にすわりこんだ。

「どうすんだよ、火星までめしぬきだぞ」

「そんなん……」

へ口へ口も泣き声をあげた。

ぬけるように青い空。そしてぽつかりとうかぶ白い雲。海原には
まんまと水がたたえられ、海風にしろい波がちらほらと見えて
いる。

火星の植民計画がはじまって数世紀がすぎ、いまや火星の表面は
すっかり地球とおなじものとなつていて。火星表面の酸化鉄から遊
離酸素を放出する藻類が遺伝子改造でうみだされ、長期の地球化計
画のもと、火星の植民計画はおしそすめられた。すでに火星の大気
は地球の五千メートルほどの高度の大気圧くらいはあり、宇宙服な
しに人間が戸外で活動できるようになつていて。

「」シチルス・シティは火星の植民都市のなかでもっとも歴史が
ふるく、また人口もおおい。火星の玄関口とも言えるこの都市では、
ほとんどの建物の内部は一気圧に圧され地球からの来客に対応し
たものとなつていて。

「」うしてみると、地球とまったくかわりないわね

シチルス宇宙港のロビーにあるレストランで、ミリィは窓際に席

をとつて外をながめながら口を開いた。彼女の目の前にはマローン少佐がすわっている。窓のそとには宇宙港の離着陸床がひろがり、レースの出場宇宙船がぞろりと整列している。宇宙港は火星にあらたに生まれたシチルス海につきだすように建設され、すぐそばは海となつている。

「こうなるまで三百年かかったよ」

ふふふ……、ヒミリイイが笑う。問い合わせるよつたマローンヒミコイはこたえる。

「だつてマローンさん。じぶんがこの景色をつくりだしたような言い方ですもん」

「いや、ある意味それはただし。わたしはこの火星の地球化計画に初期のころからかかわっているからね」

「ええつ、じゃマローンさん。いつたいいくつになるんですか」

「三百才にあとすこしだ。わたしは若い頃にサイボーグとなつていね。慎重に手入れをすれば、そのくらい生き延びられる。しかしサイボーグとなつてからは人間的なようじびのおおくは失つてしまつた」

「最新のサイボーグ手術をうければいいじゃないですか。そうすれば外見はもとより感覚もおなじものが……」

「わたしはこのサイボーグ体に愛着があるのさ。なんしる三百年もわたしを生かしてくれた身体だ。いまさら変わらうとは思わないよ」

そうつぶやくとマローンはパイプをとりだし、煙草の葉をつめはじめた。

「この火星も変わったものだ」

そう言つとマローンはパイプに火を点けた。ひといき吸い付けるとあまいパイプ煙草の煙があたりにただよう。

と、アンドロイドのウロイトレスが近付いてきた。

「あのお密さま。ここは禁煙となつております」

ぶせんとなつてマローンはパイプをふところにしました。

「ほんとうに火星は変わったよ！」

ミリイは笑つていいものか、同情していいものか困つてしまい話題をかえた。

「そういうえば、マローンさんはちからをかしたパックの船はまだ到着していないわ」

「うふ、どうしたのかな」

「どうしてマローンさんはあのパックに肩入れをするんですか」

「ああ、かれはわたしの若い頃を思い出せんのだよ。わたしも若い頃、どうしても宇宙へ出たいと思って、手製で宇宙船を組み上げたんだ」

「そんなことがあったんですか」

ミリイはふたたび宇宙港に視線を漂わせた。と、その画面がおおきく見開かれる。

「あ、あれ！」

指差す方向をマローンが見ると、宇宙港の上空にさきりとひがるものがある。

「宇宙船だな……あれは……」

パックの宇宙船だった。

不恰好なごつごつとしたデザインの宇宙船がもうれつな勢いで宇宙港に降下してくる。宇宙船はあわや墜落といつ急角度で着陸すると、ぱくんとエア・ロックが開く。

「パックくんだな」

マローンの言葉通り、エア・ロックからパックとヘロヘロのふたりがころげるよう地面に降り立つた。ふらふらとしながら宇宙港の建物へ近付いてくる。火星表面の重力は地球の一分の一であり、ふたりは一步あるくたびにふわふわとはねるよう走った。

「どうしたのかしら、ふらふらしているじゃない……」

ふたりのすがたはミリイの視界から消えた。

ふりむくとふたりはエレベーターで昇つてくるところだった。

自動ドアが開き、ふたりはふらふらになつてエレベーターにまつってきた。

「どうしたの、ふたりとも」

ミコイが声をかけると、パックはがくりと膝をおつた。

「腹が減つた……なにか食わしてくれ!」

「三皿も食べてなかつたですってえ!」

ふらふらになつてゐるふたりを自分のテーブルへつれていき、つぎからつぎへ出される食事をたいらげてゐるパックにむかつてミコイはあきれた声をだした。

「ん……ひよひゅりょうほ、ふみほむのほはふへは…」

食料を積み込むのをわすれた、と言つたいらし。パックはくちいつぱいに食物をつめこんでいるからこゝなる。会話もそこそこにパックとへ口へ口は目の前にだされた食事をあとからあとから口におしこんでいる。そんなふたりを見てマローンはウェイトレスを手招きした。やつてきたアンドロイドのウェイトレスにマローンは小声で囁いた。

「とにかく、このふたりがいいところまで食事をだしてやつてくれ。なに、品田はなんでもいいから……」

ウェイトレスは心得顔になつてうなずいた。

それからが見物だつた。

どんどんとはこぼれてくる食事を、ふたりはわきめもふらすに食べ続けた。

ミリイはそんなふたりの食欲に啞然となつてゐる。

「まつたく……よく食べ続けられるわねえ!」

ミリイがあきれるのも道理で、すでにふたりの平らげた量は、ものすごいものになつてゐた。

そのころになるとロビーにいたほかの客も、このふたりの食欲に気が付いていた。ひとり、ふたりとミコイのテーブルに集まつてパックとへ口へ口の饗宴に見入つてゐる。

からになつた皿や、丂がうずたかく積まれ、あとからあとから食事が運ばれた。

「「ううそつせめ……」

ようやく満足した顔になつて、パックは箸をおいた。ぱちぱちぱちとまわりに集まつた見物客から拍手がまきおこる。パックはそれに気付いて照れた。

「よく食べたわねえ」

ミリイの言葉にパックは頭をかいた。

「まあね……へロへロも……」

隣に座つてゐるへロへロを見やつたパックはぎょつとなつた。

「おい、どうしたへロへロ」

へロへロはぐつたりとなつてゐる。顔色がいつものクリーム色からじりくなつてへロへロの身体は風船のようにふくれあがつてゐた。

「うう、お腹が痛いよお……」

「しつかりしろよ。馬鹿だなあ」

パックがへロへロを抱えあげるとずつしりと重い。へロへロはげふつ、とため息をついた。パックはやれやれとばかりに頭をふり、つぶやいた。

「こいつ、食い過ぎてやがる……」

へロへロは宇宙港の医務室へ運びこまれた。ベッドでうんうんとなつてゐるへロへロを診察したロボット医は首をふつた。

「いつたい、どのくらい食べたんです」

パックからへロへロが口にした量を聞いて、医者は呆れてしまつた。

「そりや無茶ですよ。たしかにこのロボットには食べたものをエネルギーに変換する変換炉がありますが、それにも限度がある。あまりに詰め込めば、当然処理しきれなくなるのはあたりまえです。人間で言つと消化不良ですな」

「ぶつぶついいながらロボット医はへロへロの口をおおきく開けさせ、なかになにかの薬を飲ませた。

「消化薬のようなものです」

薬を「ぐん、と飲み込んだへロへロは目をきょろきょろさせていた。と、へロへロはげふーつ、とげっぷをはいた。

風船の空氣がぬけるようにへロへロの身体がもとに戻つて、へロへロはすつきりとした顔色になつた。まわりを見回して、へロへロはてへへとれ笑いをした。

「あー、すつきりした！」

「ふつ、とミリイがふきだした。けけけ……とパックが笑い声をあげる。マローンも顔をほころばせている。

「とにかく、食べすぎには」「注意を」

ロボット医はまじめくさつてつけくわえた。

火星の大気は地球とおなじ酸素濃度になつていても、その大気圧はひくい。ちょうど五千メートルの高度とおなじほどの大気圧になつていて、したがつて地球からここにきた人間は、高山病に注意する必要がある。気圧もそつだが、気温もひくい。赤道上の年間平均気温は摂氏三度をわずかにうわまわるくらいだ。

シチルス・シティの宇宙港に集まつてゐるレース出場宇宙船のなかを、ミリイはゆつくりと歩いていた。その口元から息がしろくもれでいる。彼女は感慨にふけつていた。このレースのアイディアがうかんだのが半年前のことと、それからといつもの彼女は秘密裏にこのレースの実現のために奔走してきたのである。

ミリイはじぶんのユニコーン号の前で立ち止まつた。

この宇宙船はそれじたい信じられないほどの資産価値がある。内部に使われている貴金属もそつだが、この船を建造するためにペガサス社の技術陣はありとあらゆる最新のテクノロジーをそそぎこんでいた。ミリイはそつとユニコーン号の船殻に手をそえた。船殻はひんやりとして、そのなかに詰め込まれてゐる精緻な機関を彼女は感じていた。

「いい船だねえ。うらやましいや」

はつとミリイは声の方向を見た。

そこにはタイガーが立っている。かれは腕組みをして、口のはしに笑いを張りつかせていた。タイガーはゆっくうとミリイに近付いた。ミリイはそっと身をひいた。

「そり警戒しなくてもいいじゃねえか。おたがいレースのパイロット同士つてことで仲良くしようぜ」

のしかかるようにしてタイガーはミリイのやばの船殻に手をついた。ミリイが身をさけようとするとともう片方の手をついて、ちょうど彼女を腕でかこむような格好にする。

「なんの用なの」

ミリイはタイガーを見上げた。唇をきゅっとかたくひきしめ、眉をよせる。

「それそれ、その目がいいねえ」

タイガーは目尻をさげた。ミリイの鼻に、タイガーの口許から漂う酒のにおいがつきました。彼女は顔をそむけた。

「あんた、酔つているでしょ。臭いわ」

「なにちょっとひっかけただけや。ここは気圧がひくいから、ちよつと飲んだだけですぐまわっちまう。酒飲みはきらいかい？」

「あんたが嫌いなの！ もういいでしょ、あたしいかなくちゃ」

身を翻し、そこを去ろうとしたミリイの片腕をタイガーはつかんだ。

「なにするの！ 放しなさい」

「いいじゃねえか、仲良くしようぜ」

タイガーはつかんだ腕にちからをいれた。引き寄せられたミリイは悲鳴をあげた。

「なにしてんだ！」

鋭い声にタイガーが顔をあげると、そここいたのはパックとへ口へ口だつた。タイガーはじろりとふたりをにらんだ。

「ひつこんでな、小僧。おれの用がすんだら相手してやるよ
「たすけて、パック！」

ミリイはタイガーから逃れようと身を捩る。パックは決意の表情

をうかべた。

ひょい、ととなりのヘロヘロをかかえるとタイガーめがけて走りだす。

「お？」

タイガーは思わず手のちからをゆるめた。その瞬間、ミリィはその手をふりほどいて逃げ出した。

「あ、待て」

ミリィをふたたびつかまえようとしたタイガーにパックは腕にかかえていたヘロヘロを投げ付けた。

「わあ！」

ふいに顔にむけて投げ付けられたヘロヘロにタイガーはうろたえた。それが一本足の奇妙なかたちのロボットだと知つて、タイガーは怒りの表情をうかべた。

「野郎！」

太い腕をのばし、ヘロヘロの顔をしめつけた。

「ぐえええ！」

ヘロヘロはタイガーの腕にしめつけられ、目をしろくろさせた。

「死ね、こいつめ……」

タイガーは物凄い笑みを浮かべ、腕にちからをこめる。ヘロヘロの顔色が見る見る変わつっていく。その両目がかんぜんに白目になつた。ぶくぶくとくちのはしから、泡がふきだしてくる。

「タイガー、手を離しなさい！ 死んでしまうわ」

ミリィはさけんだ。そのミリィを、パックはそつと止めた。

「だいじょうぶ。いまに見てな

「え？」

ミリィはパックの顔を見つめた。パックはなぜか自信満々でいる。タイガーにしめつけられているヘロヘロはぶるぶると震えていた。と、頭のてっぺんについているアンテナの先端がちかちかと瞬きはじめた。タイガーはそれを見て、ふと不安げな表情になった。

「ぐああああっ！」

こんど悲鳴をあげたのはタイガーだった。

腕のちからがぬけ、ぽとりとへ口へ口をとりおどす。

ふらり、と足下がもつれ、タイガーはどた、と仰向けにたおれた。

完全に気絶して、白目をむいている。

「ど、どうしたの？」

「ぐロぐロの自己防衛システムが動いたんだ。非常のばあい、身体の表面に電流が発生する。まさかほんとうに役に立つとは思わなかつたけどね。タイガーは瞬間に十万ボルトの電流にふれて、気絶したつてわけさ」

「まあ……」

ミリィは言葉もなかつた。

ユニコーン号にかけこんだミリィはそのすぐあとに船の映話装置でシルバーに連絡をとつた。超空間通信装置は、光の速度で三分かかる地球と火星の距離を一瞬でつなぎ、かつての時差を解消している。

「シルバー、すぐタイガーをこのレースからはずしなさい」

「おやおや、いつたいどうしたというんですかな？」

映話スクリーンのむこうで、シルバーはあきれていた。

「いま何時だと思っているんです」

そう言つと、シルバーはわざとらしくあぐびをむらした。今日のシルバーはいつものダブルのスーツではなく、チェックの柄のパジャマを着て、頭にはナイトキャップをかぶつてゐる。いま洛陽シティは夜中の午前二時だった。

「あいつ、あたしに乱暴をしたのよ！ 色気違ひだわ。あんなやつを、レーサーとして認めるとはできないわ！」

「ふむ、そうですか」

シルバーは眉をひそめた。

「それはすまんことをしました。あとでタイガーにはわたしからよく言つておきますから、勘弁してもらえませんかな。あいつはわが

クロノスのエース・パイロットでね

「なに言つているの！ あいつは犯罪人よ。タイガーの罷免を要求するわ」

「なるほど。ミリイさん言いたいことはわかりました。しかしタイガーをやめさせることはできません。だいいち、そんなことをすれば困るのはミリイさんですぞ」

「なんですか……？」

「よろしいか、あの賭けをわすれたわけではありますまい」

「もちろんよ。このレースで勝ったほうはペガサス社の株を取得するところ……」

「そこです。もし、いま、タイガーをこのレースからはずすというなら、あの賭けの内容をわたしは報道機関に告げます。あの会話のすべては記録していますから、証拠がないなどとは言わせませんぞ！」

「あたしを脅迫するの？」

「なんと言おうとよろしい。もしタイガーをこのレースからはずすようなことがあればわたしはあの会話のすべてをあかるみにだします。世間はなんと言うでしょうかな。ミリイさんはこのレースに勝つためにわざとタイガーをこのレースから追い出した。そう噂するでしょうね。そうなつたらペガサス社のイメージは地に落ちるでしょうな」

「なんて卑怯なの……！」

ミリイは怒りに歯を食いしばった。

「おわかりかな。タイガーをこのレースから外すわけにはいかないということが。あいつのことはわたしからよく注意しておきましょう。今後、二度とこのようなことがないよう、厳重に言つておきます。それでいいですな」

「わかったわ……」

ミリイは歯のあいだからおしだすように答えた。くやしさがその表情にあらわれて、目には涙がたまっている。

映話装置を切り、ミリイはがっくりと首をたれた。

ぐつと顔をあげ決意の表情をうかべる。

なんとしてもこのレースには勝利してやる！

ゴーラーン号からでてきたミリイを、パックは待っていた。

「どうした

ミリイの顔をひとめみてパックは声をかけた。

「なんでもない。心配しないで」

ミリイはかぶりをふつた。微笑がうかぶ。

「これからレースはアステロイド・ベルトよ。あんたにそだいじょうぶ？」

「もちろんだ。最初はおくれたけど、これでまきかえしてやるさ」ミリイがいがいに元気なのにほつとして、パックは胸をはつてこたえた。

アステロイド（前書き）

レースはアステロイド・ベルトへ！
マローンを敵視するタイガーの計略。
そしてペガサス社乗っ取りを計画するシルバーの陰謀。波乱の展開
！

火星と木星のあいだに存在する微小天体を小惑星帯、またはアステロイド・ベルトとよぶ。ほとんどが小石ほどの岩くずで、小惑星とよぶにふさわしい直径一キロにたつする天体はすくない。それらの軌道はふるくから観測されすつかりわかつていて、このアステロイド・ベルトに関してはつい宇宙空間にぎっしりとすきまもなく岩がうかぶ光景を想像してしまうが、実際には小惑星同士の距離は平均三キロあまりとすかすかで宇宙船がそこを通過しても衝突する可能性はほとんどないのが現実だ。

しかしラグランジュ・ポイントとよばれる重力の平衡点にはその小惑星が集中的にあつまっている地帯がある。その一帯には巨大な小惑星が数多く点在し、そのなかに含まれている鉱物資源を採掘するため採掘業者がおおくはいりこんでいた。採掘業者はそれらの小惑星を破碎して採掘業をしていた。さらに重力の平衡点であることから軌道が安定しているということでさまざまな場所から天体を移動させていたため小惑星がびっしりと集中している。その一帯にはむかしから想像されていたすきまもなく小天体がならんでいる光景が現出している。この重力の平衡点は三つあり、レースのコースはこのなかでもつとも小天体があつまっている一帯を通過するよう設定されていた。

コースの設定には宇宙空間にブイをうかべている。そのブイから発信されたビー・コンが三次元のコースを宇宙船に教えるのである。コースの距離は全長一万キロあまりで、直径十キロあまりの空間がトンネルのように設定されている。亜光速で飛行すれば一万キロは数秒で通過できる距離だが、途中に点在する小惑星のためとてもそ

ういった速度は出せない。ここを通過するにはむかしながらの噴射剤をつかつた航法しかないのだ。

「うつひやあー、すげえコースだなあ。こんななかを、どうやってぬけるっていうんだい？」

三次元レーダーをのぞきこんだへ口へ口は声をあげた。レーダーには設定されたコースと、そこに浮かんでいる障害物がいくつもの輝点となって映つている。赤い輝点は空間にうかんでいる微小天体で、グリーンの輝点はコースの出場宇宙船である。宇宙船をあらわす輝点ひとつひとつには、その宇宙船の所属をあらわす記号がついている。障害物をあらわす輝点はコースいっぽいにばらまかれている。その平均距離は百メートルをきり、うつかり飛行すれば衝突は必至である。

コンソールの映話スクリーンに通話要請があらわれ、パックは受信了解のサインをだした。映話スクリーンにうかんだのはミリイだつた。

「パック、このコースは難しいわよ。わかってる？」

「わかつてゐるさ、ミリイ。そっちこそ、その綺麗な船を傷つけるんじゃないぜ」

スクリーンのミリイはにっこりと笑つた。

「あたしの腕を知らないのね。まあ、見てるがいいわ

「よおよお、ふたりとも仲いいじゃねえか。やけるねえ！」

ふいにふたりの会話にタイガーがわりこんできた。ミリイが映し出されているスクリーンが分割され、タイガーの顔が挿入された。

「タイガー、あんたなんか話すことはないわ。すぐ接続を切つてちようだい！」

「そんなに冷たくするなよ、ミリイちゃん」

タイガーは下品な笑い声をあげた。ミリイはすばやく映話装置に命令した。

「映話ネットよりタイガーの個人指標を削除！ 以後、タイガーの映話ネットの利用を禁止する」

「おい！ なにをしやが……」

タイガーの顔はスクリーンから消えてしまった。

「これでもう、タイガーはわりこめないわ。映話システムからしめだしたから

ミリィはせいせいした、という表情になつた。

「あれ、タイガーの船がレーダーから消えてしまつたぜ」

パックは三次元レーダーを覗き込んで口をひらいた。その通りで、タイガーの船をしめす輝点が消え、かわりに障害物をしめす赤の輝点にかわっている。

「宇宙船の現在位置をしめす表示は、映話システムに依存しているからよ。でも、コンピューターが継続して現在位置を把握しているから、赤色の輝点になつただけでなにもかわらないわ。これで、あいつの顔を見なくてすむと思えばすつきりするわ。もつとはやくこうしておけばよかつた」

「ふうん……」

全機が所定の位置につき、レースは再開された。宇宙空間にはホログラフィによってコースが表示されていた。このホログラフィによる表示から宇宙船がはみだすと、ポイントが減らされるのである。全機のブースターから水素核融合のほのおがひろがって、宇宙船は加速されていく。

「おい、ヘロヘロ。力場スクリーンをはれ！」

パックの命令で、ヘロヘロは宇宙船をつつむ力場スクリーンのスイッチをいた。たちまちこまかに、数ミクロンというおおきさの宇宙塵がスクリーンと衝突してチエレンコフ放射のひかりをはなつ。「だいじょうぶかなあ、こんなスクリーンで隕石がふせげるのかなあ」

不安そうな声をあげるヘロヘロにパックは肩をすくめた。

「まあな、スクリーンの説明書には直径十センチまでの隕石の直撃まで耐えれますとあるけど、なるべくならそんな隕石にはぶつかから

ないですませたいもんだ。おまえ、その目をひんむいて、レーダーを見ててくれよ」

「うん、わかった……」

なき声をあげ、ぐロぐロは三次元レーダーの監視にもどった。

た。レーダーには「ースの進路に点在する隕石や、小惑星が宇宙船の進行につれつきつきと迫つてくる。ぐロぐロは大声をあげた。

「パック！ まんなかからおおきこのがきたよー！」

「よっしゃ！」

パックは操縦席でハンドルをにぎり、おおきく船体をかたむけた。ずしん、と船体がふるえ、スクリーン全体がおおきく波立つた。

「いまのはどのくらいのおおきだつた？」

パックにたずねられ、ぐロぐロは両手でおおきをしめした。

「こーんなだつたぜ！」

「またそんなおおげただぜ。せいぜい、いのくらうだつたぞ！」

パックは片手でまるをつくりてみせた。

「ぐロぐロ、音響効果解析装置をいれてくれ」

パックの命令でぐロぐロはコソソールのスイッチをいれた。

とたんに風きり音のよつな、ひゅうひゅ「ひ」う「ひ」という音が聞こえてくる。「おお、とこう轟音がひびき、おおきめの小惑星が宇宙船のそばを通過した。スクリーンの近くを通過したためか、がりがりといつこするような音が聞こえてくる。

もちろん、真空中の宇宙空間でのよつな音がひびくことはありえない。宇宙船の外部センサーがどちらかありとあらゆる情報を、このような効果音をつけることによって直観的にわかりせることがこの装置の目的なのである。

レーダーが接近してくる障害物をとらえると、接近警報のかわりにこのよつな風きり音や、ドップラー効果などの音によつてそれが近いか、遠いかをわからせるのである。ひゅうひゅうといつ風きり音は、宇宙船が真空中をすすむと宇宙空間にみちている宇宙塵や、太陽風の影響をうけることをあらわしてくる。もちろん、近くを航

行するほかの宇宙船もそのエンジン音を効果音としてパイロットに教えるので、パイロットはほかの船がどのくらい自分の船に近付いているかわかるというわけである。

パックの宇宙船はコースの、もつとも小惑星がこみあつた地区を通過しつつある。

前方にある障害物をパックがよけるたびに、ひゅうつゝ、とか、ごおつ、とかいう音が立体音響をもつて遠ざかっていく。そのたびにヘロヘロは首をすくめていた。装置のつけた人工的な効果音とはわかつても、その効果は絶大で、ほんとうにすぐちかくをうなりをあげて小惑星が通過していくような気になる。

「パック？」

ふとパックを見上げると、その顔にはびっしりと汗がういていた。

「くそ、やばいぜ！」

「ど、どうしたんだい？」

「ちくしょう、反応がにぶすぎる！ よけきれなくなるぞ！」
パックは悪戦苦闘していた。ハンドルをひつしに捌いているのだが、なかなかおもった通りに宇宙船はむきをかえてくれない。どうしてもワンテンポずれるのだ。

「ごつん！ がりがりがり！」

またひとつ隕石が宇宙船の力場スクリーンをこすつていった。スクリーンがその質量をうけとめ、船体に直撃しないようにエネルギーに変換するのだが、そのさいスクリーンの表面に火花がちつていく。

「パック……！」

ヘロヘロは恐怖のあまり、くちに指をくわえていた。

ミリイもまた悪戦苦闘をつづけていた。

といつてもパックと違い、彼女のユニコーン号は最新の設備をほこり、彼女ひとりでどんな条件でも航行できるのでコースをすれたり、とか障害物にぶつかるとかそういうレベルのはなしではなかつ

た。彼女にはこのレースに自機で優勝をやらわなければならぬといつフレッシュヤーがかかつっていたのである。つぎつぎとレース前方にあらわれる障害物を彼女はあざやかなハンドルさばきでよけていく。彼女の運転に、ゴニコーン号は敏感に反応し、スクリーンにかすりもせずにかわしていった。

「やるな、ミリイくん。きみがこれほどの腕前とは、知らなかつたぞ」

ミリイの映話装置にマローン少佐の声が聞こえてきた。ミリイはちらりと船窓をのぞいて、マローンの乗ったシリウス号の位置を確認しようとした。もちろん、各機は平均数キロという距離がはなれているため肉眼ではわからない。ミリイはさけんだ。

「全周展望モード！ 各宇宙船イメージ強調！」

ミリイの命令で彼女のすわっているコックピットが一瞬で宇宙空間にかわった。彼女の椅子は宇宙空間に浮かんでいるようなイメージになり、レーダーにとらえられているレース参加の宇宙船が3D映像となつて空中にうかんだ。それらの宇宙船の位置は実際のそれとは違つていて、彼女の宇宙船からどのくらい距離があるか直観的に判断できるように調整されている。それによるとマローンのシリウス号はミリイのゴニコーン号の右隣に位置し、わずかにミリイがせりかつていていたようだつた。しかしその差はわずかで、ミリイが気を許せばすぐに逆転されるような距離だつた。

しかしミリイはマローンにぴつたりとよじそつよつてタイガーの宇宙船を認めていた。意外とちかい。

「マローンさんもね！ 気をつけて。タイガーがあんなにちかく！」「ああ、わかつていてる。あいつには気をつけているよ。それより前方を注意したまえ。小惑星の集団が近付いてきている」

マローンの言葉にミリイはあわてて前方を見つめた。

かれの言葉どおり、またひとつ小惑星の集団が近付いてくる。

「障害物、光量増感！ 陰影強調！」

ミリイの命令で、せまつてくる小惑星のかたちがくつきりと光と

影のコントラストが強調された。ミリィはハンドルを握り締め、右に左に、上に下にとコニコニーをあやつった。すでにその脳裏にはタイガーのことも、ペガサス社のこともなくなっていた。いま、ミリィは純粹に運転をたのしんでいた。

ふとマローンを見ると、かれのシリウス号もあざやかな動きをみせてせまつてくる小惑星をぎりぎりのところでかわしている。

タイガーの宇宙船といつと、これは一機がスクリーンになるべくダメージをあたえないよう障害物をさけているのにたいし、まるでさけようという気配はない。がつん、がつんとスクリーン前方に障害物が衝突してもまるでおかまいなしである。よほど力場スクリーンの強度に自身があるらしい。

そのときミリィは妙なものを見た。

タイガーの船にちかづいた小惑星が、その前方かなりの距離で破壊されたのである。まさか、レーザーをつかっているのだろうか？ このレースで、障害物をさけるためとはいえ武器を使用するのは禁止されている。

「コンピューター！ タイガーはレーザーをつかっているの？」

ミリィの質問に船のコンピューターは即座にこたえた。

「そのような反応はありません。タイガーの船からはいかなる電磁波の放射も観測されておりません」

「そう、それならいいけど……」

ミリィは自分の見まちがいであるうと判断した。しかし彼女はここでもうすこしコンピューターに違つた質問をすべきであった。それならコンピューターはタイガーが禁止されていた武器を使用していることを答えたうから。彼女のあたまのなかには、武器といえばレーザーなどの放射装置しか思い浮かばなかつたのである。

「こいつら、こいつらー、このこのこー！」

フライング・タイガー号のコックピットでタイガーはぶつぶつとつぶやきながら、スクリーンにあらわれた敵宇宙船をつきつきと撃

破していく。もちろん、敵宇宙船は小惑星などの障害物をコンピューターが変換して映し出した映像である。タイガーはコースの障害物に敵宇宙船のイメージをあたえ、それらを撃破することに醉っていた。かれの指が操縦桿の引き金にかかると、タイガーの宇宙船からは敵宇宙船に弾丸がとび当たると破壊される。つきつぎに空中で破壊される敵宇宙船の映像に、タイガーはくちのはしによだれをためて狂ったように射ちづけた。ミリィがタイガーの力場スクリーンと見たのは、かれがその手前で小惑星を破壊していたせいであつた。もちろん、タイガーの機体にも力場スクリーンはそなえられていたが、タイガーが接近してくるほとんどの小惑星を射ちまくつていたため、いまは使われていないのとおなじである。

タイガーの船に備え付けられたのはあきらかに武器であった。それも宇宙軍が極秘に開発した最新鋭のものである。

それは通常物質を、光速ちかくまで一瞬に加速する加速器であつた。それも電磁的な加速ではなく、重力勾配をつかつた加速装置である。局所的な重力勾配をつくりだすトライダルタイプのトンネルに通常物質がおくりこまれると、それは重力制御をつかつた加速装置で一瞬で光速ちかくまで加速される。重力レール・ガンといえるこの兵器は射出のさい電磁放射などの外部から観測される痕跡を残さないため、急襲作戦に最適な兵器だつた。しかしこの兵器にも致命的な欠点があつたのである。それは真空中でしか使用できないといふことである。なにしろ通常物質を光速ちかくに加速するのである。射出した瞬間、それは大気中の空気などの分子と衝突し、たちまちおそろしいほどの放射線をだして崩壊する。敵はおろか、射出した装置そのものすら破壊してしまうのである。したがつてこの兵器を使用できるのは宇宙空間などの真空中にかぎられていた。タイガーはこの装置の存在を知り、じぶんのフライング・タイガー号にとりつけた。さらにこの装置をタイガーは調整し、加速限度をわざと半分ほどにしていた。わずかな真空中にそんざいする星間物質との衝突による反応も電磁放射を発するので、それらが発生しないぎ

りぎりの速度に加速をせていたのである。

接近する小惑星をつぎからつぎへと破壊しながらタイガーはマローンのシリウス号を見つめていた。かれはこのレースでシリウス号を破壊し、マローンを殺すつもりだった。

がんがんがん、とつづけざまに力場スクリーンに隕石が衝突し、パックの宇宙船のスクリーンはおおきくゅがんだ。コントロールの計器をよんだへロへロは大声をあげた。

「だめだ、これ以上ぶつかるとスクリーンがもたないよ！」

「くそー！」

「あきらめようよ、パック。もういいじゃないか、ここまできれたんだ」

「なにをいいやがる！ あきらめるだなんて、できねえよ」「だつて、これ以上どうすんのさ。リタイアしようよー！」

「ちくしょう…… そうだ、へロへロ。そのスイッチをオフにしてくれ

「え、どれのことだい？」

「そいつだよ。田の前にあるだろ？」

いわれてへロへロは田の前のスイッチを見つめる。

「姿勢安定制御のスイッチしか見当らないけど……」

「それだ、そいつをオフにしてくれ」

「ええっ、なに考えてんだ。これを切つたら、この宇宙船どこへ飛んでいくか、わかりやしないぜ」

「それでいいんだよ！ はやく切れ！」

パックがへロへロのまづを向いてわめいた。へロへロはびくつとなつて、あわててスイッチを切つた。

とたんに、ぐうんとパックの船は船首をふりでたらめな方向へすすみはじめた。パックは両手、両足をつかってハンドルをまわし、ペダルをふんで船を安定させようと奮闘しあじめた。

「わあ！ ぶつかる！」

「口へ口は前方にせまつてくる小惑星をあげて思わず両手をつぶつた。

「ジージージー……、と小惑星が船のぎりぎりを通過していく音が聞こえる。効果音解析装置は、通過する小惑星にたいしひくい振動音をあたえていた。びりびりと可聴域ぎりぎりの低周波が船ぜんたいをふるわせる。

「へへ、つまくこつたぜ」

「口へ口がおれるおれる皿をあけると、パックはにんまりとしている。

「どうこつことなんだい？ つまくこつた……つて」

「姿勢安定制御はたしかにこつをまつすぐ飛ばせるんだけど、そのかわり反応がにぶくなつてしまつんだ。こんなに小惑星が密集しているところじや、まつすぐ飛ぶことはなんの意味もない。それよりすばやく動けるほうが大事つてわけだ」

「そう言いながらパックはハンドルを切つた。また船体ぎりぎりの距離で小惑星をかわしていく。口へ口は首をすくめた。

「それはわかつたけど……わあっ！ いまのはあぶなかつたなあ……、じつめぢやくぢやな動きじや……ひいつ！ 舌かんだ……！」

「宇宙船は上下左右にでたらめなコースをとつてている。

「この船をつくるさい、パックはとにかく推力をたかめるためありとあらゆるつてを利用してブースターを船体にとりつけている。とはい、ブースターの製造元はばらばらで、その推力はもとより出力特性も同一ではない。したがつてそのまま推進すれば、出力特性のばらばらなまま噴射し、どこへ進むかわからないとこつことになる。そのためすべてのブースターを制御するファーディバック回路が必要になるのだが、その制御がかえつてすべてのブースターの反応をにぶくしていたのだった。

パックの船は小惑星のあいだをあつちへふらふら、じつちへようよろという具合に飛行していく。あわや衝突とこつぎりぎりのところでパックは逆噴射をかけ、あるいは横方向への制動ジェットをつ

かつてかわしていく。そのさまはびつ見てもどこか故障しているとしか思えない。

「なんだ、あのやうう。どこかこわれたんか?」

タイガーはスクリーンのなかのパックの宇宙船をにらんでつぶやいた。こころみにタイガーはパックの船の航路を表示してみた。それは酔っ払いの千鳥足にて、まったく予測不可能なコースをとつていた。しかしふしきとコースにばらまかれている障害物にはあたらないでぎりぎりのところでかわしていた。

「どつちにしる、おれには関係ねえ……そろそろふけるとするかい」

タイガーはコースをはなはじめた。

「ツクピットに警報音がひびく。

「コースから離れています。コース修正してください」

「ンピューターの合成音声にタイガーはかつとなつて怒鳴つた。

「つるせえ、てめえなんか黙つてろい!」

「コース修正……」

タイガーは腰からレーザーガンをだすとスピーカーにむけて引き金をしぼつた。スピーカーは白煙をあげて沈黙する。

コースを表示するホログラフィーのラインからタイガーのフライング・タイガー号はコースを逸脱してしまつた。その結果、コースを監視するレーダー・システムからタイガーの機体は消失してしまい、存在しなくなつてしまつた。タイガーはこのレースから消えてしまつたのだ。ミリィがタイガーを映話システムから排除した結果だつた。タイガーはこれをみこしてわざと、ミリィに嫌がらせをしていたのだった。

タイガーは機体をおおきくバンクさせた。コースをショート・カットして、上位グループのさきまわりをするつもりである。

レースの上位グループにはマローン少佐のシリウス号がいた。

コースも終点にちかづき、障害物である小惑星もまばらになつて

くる。マローンはスピードをあげ、ほかをひきはなしにかかった。このために改造をくわえたブースターは全推力をだし、みるみる速度をあげていく。たくみなマローンの操船で、シリウス号は小惑星のすきまをぬけていきトップにたつた。ほかの船はこのシリウス号のいきおいにおいてきぼりになつていった。

「すげえ、あつというまにマローン少佐のシリウス号がトップだぜ！」

レーダーでレースの推移を見ていたパックは感嘆の声を上げた。それほどマローン少佐のいきおいはすばらしいものだつた。パックもまたじょじょに順位をあげていたが、上位にはほど遠いものだつた。ミリィのユニコーン号も上位にいたが、それでもマローンの敵ではなかつた。マローンのシリウス号は単独トップとなつていた。コースの終点にちかづき、シリウス号はまっすぐゴールへつきますんだ。

「きたきた……」

タイガーはレーダーを見つめ、にたりと邪悪な笑みをうかべていた。指先は引き金にかかっている。

タイガーのフライング・タイガー号は小惑星にぴったりとはりついていた。タイガーはこのためにコース上に存在する小惑星の軌道を調べ、コースの終盤ちかくにちょうどいい位置にくる小惑星の目星をつけていたのである。小惑星にひそんでいたため、タイガーはレーダーの監視の目からのがれていた。

マローンの乗るシリウス号はコースのまんなかを突き進んでくる。核融合のほのおが大きくひろがつてゐる。すでに後続の宇宙船はおきくひきはなし、独走だつた。

タイガーは照準にシリウス号をとらえていた。重力レールガンの局所重力発生装置の効果で、強大な重力勾配が発生する。

シリウス号の進路にはもうなにもない。

タイガーはゆっくり引き金をひきしほつた。

「まあ飲みたまえ。遠山くん、いけるんだろう?」

「いえ、あまり飲めませんの……そうですか、ではいっぱいだけ

……」

グラスのふちいっぱいまで注がれたビールを遠山はくちをむかえるようにして飲み干した。ぱちぱちぱちと遠山のまわりに座った接待アンドロイドの女性たちが、嬌声をあげて拍手をする。テーブルのむこうにはシルバーがすわっている。あいかわらず葉巻をくわえにやにやわらいを唇のはしにうかべながら遠山を見つめていた。

ここは洛陽シティの歓楽街で、シルバーの個人的な要談のさい使われることのおおい秘密クラブである。種を割れば、この店はシルバーがスポンサーとなっている。したがってこの店にくるのもシルバーがこれはと目を付けた相手だけで、この店で籠絡するためにつれてくるのだった。店でだされる酒にはごく微量ながら麻薬が混入してあり、これを飲まされた相手はシルバーの暗示にかかりやすくなるのである。そういう心理状態になつたころあいを見計らつてシルバーは要談をするので、相手はほとんどシルバーの言いなりとなつてしまふのである。

ただこのシルバーの手にどうしてものらない相手がいた。それがペガサス社のミリィであった。なにしろ未成年で、しかも女の子だ。そういう相手をこういう店につれてくることもできず、シルバーは迂遠ながら木村にスペイのまねごとさせたり、古株の重役に手を回して代表質問権をかちとるための株のとりまとめなどという方法をとつてきたのだった。その手駒のひとつとして、今夜シルバーは遠山という筆頭重役をつれてきた。この男がシルバーの味方となればペガサス社の乗取はほぼ半分成功したも同然だった。

シルバーの見るところ、遠山はペガサス社の事実上の宰領者といつていい。この男がいなかつたら、ペガサス社は即時ばらばらになつてしまつだらう。しかしそういうものかミリィはこの男にそれほど篤い待遇をもつてむくいてはいよいよだつた。とうぜん、遠山

はミリイにたいし不満をもつてゐるはずである。

グラスからになり、シルバーは接客のアンドロイドに命じてつぎつきとビールを注がせた。遠山の両隣には金髪と、赤毛の美人アンドロイドがべつたりとへばりついてその胸を遠山の両肘におしつけるようにしている。注がれた酒をつきからつぎへと飲み干した遠山の眼鏡のおくの視線はふらふらとさまよいはじめた。顔は真つ赤とこりより、いまは蒼白にちかい。かなり飲んでいるはずだ。シルバーはがくり、がくりと首をふつている遠山にささやきかけた。

「どうだ遠山くん、うちにこないか。きみはペガサス社ではそれほどの待遇を得ていなければ、きみがうちにくれば、ペガサス社の一倍、いや三倍の年俸を約束しよう。それともちろん、役員待遇もな」

「役員待遇？」

「そうだ、クロノス社の役員だ！ 株式の譲渡も約束する」

「しゅ、しゅごい待遇でしゅね……しゅごい……」

ろれつの回らない口で、遠山はにたにたと痴呆のような笑みをうかべる。

「それでだ、きみにやつてもらいたいのはペガサス社の内情をしらせてしまいということなんだ。なに、たいしたことではない。きみほどの地位があれば、簡単なことだ

「内情つて、なんでしゅか……？」

「そうだなあ、たとえばペガサス社の代理店契約の中身とか、販売ルートの詳細な中身とかだ……、きみなら探し出せるんじゃないのか」

「ふむ……できますよ……シルバーさん。しかし、わたしはそんなことはしない」

ふいに遠山の口調がかわりシルバーはぎょつとなつた。

見ると遠山の醉眼はいつのまにか冷静なそれにはかわり、顔色も平常にかわっている。

「な、なに……ああま？」

まさに変貌といってよかつた。さきほどまでのだらしない初老の男はそこにはなく、精悍といつていい表情の何ものかがそこにはいた。いまや酔いはかれの表情のどこにも存在はしていなかつた。

「酒に精神を変化させる麻薬をしこんでいるという噂がありましたが、それは事実でしたな、シルバーさん。うちの重役があなたのために株式のとりまとめをしているのではないかといつ疑いがあつたので調査していたのですが、この店で接待をうけてからどんな忠実な役員でもあなたの言いなりになるということはどういうことかと思つていたのです。そこでわたししみずから調査にまいつたということです。シルバーさん、わたしに自社株の譲渡を申し出るなどいう贈賄ばかりでなく、こういった違法の店を経営したことでもあなたはじゅうぶん告発をうけることでしょう」

「だれだ、きさまは？ あの遠山か」

「そう、わたしは遠山だ。ペガサス社の筆頭重役でもある」

ぼうぜんとしているシルバーはどやどやとふみこんでくる足音に顔をあげた。見ると数人の男女が手にレーザーガンをかまえふみこんでくるところだつた。かれらの背後には巨大な警察ロボットが完全武装ですばやく店内に展開し店の客や従業員たちにたいし武器をかまえている。

「洛陽警察だ。シルバー、違法な取引とともに、麻薬をつかつた強制的な意志操作のうたがいで逮捕する。おまえの発言はすべて記録されていたぞ」

刑事のひとりがじぶんの腕をまくりあげた。そこには特殊な光線でしかうかびあがらない帝国警察本部のホログラフィー刺青があつた。この刺青は帝国警察でしか採用していないもので、偽造不可能とされている。帝国の記章と警察官の身分をあかす個人指標がそこには刺青されていた。

刑事がかれのために権利をよみあげているなかでシルバーはさけんでいた。

「なぜだ！ なぜ、そんなにあの小娘に忠実なんだ、おまえは？」

「それはわたしがそう設計されているからだ。わたしは製作された瞬間からペガサス社とミリィさまに忠実であるよう期待されている遠山のことばにシルバーは愕然となつた。

「きわめ……ロボットか……？」

「そうだ。わたしは特A級のアンドロイドだ。このような目立たない外見ののも、ミリィさまをお守りするのに都合がいいからでもある。もしわたしが筋骨たくましい強烈な印象の外見をもつていれば、おまえのようなペガサス社をねらう人間の警戒心を刺激して、このような巡回査をしかけることはできないだろ？」「ううか、それでミリィは後事をおまえにたくしてレースなどという馬鹿げたことに専念できたんだな。ロボットが忠実なのもあたりまあだしな……」

「いいや、ミリィさまはわたしアンドロイドだといつことはなにも知つてはいない。わたしはあくまで人間としてミリィさまに付き従つてきたからね」

「くそ、なんてことだ……ロボット相手に、おれは踊つていたといふわけか」

シルバーはがつくりと肩をおとした。

捜査員のひとりが顔をあげた。耳にイヤフォンをはめている。

「遠山さん、レースのことですが……」

「え？」

遠山は不安げな表情になつた。もしやミリィになにかあつたのか？

「マローン少佐のシリウス号が爆発したそうです」

「マローン少佐が？」

それを聞いたシルバーの顔色がかわつた。タイガーだ！ シルバーは直感していた。タイガーがこれにはからず関わつてゐるはずだ。

マローン（前書き）

タイガーの悪事はあばかれた！
マローンの語る、タイガーの過去。

タイタンは土星の衛星のひとつであるが、きわだつた特徴のある衛星として知られている。それはタイタンが太陽系の惑星をめぐる衛星のうち唯一、大気をもつためである。メタンとアンモニアにみちた大気はタイタンを水素燃料の供給基地として発展させた。地球を盟主とする帝国の初期、太陽系を脱出して恒星間宇宙へ乗り出す植民宇宙船の前進基地としてタイタンは発展してきた。やがて超空間航法が確立してからは水素燃料の供給基地としての役目はおわったが、いまでもタイタンは冥王星や彗星のあつまるオールト雲にうかぶ通信基地の後背地として機能している。超空間航法が確立してから数世紀、人類はすつと人類以外の知的生命体を探索してきたが、いまだ見付けだせないでいた。太陽系辺境星域にうかぶ超長波通信基地は人類以外の知的生命体をもとめていまも銀河系のありとあらゆる空域を探査していた。

タイタンの地表には太陽系レースの出場宇宙船がせいぞろいしている。どんよりとした重い雲がひくくたれこめ、零下数十度の極寒のメタンのブリザードが吹き荒んでいた。タイタンの地表にわずかに突き出たドームのなかに出席者はあつまっていた。ドームのなかは暖房でむつとするくらい暑い。しかしラウンジに集まっているパイロットたちの顔はどれも暗くしづんでいた。

みなマローン少佐のシリウス号の爆発を見てショックをうけていた。

「どうするんだよ、ミコイ

ミコイとパック、それにヘロヘロはひとつずつテープルに集まつて

いた。

パックが口を開いた。ミリィは「え？」とこつ顔になった。

「どうする、つて……？」

「レースだよ！ 」そのままつづけるのか、どうなかつて」とか

「わからないわ……、あたしどつしたらいいか……」

ミリィは頭をかかえ、首をふった。赤い髪の毛がはりつとぼぼにかかる。

「やめるんなら、地球の本社に連絡しなきゃならなーぜ」

「ええ、そうね……」

ミリィはほんやりとこたえる。

「なあ、マローン少佐が死んでショックなのはわかるけどさ、このレースの責任者はきみなんだぜ。」レコリコイがめそめそしてたら、みなこまるじやないか

「めそめそなんかしてないわよ」

ミリィはきつとなつた。ほほに血の氣がもどつてくる。パックはにやつと笑つた。

「やうじやなくちやな！ わたかまでのミリィはまるで死人だつたぜ」

「馬鹿ねえ……。でもあたし、どうしてもマローン少佐が死んだなんて信じられないのよ。どつかで少佐は生きてるんじゃないかと思えてならないの」

ミリィの言葉にパックは胸をつかれた。

「うん、おれも少佐が死んだなんて思えないな」

パックの言葉にミリィは身を乗り出した。

「あんたもそう思つ？ あの爆発で、少佐の死体は見つからなかつたし……だからといふわけじゃないけどなんだか少佐は生きている、そう思えてならないのよ」

「いいや、マローンは死んだ。そつこまつてるー！」

「！」

だしぬけに背後から大声がして、ミリィとパックは顔をあげた。タイガーだった。

「マローンは死んだ！ やつはアステロイドとぶつかって、死んだのさ！」

「わははは……！」 タイガーは高笑いをした。

その声に、ラウンジのパイロットの全員が注目した。みな、顔をあかくして高笑いをつづけているタイガーにつめたい視線をなげかけている。

「なんでも、なんでもてめえら。辛氣くせえ顔しやがつてよ。たかが、おいぼれパイロットが事故つて死んだくれえでよ。これでレースあきらめるつもりじゃねえだらうな」

「タイガー、もう一度言つて『ご覧！』

ミリィは怒鳴つた。田がいかりに燃えている。

「マローンはおつ死んだつて言つたのよ！ おい、ミリィちゃん。あんた、このレースをちゃらにする気じやねえだらうな」

「どういう意味？」

「どうもこうもねえや。たかがサイボーグのおいぼれパイロットが死んだだけでこのレースをなしにするなんて考えているんじやねえだらうなつてことよ。おれはこのレースに勝つてやるからなあ。こんなことでおしめえにしてもらいたくねえのよ」

「タイガー、あんたレースに出場できると思つてるの？ アステロイドのコースをじぶんから逸脱して、あの時点であんたの出場資格はなくなつたのよ」

「おい、おい。どうこうひつた？ なんでおれがレースの出場資格を取り消しになるんだい」

「あんたが『コースから出たからじやない。とほけないで』

「証明できるかい。おれがコースを出たつてことを？」

「なにを……馬鹿なことを！ だつて、あんたコースから出たじやない。レーダーで見てたわよ」

「それがおれのフライング・タイガー号だつてこと、どうしてわかる？ 言つとくがなあ、おれはあんたのおかげで映話システムから締め出されたんだぜ。あの時点でおれのフライング・タイガー号は

監視システムから切り離されたんだ。あれ以後からの俺の行動については、どんな証明も不可能だ」

ミリイはタイガーの言葉につまつた。それは事実だからだ。ミリイがタイガーを映話システムから切り離した結果、タイガーの行動については証明はできない。

「いいかげんにしろよな、タイガー！」

パックはテーブルをどん、と叩いてたちあがつた。タイガーはパックを見下ろして眉をあげた。

「なんでえ、小僧か。すつこんでな！」

「タイガー、おまえがマローン少佐を殺したんだな？」

タイガーはぐびすじまで真っ赤になつた。

「なに言いやがる、このガキが！」

「きつとしあうだ！ あんたはマローン少佐になにかうらみがあつて、それで……」

パックは言葉につまつた。

タイガーはにやりと笑つた。

「それでどうした？ 言つてみな。おれがどうして少佐を殺そうとするんだ」

タイガーはぐるりと周囲をにらんだ。出場パイロットたちはみなタイガーを注視している。その視線に、タイガーはいらいらとはじめた。

「なんでえ、手前ら！ おれがなにしたつていうんだ！ おれがマローンを殺したなんてデマかせ信じるつもりじゃねえだろうな？」

「タイガー、あんたの船にちょっと疑問があるのよ

ミリイの言葉にタイガーは目を見開いた。

「なんだとう？」

「あんたが提出したフライング・タイガー号の設計図の一部に、空白箇所があるわね。あれはいったいなに？ あたしはレースの主催者として、出場する宇宙船の設計図にはすべて目を通しているわ。どうやらあんたの船については、もっとよく知る必要があるようね

タイガーはだまつてしまつた。目だけをきょろきょろ動かして立ち尽くしている。ミリィは笑つた。

「どうしたの、タイガー。黙っちゃつたじやない。いいわ、これからうちの技術部の人間とあんたの船を調べることにするわ。文句ないわね！」

「くそつ！」

タイガーは歯噛みをした。さつと身動きをすると、手品のようにその手にレーザー銃があらわれた。はつとラウンジの全員が緊張した。タイガーは銃口をゆっくりと左右にふってじりじりと後退りをする。

「動くなよ……、こいつの引き金は軽くてな。へつ、お嬢さん。あんたの推理はただしかつたさ。おれの船には重力加速砲が装備している。マローンのやつをばらすために、おれがとりつけたんだ。もともとレースに勝つことなんざ田的じやねえ。マローンを殺すことにくらべりや、たいしたことじやないしな……。おれは船がほしかつただけだ。クロノスのシルバーの野郎からあの船を頂いたいまじや、あとくされはねえや！」

そう毒突くと、タイガーはさつと身を翻しエア・ロックへ駆け込んだ。エア・ロックの扉が閉まるとき、ラウンジの全員はわっとばかりにとりついた。

「あいつ、閉めきりやがつた！」

扉を開こうとしてパックはどなつた。エア・ロックの扉はびくともしない。内側から鍵をかけているのだ。

「あそこー、タイガーが……」

だれかが叫び、ラウンジの窓に全員がとりついた。超高密ガラスの向こう側にタイタンの地表がのぞいている。くらい夜空に、氷結したメタンが吹雪いていた。こまかにメタンの吹雪のかなた、駆けていく人影があつた。タイガーである。

「タイガーのやつは、宇宙服を着ているのか？」

「いいや、エア・ロックには宇宙服はおいていないぞ」

「それじゃ、あのままの格好で外にでたのか？ まさか、死んでしまったぞ！」

「あつ、タイガーの船が……」

その声に全員が離着陸床を見た。

そのなかにタイガーの宇宙船、フライング・タイガー号が鋭角的なシルエットを見せている。そのフライング・タイガー号の斥力ブレートが青白く光りはじめていた。

「逃げるつもりだ……。なんてやつだ。宇宙服もなしに外に出て、それでじぶんの宇宙船に乗り込むなんて……」

パックはつぶやいた。タイガーの船はじょじょに上昇しはじめていた。どおーん、と空気がふるえ轟音が聞こえてくる。タイガーは船の斥力ブレートだけでなく、ブースターも同時に働かせている。オレンジ色のほのおがあたりをあかるく照らした。

「あれ、なんだろう……」

パックのとなりに窓に顔をおしあてているへロへロがさけんだ。上昇しているフライング・タイガー号の行く手の雲間から、もうひとつ光があらわされた。もう一隻の宇宙船が着陸しようとしているのだ。船体はちいさく、連絡艇ほどのおおきさである。

上昇するタイガーの船と、着陸してくる連絡艇はすれちがつた。タイガーの船が噴射するブースターのあおりをつけ、連絡艇はふらついた。

「あつ、落ちる！」

連絡艇はおおきくあおられ、失速した。急角度で地面に船首をむけると、ぐんぐんと高度を落としてしまう。連絡艇の操縦者はそれでもなんとか機体をたてなおそつとこころみているようだった。しかしその努力もむなしく、連絡艇は地面と激突した。

もくもくと黒煙がたちのぼった。

「ひでえ……」

「だれだか知らないが、間が悪いときに着陸したもんだ。あれじや、生きてはいだらうな……」

「おい、エア・ロックを開けろ！ 助けにいかなきや………」

「よし。だれか、工具をもつてこい！」

全員が手分けしてタイガーガーが閉めきつたエア・ロックの扉をこじあけるため工具をもちよってきた。

「まかせる。こういうことには慣れてる」

パックはまわりの人々をおしのけると扉の開閉装置にとりついた工具をつかって開閉装置の回路をむきだしにする。電子回路をたちまち無効にしてしまい、扉は開いた。それを見ていたまわりのパイロットはおもわず歓声をあげた。

全員が宇宙服を着込み、いつせいにタイタンの地表へととびだす。墜落した連絡艇は地表に激突して跡形もない。地表のひろい範囲に連絡艇の破片がばらばらにちらばつていた。衝突の際の高熱で、大気中のメタンと化学反応をおこしたのか、金属片の表面が真っ黒になっていた。

「乗組員はどこだ？」

「わからん。あの衝突だ。骨ものこっちゃいないんじゃないか？」

宇宙服の無線でパイロットたちは会話をかわした。ヘルメットのライトを点灯し、地表をさがしまわっている。

「あつ、人がいるぞ！」

「なんだと？」

いつせいにヘルメットのライトが一点に集中した。そのひかりのなかにくつきりと地面に倒れた人影があつた。

わらわらとパイロットが集まり、倒れている宇宙服の人間をかかえおこした。

「生きてるのか？」

「わからん。とにかく、ドームへ連れていくつ」

宇宙服の人物は全員にたすけられ、ドームのなかへ入った。ドームのなかへはいると、氷点下数十度からいきに通常の気圧と気温にさらされ、ヘルメットがまっしろに霜がおりてしまう。ヘルメッ

トをはずした全員は驚きの声をあげた。

「マローン少佐！」

まさしくそれは行方不明のマローン少佐そのひとだった。プラスチックの人口皮膚がその証拠である。

みなほうぜんとなつて声もなく見つめている。ミコイは驚きのあまり両手をぐちにあて身動きもできないでいた。

「まさか生きていたなんて……」

と、横たわっていたマローン少佐のまぶたがぱつちりと開き、そのしたのレンズがむきだしになつた。ぱつ、とレンズのおぐが光をとりもどす。

むつくつと少佐はおきあがつた。

「やあ……、どうやら助けてもらつたようだな」

少佐はさうこうとにこりこりと笑いかけた。

おおーっ、とパイロットたちは歓声をあげた。

「生きていたんですか、少佐！」

パックが声をかけるとマローンはうなずいた。

「パックくんか。生きていたさ。あいにくこのサイボーグ体は頑丈でね、なかなか死ぬことはできないよ。アステロイド・ベルトで船が爆発して、わたしは宇宙空間になげだされて氣絶してしまつた。ひろい宇宙空間でわたしひとりを見付けだすのは不可能だつたろうから行方不明になつてしまつたのだろう。ようやく意識を回復して救難信号を発信して救助してもらつたというわけだ。みんなに心配かけるわけにはいかないから、連絡艇をかりてここまでやつてきたのだが、着陸前にすれちがつた船の噴射で操縦がくるつて墜落してしまつた。あれは見間違えじゃなければ、タイガーの船のようだつたが……」

「そうです。タイガーは逃げ出しました

ミコイはタイガーとのやりとりを説明した。マローンはうなずいた。

「そうか、やはりわたしの船を攻撃したのはタイガーだったか……。

小惑星にかくれて接近してなにかを発射したのはわかつたのだが、そんな武器を装備していたとは、

「少佐、どうしてタイガーはあんなにマローンさんを憎むんですか？」

パックが尋ねてマローンはちょっと黙つた。

「うん、それは……まあわけがあるんだよ」

あきらかに言いたくないといつ雰囲気だった。パックのうしろからミコイが口をさしさんだ。

「マローンさん。」のさご、そのわけについてのを教えてくれませんか

「そうか……わけを知りたいというのか……みんな、そうかい？」
まわりに集まつたパイロットたちはいっせいにこくんとうなずく。
「しかたないな……だれにも話したことはないんだが。みんな、この話は秘密にしていてくれ。ほんらいなら軍法会議の内容はもらしてはいけないんだからね」

そう前置きしてマローンは話しあじめた。

8

それは十数年前のことだつた。

辺境星域にある惑星、「蒼海」にマローン以下数百名で構成される特殊部隊が大気圏降下を開始していた。全員、帝国宇宙軍の第四特殊装備をしていた。これは少数の精銳による潜行計画を意味した。惑星「蒼海」は海陸比率が9：1となつて、海の部分がほとんどをしめる。地球からの距離は一百光年と、銀河帝国の範囲外ぎりぎりに位置した辺境星系だった。植民されて一世紀以上と、植民惑星のなかでは歴史がふるい。人口は数百万をかぞえ、農産物が主要な産出物である。

マローン少佐以下、特殊部隊を乗せた着陸艇は惑星の明暗境界線あたりから大気圏突入を開始した。この角度からならば太陽の背光

にかくれ、大気圏突入の形跡を隠すことができるからである。

大気圏に突入して着陸艇が減速を開始すると、マローン少佐たちは防護力プセルにはいつて空中に放出された。地上一万メートルの高度でカプセルが開き、特殊装備で身を固められた隊員は斥力プレーでゆっくりと地上へ向けて降下はじめた。

目的の地点は惑星総督府である。

総督府には宇宙軍の総督軍が駐屯していたが、情報によりこの惑星をおさめる辺境伯爵によつて拘束されていた。

伯爵は宇宙軍を拘束して惑星に軍政を施き、みずから皇帝を僭称して戴冠式を強行したのである。伯爵はこの惑星を手中におさめ、独立を宣言するつもりである。

そのために伯爵は超空間航法をおこなうための空間配列を破壊する工作をおこなつてゐたのである。恒星と恒星をつなぐ超空間航法にはそのための空間配列が安定していることが前提である。その空間配列を破壊すれば、もはや地球から宇宙船が超空間を通つて到達することは不可能になる。そうなれば惑星「蒼海」は地球を盟主とする銀河帝国から孤立してしまつ。伯爵はそれをねらつたのだった。超空間航法の出入口の破壊には、シユバルツ・シルツ半径わずか数メートルほどのマイクロ・ブラックホールがつかわれる。重力制御装置を暴走させ、超空間航法出口にブラックホールを形成すれば空間に歪曲が生じ通路は閉じられる。ブラックホールはやがてホーキング放射によつて蒸発してしまつが、閉じられた超空間の出口は一度と復活することはかなわないのである。

地上に降りた特殊部隊の一一行はその場でこの惑星の住民の服装に着替えた。マローンは目立つため人里はなれた場所で部下たちの報告をうけることになる。

総督府のあたりは昔ながらの水田地帯で、農家がぽつぽつと点在する牧歌的な風景がひろがつてゐた。季節は初秋をむかえ、畑にはとりいれをまつばかりに穂をたれたコシヒカリの稻穂が実つてゐる。総督府そのものは巨大な石組みの宮殿で、小高い丘のうえにそびえ

たっている。部下たちは旅の商人といつたいでたちで農村にむけ情報収集にでかけていった。

やがて部下たちの無線により拘束された宇宙軍兵士たちの居所が知れ、マローンは総督府への突入を決意した。

夜明けをまつてマローンは部下をひきつれ、総督府へ强行突入作戦を開始した。

タイガーは別働隊として背後をつくという配置だった。
マローンは首尾よく総督府へ突入を成功させ、伯爵一家をおいつめた。

しかしそこで思わずことがおきた。

タイガーが裏切ったのである。

別働隊として伯爵の背後をつかせる計画であったが、なんとひそかに密約を伯爵とむすび、伯爵の計画に手をかす見返りに支配者の一角として迎え入れることを約束させたのだった。タイガーはこの惑星を私物化するという夢にとりつかれてしまつたのだ。

マローンの突入部隊は窮地に陥つた。

武装解除されたマローンとその部下は伯爵の私兵によって処刑されることになつた。

そこでマローンは奥の手をつかつた。

あわや処刑という一瞬、マローンは加速状態にはいつた。

反射機能を予備の電子頭脳にまかせ、人間の数百倍という速度で動く加速状態にはいつたのである。サイボーグ体であるからできる離れ業だった。

見物している伯爵たちの桟敷席へむけマローンは一瞬にして音速をこえた速度で殺到した。伯爵の鼻先でマローンは空中へ急角度に飛び上がつた。その瞬間、マローンがつくりだした高密度の空気の壁が伯爵のすわる桟敷席を破壊した。すなわち衝撃波である。

特殊部隊はこのマローンの加速状態を計算にいれて編成されている。マローンがみずから加速状態にはいると、特殊部隊は敷域下催眠学習により自動的に動いた。

あつという間の出来事だった。伯爵はなにがおきたか理解しないうちに頸椎をおつて死亡した。タイガーは命拾いしたが、マローンの部下にさらされた。

「ちくしょう、おれの計画をよくも……」

部下にさらされたタイガーはマローンの前にひきすえられ毒突いた。マローンは脱力感と戦いながらタイガーの裏切り行為の記録をしていた。マローンの手には食用油のボトルがにぎられている。加速状態は一瞬にして数万キロカロリーのエネルギーを消費する。そのうしなわれたカロリーをとりもどすには、食用油をがぶのみするのがもつとも効果的だった。

マローンは部下の裏切りに慣れていなかつた。さらにはタイガーを軍法会議にかけることをおもい憂鬱でもあつた。しかしあきらかな軍令違反は見逃すことはできない。この惑星に駐在していた宇宙軍のなかにマローンより上席の階級の者はいなかつたせいでもマローンみずから軍法会議を開催するはめとなつてしまつた。

「軍令違反、および帝国への謀反はあきらかである。したがつて当法廷はタイガー少尉にたいし、階級剥脱と宇宙軍からの永久追放を決定する。被告タイガーはこれ以後、どのよつな特例でも宇宙軍にかかる仕事は禁じられる。なお禁錮十年を通達する」

マローンはタイガーにたいし精一杯の量刑の軽減をしたつもりだつた。しかしタイガーはマローンを憎悪した。惑星の支配者になるといつ夢をつみさらされた恨みは、かれにしこつをのこしたのである。

「反逆罪ってわけか！」

パックは怒りに顔をあかくさせた。

まわりのパイロット、そしてミリィもタイガーの帝国への反逆という重罪にショックをうけていた。

「そうだ。その判決を命じたのがわたしで、だからタイガーは恨んでいるのだろう」

「とんでもないこつた！」

パイロットのひとつがさきずしゆうひに口を開いた。

マローンは知っている。かれらが生まれてすぐうける記憶RNAの処方に、銀河帝国皇帝への盲目的な服従心がふくまれていることを。この記憶RNA処置により、銀河帝国のどの星でも共通の言語、知識が敷延することを可能にしたのだが、同時に帝国への服従心もうえつけられることになる。かれらの世代では帝国への反逆とは心理的に考えられないことでもあるのだ。マローンや、タイガーのようなふるい世代だけが植民惑星の独立などといふ夢にとりつかれることができるのである。

こういった強制的な服従心のすりこみは帝国に恒久的な平和をもたらすことになつたのだが、反面人類から気概を失わせることになつたのではないかとマローンはふと思つたりするのである。しかしこういった考え方はかれらにとつてありえないものであるから、なにも言わないことにしている。

逆罪なら、当然でしょう」

ミリィの言葉に、マローンは苦笑したのみだった。

「まあいいだろ？ タイガーは逃げた。もう、レースを邪魔することもないし、きみたちはこれから残りのレースをがんばってくれ。わたしの船はなくなってしまったから、これからきみらの応援をすることにするよ」

「 そうだよ！ ミリィ。 レースはどうするんだい」
パックの言葉にミリィはうなずいた。

「もちろん、続けるわ。みんなも、そ

ラウンジのパイロットたちがおひ、ヒリコイの言葉に

みんな、これからレースを続けることに熱意をもつているのがあります」と、の言葉は藍青いたるところが、さすがにアーティスティックな表現ですね。

大団円（前書き）

レースは最終の太陽面通過へ。
ミワイとパックはこのレースを制覇できるのだろうか？

レースは最終戦となつた。

それは水星から出発し、地球へふたたびもどるコースである。それに太陽面ぎりぎりを通過するコースで、宇宙船にとつては苛酷な耐久レースでもあつた。

水星にあるセレン採取基地がレースの出発地である。

地球の、月とほぼおなじくらいの直径の水星はかつては永遠に惑星の半面を太陽にむけたままだと思われていた。しかし実際には水星はゆっくりとではあるが自転していたのである。このレースがおこなわれる時間、基地は明暗境界線に位置し、地平線ぎりぎりに太陽が隠れていた。基地に勢揃いしている宇宙船は、その地平線のむこうにむけて出発することになる。

ミリィは映話システムをつかつて出発をまつすべてのパイロットに話しかけた。

「わたしはこのレースの主催者のミリィ川村です。みなさん、このレースに参加してくださつてありがとうございます」

映話システムの、スクリーンのむこうのミリィは晴れ晴れとした顔をしていた。遠山からの連絡で、クロノス社のシルバーが警察によつて逮捕されたことを知らされ、後顧の憂いがなくなつたからである。逮捕されたといつても、シルバーはその財力にものをいわせたすぐに特赦をうけるだろうが、いまミリィとシルバーのあいだでとりかわされた密約の効力は事実上なくなつたと考えていい。いまミリィの頭のなかにあるのは、このレースになんとしても勝利することだけであつた。

「いろいろあつたけど、このレースを開催してよかつたと思います。

みなさん、この最終戦正々堂々と戦いましょう!」

ぱりぱりぱりぱり、とパイロットたちがおののおのの「シクピットでミリイの演説に拍手をした。その拍手でミリイはほほを赤く染めている。

「いやー、格好いいぜ。ミリイ!」

パックは映話のプライベート回線でミリイに話しかけた。

「なによ、パック。ひやかさないでよ」

ミリイはパックの言葉にまた顔をあかべする。

「ミリイ、きみはこのレースで優勝をねらつてるのかい。もしかして?」

「あたりまえじゃない。そのためこのレースを開催したんだから「それじゃ忠告するけど、太陽面通過のコースをとるとき、太陽からはなるべく離れたほうがいいぜ」

「どうしてよ」

「その……、きみが間違えておれの工場にユーローン号をはいびこんだ。それでちょっとおれ、きみの船を調べてみたんだ。だから言うんだけど、その船は熱の遮蔽にちょっと難点があると思つよ」「うそ! この船はペガサスの最高の技術陣によつて設計されたのよ。欠陥なんか、あるわけないじやない」

「いや欠陥とかそういうんじゃなによ。きみの船の機関部は船殻のなかにおさめられている設計だ。だから容積がおおきくとれるんだけど、熱はまともに船殻に浸透すると思うんだ。いまでもミリイの船はポイントでトップにたつてるんだから、無理する」となつて!」

スクリーンのむこうでミリイはふつ、とふくれた。

「なによー。あんた偉そう!……。まつとくけど、この船はペガサスの最高傑作といつていにものよ。そういうあんたの船、レースを続けられるのかしら?」

「なんだと?……。ああそうかい!……おれの忠告が聞けないつていうんだな。勝手にしろ!」

パックはかつかとしてきて、そう捨て台詞を言つと接続をきつた。

「パック。またミリイと喧嘩したのかい？」

副操縦席でヘロヘロが心配そうにパックを見上げた。パックは肩をすくめた。

「へつ、あんな女。おれがわざわざ忠告したつていうのに、聞く耳もたないらしいや。太陽のほのとおでこんがり焼かれてから、おれの言つたことがほんとうのことだと後悔してもおそいぞ」

はらだちまぎれにパックはコンソールをばん、と叩いた。無性に腹がたつていた。

映話システムがレースがせまつてることを警告し、パックはコックピットに座りなおした。まわりの出場宇宙船は出発準備のため斥力プレートをじょじょに作動しはじめている。パックもまた船の機関をたちあげてそれにそなえる。もうミリイのことも脳裏からすっかり消えていた。こうなれば、レースでいい成績をとることだけがパックのすべてになつていた。

カウント・ダウンがはじまり、パックは緊張した。

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、ゼロ！」

出場宇宙船すべてのブースターがほのとおを噴出させた。

つぎつぎと宇宙船は急角度に上昇していく、暗黒の宇宙空間に消えていく。もちろん、ミリイのコニコーン号が先頭である。

パックもまた船のブースターの出力をいっぱいに開いた。すこつ、すこん、すこん、ふす……。

「！」

パックの顔色がまつさおになつた。

動かない！

「パック？」

ヘロヘロが声をかける。パックのこめかみからだらだらと汗がながれている。必死になつてパックはキーをまわしている。

きゅるるるるん、うけけけけ、すこつ、すこつ！

たよりない音をたて、パックの宇宙船は身震いを続けるだけだつ

た。

「なんでだよ、こんなときこーーー！」

パックは天をあおいで叫んだ。

「パック、あきらめようよ。やつぱりレースに出場するなんて、無理だつたんだ」

ヘロヘロの言葉にパックはかつとなつた。

「つるせえ！ あきらめるなんて、できつかい！」

パックはだつ！ とばかりに船尾の機関室へ走り込んだ。コックピットのヘロヘロへむけてさけぶ。

「ヘロヘロ！ おれが合図したら、キーをまわせー！」

「パック、なにか成算があるのか？」

「こんなもんはなあ……」

パックは身構えた。工具箱からおおきなスパナをとりだし、手に握り締める。

「叩けば動くんだよー！」

エンジンのハウジングに掛けてスパナをふりおろした。

「動けつ、こいつー！」

があん、と物凄い音が機関室にひびいた。

くるくるくるん……。

エンジンは身震いをした。

「！」

パックは目を見開いた。

どぞどぞどぞ……。

足元の床が震えている。

「動いた！」

パックは歓声をあげた。コックピットを振り向いてさけぶ。

「ヘロヘロ、始動キーをいれろーーー！」

「わかつた！」

ヘロヘロはコンソールのキーをひねつた。

轟つ！

ブースターが白熱する。パックはコックピットへ走った。

操縦席にパックはどびこむように身体をおしげみ、ベルトをかける。足元のアクセル・ペダルを踏み込むと、宇宙船は蹴飛ばされるように空中に飛び上がった。背中が座席に押しつけられパックは歯を食いしばってたえた。

「わあ！」

へロへロは座席からころころと転げあちてしまつた。

「馬鹿！ ちゃんとベルトをしめてる！」

パックはわめいた。へロへロは座席にまたはいあがつて安全ベルトをしめる。

宇宙船が水星の地表からぐんぐん高度をあげていくと、地平線のむこうから太陽が見えてくる。とたんに強烈な光輝が宇宙船の船窓をあぶつた。一瞬にして偏光シャッターが働き、船窓は真っ黒になつた。パックは環境解析装置のスイッチをいれた。環境解析装置は船外の太陽からの放射能や電離プラズマ流を風の音としてとらえていた。パックが船の針路を太陽へむけると、風の音はじょじょに高まつていつた。

「だいぶおくれた。急ぐぞ！」

パックは三次元レーダーをにらんでさけんだ。スロットルをめいつぱい開き、船体の上限ぎりぎりまで加速する。加速は一瞬にして10Gをこえ、船内の重力を中和する制御装置はそれにおいかずパックとへロへロのふたりは座席にうまりながらそれに耐えた。

「パック……なんだか、暑くなってきたんじゃないのか？」

へロへロは不安そうに口をひらいた。

パックは船外温度モニターを見た。太陽の光があたつている部分はすでに三〇〇度をこえている。

「心配するな。この船は、ちょっとやそととの熱なんかじゃ、びくともしないようできるんだ。外板はすべて超伝導物質でできているから、どんなに熱つせられても宇宙空間に放射するようになつて

「だから」

「そうかあ？ でも、ずいぶん暑くなっているようだけど……」

へロへロは黄色い顔にふつふつと汗をかいしている。パックもまた鼻のあたまに汗がういているのを感じていた。

「おつかしいな、こんなにはやく暑くなるはずないんだが」

パックはぐい、と額の汗をぬぐつた。たしかに船内の温度は上昇している。

「あちつ！」

コンソールにふれたパックは驚いた。コンソールは熱したフライパンのように熱くなっていた。

「ちくしょう、計算ちがいだ！」

だらだらと顔に汗をふきださせたパックは上着を脱ぎ捨て、ランニング姿になつた。

「パック、これでもレースを続けるつもりなのか？」

へロへロは泣きだしそうな顔になつてている。

「あたりまえだ。ここでひきさがつちや、男がすたらあ！」

パックはタオルを手にすると、くるくるとねじり鉢巻きにして頭にまいた。

「さあ、いくぜ。へロへロー！」

へロへロは肩をすくめた。

「これだもんなあ……命あつてのものだねだつてのに……」

ミリィはレースの先頭をきつて飛行していた。エンジンは快調で、太陽に接近していても船内温度はぴくりとも上昇していない。コックピットでミリィは全視界モードにして操縦をしている。こうするとミリィの操縦席だけがなにもない真空の空間にういているような状態になる。彼女の足元には、太陽の光球が巨大な姿を見せている。光球の表面からはプロミネンスが猛烈な勢いでふきあげていた。そのプロミネンスひとつはさしわたし地球はおろか、木星すらいくつものみこむほどのおおきさである。その光景はユーローン号の船外

カメラやさまざまセンサーの情報を船のコンピューターが再構成した映像で、もちろんライブそのままではない。

「環境解析効果音オン！」

ミリィの命令で、ヨニコーン号の環境解析装置は船内に轟音をひびかせた。解析装置は太陽面からの熱や光の放射を、火山のマグマのような音としてとらえていた。ふつふつと煮えたぎるような灼熱の光球の音は、ヨニコーン号のコックピットに響いている。

ミリィはちらりと三次元レーダーを見やつた。ミリィのヨニコーン号を先頭に、レースはやや団子状態でいる。しかしヨニコーン号はそれらの集団を完全にひきはなし独走状態でいる。こうなつたらほとんど勝利は確定だろう。

轟……つ、という音が船内にひびく。

センサーからの情報が効果音となつて再現されているのだ。船外カメラが太陽面から噴出する火炎をとらえている。音速の数十倍の速度で、太陽黒点の磁場にとられられたプロミネンスがほのぼの竜のようになつてくるのだ。ミリィは慎重にそのプロミネンスを回避するためコースをとつた。いまやヨニコーン号は危険なくらい太陽面に接近している。

と、船外カメラの映像が微妙に歪みはじめた。高熱と強烈な太陽黒点からの磁場が正常な映像をむすぶことをさまたげているのだ。突然、外部の映像がまつしろになつた。

どどどどど……と轟音が船体をふるわせる。

「コンピューターなにがあつたの？」

「プロミネンスに突入。高速のプラズマが通過中。ダメージは軽微です」

冷静なコンピューターの合成音声が報告する。轟音は高速プラズマが船体を通過する際の電磁効果を解析装置が轟音として解釈したのだった。ほどなく船外モニタの映像はもともどつた。

ミリィは船外の温度モニタの数値を見て唇をかんだ。危険なほどの高温である。船体の放熱システムは蓄えられた熱を放出できず大

量の熱エネルギーが船内の蓄熱システムに保存したままになつてゐる。すでにユニークーン号の船体温度は太陽の表面とおなじほどまでたかまつてゐる。

轟つ……。

船内のスピーカーがせまつてくる太陽フレアを感知して轟音をひびかせた。ミリィはあわててコースを変えた。これ以上船体にダメージをあたえるわけにはいかない。

そのときミリィは三次元レーダーを見落としていた。もし田をやつていたら、未確認の宇宙船がじりじりと距離をつめていることに気付いたろう。

未確認の宇宙船はフライング・タイガー号だつた。

タイガーはタイタンから逃げ出し、水星の内側の軌道に先回りしてゐた。太陽からの熱と光は、この時期太陽に最接近していたイカラス小惑星の影にかくれていたためダメージはなかつた。

タイガーは先回りをして、ミリィの宇宙船を重力レールガンで狙つていた。もうレースのことはどうでもよかつた。タイタンでフライング・タイガー号にしかけた武装をあばかれ、復讐心に燃えていた。

タイガーはミリィのユニークーン号を照準にとらえ引き金に指をかけていた。

にたり……、とタイガーは笑つた。

「あぶない！　にげる！」

突然の通信にミリィはびくつとなつた。映話システムを見ると、スクリーンにマローン少佐が映つてゐる。

「少佐？」

「ミリィくん、タイガーがねらつてゐるぞ！」

ミリィはその声に三次元レーダーに田をやつた。

「タイガー？」

ミリイはレーダーの輝点を見てさけんだ。いつのまにか、タイガーの船が接近していることに気付く。フライング・タイガー号からエネルギーの放出がレーダーに反応して、そのエネルギーはまつぐミリイのコニコーン号に接近していた。

コニコーン号とフライング・タイガー号のあいだには百万キロほどの距離がある。光速でやく三光秒弱である。フライング・タイガー号からのエネルギー放射は亜光速でせまつてくるためぎりぎりで避けられる。

ざーっ、ヒミリイのコックピットの外部センサがノイズに視界不良となつた。フライング・タイガー号からの高エネルギー放射がかすめたのだ。

びりびりとコニコーン号はタイガーからの攻撃でふるえた。光速にちかい速度で殺到する放射により、局所的な引力の傾斜が生じたのだ。

「マローン、生きてやがったか？」

映話からタイガーの怒鳴り声が聞こえてきた。

「こんなことがあるかもしないと思つて、金星基地にきていたんだ。タイガー、あきらめる。おまえの船は包囲されているぞ」

「なにい！」

スクリーンのむこうでタイガーはあわてた。きょろきょろと左右を見回している。その視線がレーダーにいく。あつ、ヒタイガーの顔色がかわる。

ミリイもレーダーを見た。

タイガーの船をとりまくように無数の輝点が見える。警察の宇宙艇であることをしめすホール・サインを発信している。

「ちくしょうつー！」

映話スクリーンのなか、タイガーは歯噛みをした。レーダーのなかのタイガーの船をしめす輝点が急角度で動く。包囲網を脱出するつもりだ。警察の宇宙艇はそうはさせじとじりじりと距離をつめていく。彼我の距離は十万キロあまり。その距離がいつきにちぢまつ

ていく。警察の宇宙艇からタイガーの宇宙船にむけ、タイト・ビームが放射された。タイガーの宇宙船は警察の宇宙艇のタイト・ビームにとらえられがつちりと空間で動けなくなってしまった。

「少佐、ありがとうございます！」

ミリィが礼を言つと、スクリーンのマローンはうなずいた。

「タイガーが逃げたと聞いて、予感がしたがよかつたよ。それじゃきみはレースを続けたまえ。わたしはタイガーを地球へ護送することにする。なにしろ太陽にこれだけ近付いては、きみたちの船のような装備をしていないからもたない」

そう言つと、マローンは警察の宇宙船を指揮して遠ざかった。ミリィはほつとしてまたレースにもどるべく、コースをとつた。すでに太陽面は半分をすぎ、あとは地球へ向けてまっしぐら。勝利は目前だ。

「暑いよーっ」

ヘロヘロは悲鳴をあげた。

パックの宇宙船の船内はサウナのよくなつていて、あらゆるもののが高熱をはなち、パックとヘロヘロは操縦席でぐつたりとなつていた。パックはといふと、上半身はだかでパンツひとつになりタオルを頭にねじり鉢巻きにしてぱたぱたと団扇をせわしなく動かしていた。全身からたらたらと汗がふきだし、床には水溜まりをつくっていた。

「がまんしろよ、死ぬことはないんだから」

「こんなことならくるんじやなかつた……」

ヘロヘロはぼやいた。

パックはレーダーを見てつぶやいた。

「ありや、こんなところにミコイの船がいるぜ」

「へ？」

ヘロヘロとパックはレーダーの画面に顔をよせた。

レーダーの画面には無数の輝点があらばつていて、その距離は数

万キロにおよんでいるが、宇宙空間では指呼の距離といつていい。そのなかでミリィの宇宙船をしめす輝点がパックの宇宙船のすぐそばに浮かんでいる。

「どういうことだ。ミリィの船は先頭を飛行していただだぜ」パックは首をひねつた。へ口へ口は口をはさんだ。

「事故でもあつたのかな？」

「わからんねえ。ちょっと声をかけてみつか」

パックはそう言つと映話システムのスイッチを入れた。

「ミリィ、おい聞こえているかい？ こんなどこでなにしてんだ」スクリーンがあかるくなつてミリィの顔がうかびあがつた。気のせいが、彼女の表情はぼうつ、となつてパックの言葉も聞こえていないようだつた。うすく目を開けたミリィはパックの顔をみとめたのか、ちょっとほほえんだ。が、かくんと首がかたむきスクリーンの視界から消えた。

「いけねえ！ 気を失つて！」
パックはわめいた。

ユニコーン号の船内は高熱であぶられていた。

タイガーの攻撃はしのいだが、そのさいユニコーン号の排熱システムが故障したらしかつた。ほんらいユニコーン号は船体にくわえられた熱を宇宙空間に排出するための放熱フインが装備されている。このフインは熱を直接マイクロ波に変換して宇宙空間に放出するためであつたが、その排熱システムがうまくはたらくなつてしまつたのだ。

ミリィは操縦席にぐつたりと横たわつていた。船内温度は危険なほど上昇している。ずるりとミリィのからだが操縦席からずり落ち、床に頭をぶつけた。

その痛みでミリィは目を開いた。

「のままでは熱で死んでしまう。なんとかしなくては……。」

ミリィはふらりと立ち上がると、食料供給ユニットの操作盤に手

をついた。操作盤もまた熱くなっている。ミリィは氷水をプログラムした。せめて冷たい水だけでも飲みたかった。食料供給ユニットはちゃんと動いた。氷をつかべたグラスがユニットの出口にあらわれる。

そこまでミリィの意識はつきた。

グラスに手をのばしたとき視界がぐらりとゆれ、ミリィはふたたびずるずると床にすわりこんでしまった。

ふたたび意識をとりもどしたときだれかがわめいていた。
だれだろう？

「おいミリィ！ しつかりしる」

ああ、パックだ。

ミリィはぼんやりと映話ユニットのスクリーンを見た。パックがスクリーンのむこうから怒鳴っている。
そういうえばじぶんはなにをしようとしていたのだけ？

氷！

そうだ、氷をつかべたつめたい水を飲もうとしていたのだった。
冷たい水を飲めば、頭もしつかりするだろ？

ミリィは食料供給ユニットのほうを見た。

グラスがある。ミリィはそのグラスを手に取った。
なぜかグラスのなかの水はぐらぐらと煮え立つている。
ミリィは首をかしげた。

「ミリィ！ 聞こえるか？ なんかいえよ」

あいかわらずスクリーンのむこうではパックがわめいている。
うるさいなあ……。ミリィはぼんやりとスクリーンを見た。こんなに暑くては、ものも考えられない。
ミリィはまた氣を失った。

ふたたび意識をとりもどしたとき、パックの顔がミリィの視界いっぱいにあつた。パックの背後にはユニットのコックピットの天井が見える。

つまつミコイは床にあおむけに倒れ、パックがうえからのぞいているのだ。

「パック？」

ミコイはつぶやいた。

「どうして、あんたここにいるの？」

「そういう挨拶はないだろ？ 助けにきてやつたってのに」

そう言つてパックはにやつと笑つた。

「助けにきた？」

ミコイは鸚鵡返しをした。ゆつくりと身を起しす。

ひやつ、と冷風がミコイのほほをなでた。涼しい風がふいている。

船内のヒアロンが正常に動いているのだ。

「さすがにユーローン号の温度調節システムは優秀だなあ。あつといつまに温度がさがつたぜ」

「どうしたの？」

「おれの船を、きみの船のしたにもぐりこませたんだ。それでおれの船の影にきみの船がはいつて、船内の熱を放熱できただつてわけだ。おれは船の船外エア・ロックをのばしてドッキングしたんだ」

「そうだったの……」

ミコイはコックピットの全景モニタを見回した。ユーローン号の真下に、パックの宇宙船がもぐつている。パックの宇宙船はユーローン号と比べ面積がおおきいため、ユーローン号はその影に完全にはいつている。そのため太陽からの直射をさけることになり、船内に蓄えられた熱を排熱できたのだ。じつじつとユーローン号の排熱システムが、じじぞとばかりにたまつた熱を排出するため全力で作動している。

「あなたの忠告を聞いていればよかつたわ……こんなことになるなんて」

「どうしたんだ、ずいぶんがつくりきてるみたいだな」

「わ、レースはおしまいね。こんなに差が開いていちゃ……」

ミコイは三次元レーダーを見て叫んだ。

「パック、もうレースだとかそういうことは言つていられないわー」「どうしたんだよ」

「見てよ、これ……」

ミリイはふるえる指先でレーダーの画面を指し示す。それを見たパックもあつ、と口を開いたままおりついた。

「なんてこつた！　このままじゃ、太陽に墜落しちまつ……」

パックとミリイの宇宙船をしめす輝点はじりじりと太陽面に近付きつつあつた。コンピューターが予想針路をディスプレイすると、あと数時間で太陽に危険なほど接近する、とでた。危険なほどとは、太陽の重力にとらえられ脱出できないということである。

「ああ！　もうだめだわ……このまま太陽につつこんで、あたしたち燃えてしまうのよ！　パック、ごめん。あたしを助けにきてくれたのに、あんたまで一緒に死なせることになるなんて……」

ミリイは後悔に両手で顔をおおつた。肩がふるえて嗚咽がもれた。

「なに言つてんだ！　あきらめるなんて、ミリイらしくないぜ」

「でもしかたないでしょ。どう考えたつて、脱出は不可能よ！　ユ

ニローン号の推力じゃ太陽の引力をふりきれないわ」

「いや、まで。なにか手があるはずだ……」

パックはがりがりと頭をかいだ。

「たしかにユニローン号のエンジン出力じゃ、ここまで接近してたら脱出は無理だ。といつておれの船もおなじようなものだし……」

そこまでつぶやいてパックははつと手を見開いた。ミリイを振り返り叫ぶ。

「ミリイ！　この船の航法システムはどうなつてたつけ？」

「どういつこと？」

「ひとつ思いついたことがある。うまくいくかわからないけど……」

パックはミリイの耳にくちをよせ、じぶんの思い付きをはなしてみた。ミリイの両手がおおきく見開かれた。ぽかん、と口を開けパックの顔を見る。

「そんなこと……つまくこくと思つてゐるの？」

「うまくいくと思つんだがなあ」「パックはにつこりと笑つた。

「ともかく、やつてみようぜー」「ミリィはこつくりとうなずいた。

「そうね、だめでもともとだし……」

「よし、おれは船外にでるー」「ミリィは」」で航法システムを立ち

上げてくれ」

そう言つとパックはエア・ロックから宇宙服をひつたらこいそいで身につけ始めた。

宇宙服のなかにも環境解析装置は組み込まれている。

というより、もともとこの環境解析装置は、宇宙服に取り付けられたものが最初で宇宙船にはあとから機能として組み込まれたものだ。

なぜなら真空の宇宙空間において聞こえる音は、せいぜい宇宙服を着用した人間自身の鼓動とか、息遣いのみである。その音のない真空の宇宙空間で作業するうえで、まわりの物音がまったくしないというのはきわめて危険な状態になることがままあります。

たとえば宇宙空間で宇宙ステーションを組み立てている現場を想像してほし。そのなかで金属製の梁などが放置され、作業している宇宙服の作業員に近付いたとする。物音がなにかしていれば気配などでふりむくこともありうるが無音のままではまったく気付くことはないだろう。この気配を再現するために環境解析効果音システムは考案された。

いまパックは宇宙服を着込み、どうどうと轟きわたる轟音にたえていた。轟音は宇宙船のまわりを飛びかう荷電粒子や、高速プラズマが荒れ狂つているさまを宇宙服に装備された環境解析装置が効果音としてヘルメットのスピーカーに流しているのである。太陽面にこれだけ近付いて船外作業をしているのだからあたりまえで、これが二十世紀の旧式な宇宙服だったらあつというまに宇宙線が宇宙服

をつらぬいてなかの人間を焼き殺していたところである。

「パック、だいじょうぶ？」

ヘルメットにミリィの心配そうな声がひびく。

「だいじょうぶだ。それよりそつちのシステムはどうだい？　うまくこつちの船と同調できるか」

「むずかしいわね。あなたの船の航法システムの主コンピューターのプログラム言語がふるすぎてこつちのコンピューターで翻訳してるとこよ」

「ふるくて悪かつたな……」

肩をすくめパックはじぶんの船の外側をそろそろと移動していた。船の天井は人工重力が発生しているため動くのには不自由がない。パックはじぶんの船とミリィのユニコーン号を接続するため作業していた。一隻の船がドッキングしたままメイン・ブースターを噴射すれば推力は二倍になる計算だ。へ口へ口にも手伝わせたいところだが、あいにくへ口へ口は太陽からの荷電粒子などの電子的なダメージにはひとたまりもなく、船外活動が不可能である。パックひとりでやるしかないのだ。

なんとかひとりでパックは一隻の宇宙船を接続する工作をおえ、エア・ロックを通してユニコーン号へもどった。

エア・ロック内でパックは宇宙服を脱ぐと、ブーツに汗がたまつてがぼがぼと音をたてている。

「ふうーっ、一生分の汗かいたみたいだ！」

「コックピットにはいるとミリィとへ口へ口がコンソールに額をよせあつっていた。なにか深刻そうなようすである。

「どうしたんだ、ふたりとも」

パックが声をかけるとへ口へ口が顔をあげた。

「パック、だめだよ。パックの船のコンピューターと、ミリィの船のコンピューターとで共通のプログラム言語がなりたたないんだ」「どういうことだ」

「パックの船の航法コンピューター、ふるすぎるつてことだ。二

「一ノ号のコンピューターがうけつけないんだ。」そのままじゃ、一隻をドンキングしたままブースターを噴射すると、同期がつまづいかなくてあさつての方向へ飛んでしまつよ。」

「なんとかならないのか?」

ミリィは首をふった。

「ふたつの航法システムをつなぐコンピューターがなくてはだめね。もつひとつ上の階層をつくりて、一隻をオーバードライブできれば……。でもそんなコンピューターはここにはないし……」

「あるむー。」

「え? ミリィとへ口へ口はパックを見た。」

「それならうつてつけのシステムがある!」

「にやりとパックは笑つた。その視線がへ口へ口にむかつていて。」

「な、なんだい?」

「へ口へ口はなぜだかいやな予感がして問い合わせた。パックはじつ、とへ口へ口の顔を見つめている。」

「え? ぼく?」

「そうや、へ口へ口。おまえのちからを借りたいんだ」

「たじたじとへ口へ口は後退さつた。パックの目は不気味なひかりをおびてている。」

「な、なんだよ。おー、その田はやめりつて!」

「へ口へ口、おまえの足を制御する回路、そのまま船のブースターの制御につかえるんだよ。なあ、ちよつとでいいからおまえのちからを貸してくれよ。」

「ええつ?」

へ口へ口はパックの手によつて両足はぱぱぱぱぱぱられてしまった。まんまるの顔だけが二ノ号の操縦席におかれている。へ口へ口の両足があつた穴からは無数のコードがのびて、コンソールにつながれていた。へ口へ口の手足を制御する回路が、パックの船と二ノ号のブースターを同時に制御する。

「なーんでぼくがこんなめにあわなきやならないんだい！」

「へロへロはふくれた。

「まあそりこりうなよ。どうだ、足の感覚はあるか？ ちよつと動かしてみ」

「ちよつとまつて」

「へロへロはうん、とちからをいれた。

轟つ……、と一隻のブースターが同時に点火する。

「わあつー！」

「きやつ！」

だしぬけの加速でパックとミリィは床にころがった。

「いて……おい、もうすこしやんわりできないのか」

「無理いうない！ こんなからだにして。だいたいパックはいつもいつも勝手なんだから……このレースだつてぼくはいやだいやだと言つてきたのに……」

ぶつくさ文句を言つへロへロの頭をぽん、とたたくとパックは操縦席に座つた。

「さあ行くぜー！ ミリィ」

「なによ、この船はあたしの船なのに……」

そう言つてミリィはパックのとなりに席をとつた。

「ブースターの半分はおれの船だぜ」

パックはそう言つとへロへロに声をかけた。

「へロへロ、全速力だ！ おもいきり、いけ！」

「よしきたー！」

へロへロに接続された航法システムにより一隻の宇宙船はドッキングしたまま、最大推力でもつて発進した。強烈な加速が、パックとミリィのふたりを座席におしつける。一隻の船は太陽の引力をふりほどいて脱出に成功したのである。

レーダーを見つめていたミリィは歓喜の表情になつた。

「パック、うまくいったわ！ あたしたち、脱出できたのよー！」

「わ、わかつてる……」

座席におしつけられたパックは強烈な加速度に身じろぎもできな
い。それでもなんとかミリィの言葉につなぎて見せた。

「あとは地球へ帰るだけだな……」

ミリィもうなずいた。

11

洛陽宇宙港にもつけられたレース会場には人々が群れていた。それはレースの勝者をまちうける報道陣、それに見物客である。歴史上はじめての宇宙船によるレースという大舞台であるため、人々の興味をいっぱいにひきつけていたからである。いくつもの3Dカメラはレンズのターレットをぐるぐる旋回させ、あらわれてくる宇宙船を最初にとらえようと天空を睨んでいる。記者席では、さまざまな報道機関の記者、解説者がこのレースの意義について語り合っていた。

この日、洛陽シティの上空はすつきりと晴れ渡り、一点の雲もなかつた。宇宙港のはるかかなたにはシティの全容がそびえたち、会場上空は幾隻もの飛行船がゆつたりと回遊してレースの最終「ゴール」をしめすホログラフィーを空中に描いている。

と、宇宙港の管制官のひとりがふいに立ち上がった。

ひどいとのざわめきがぴたりと止んだ。

管制官はヘッドフォンを耳におしあて、すばやくマイクにむかつて何事か囁いた。なんどか相手の言葉につなぎていて、管制官のすぐちかくにはあの遠山がいた。

かれは顔いっぽいに心配そうな表情をうかべている。

管制官はその遠山に気付いたようだつた。ヘッドフォンをはなし、ふたこと、みこと口を開いた。

ぱあつ、と遠山の愁眉が開いた。

いならぶ人々にむかつて口を開く。

「みなさん、レースの勝利者がもうじきやつてきます！」

そう言つと遠山は天空の一点をあおいだ。

人々もかれにならい、上空をいつせいに見上げる。

セルリアン・ブルーの蒼穹に、ひとつぽつんと煌めきが出現した。それは空中に飛行機雲をたなびかせ、ぐんぐんと宇宙港へ接近してくる。

轟々と大気が震えはじめた。ようやくその接近してくる宇宙船から衝撃波が地上へたつしたのだ。カメラの砲列はいつせいにその宇宙船にむけてレンズをむける。

会場にもうけられた巨大なモニターにその接近してくる宇宙船が映像としてとらえられた。

おーっ、という歓声が会場をつつんだ。

やつてきたのはミリィのゴーラーン号だった。

「なんだ、あれは……」

遠山は不審の表情になった。

それというのもゴーラーン号のしたにはもう一隻の宇宙船が、まるでぶらさがつているように繋がっていたからである。

一隻の宇宙船はひとつになつたまま地上へと接近してくる。したにぶらさがつた宇宙船の斥力プレートが輝き、そのままの姿勢で着陸態勢にはいつていく。

一隻はそのまま飛行船が空中に描いたゴールのホログラフィをくぐりぬけた。

わあわあという歓声が宇宙港をつつんだ。

ついに一隻は地上へ着陸した。

「お嬢様！」

遠山は小走りにゴーラーン号へ駆け寄り、見上げた。

一隻の宇宙船はドッキングしたまま地上に身を横たえている。宇宙港の管制塔からは着陸した宇宙船のブースターをひやすため、冷却液を満載した車両がわらわらと集まつてきていた。いつせいに車両からは冷却液が宇宙船の放熱フィンに放水される。もうもうとしろい蒸気があたりをつつんだ。

ぱくり、とユーローン号のニア・ロックが開いた。

まぶしさに目を細め、ミリィが姿をあらわした。あたりを見回してこゑ。

「ミリィお嬢様！」

遠山は叫んだ。

ミリィは地上を見下ろし遠山をみとめた。

「遠山！」

満面の笑みをうかべ、ミリィはぱっと空中に身を踊らせた。わつ、と遠山は驚き反射的に両手をひろげた。その腕のなかにミリィは飛び込む。遠山はミリィをかかえてあおむけに倒れてしまった。

「お嬢様！　あ、あぶないじゃないですか……？」

遠山はぽかんと口を開けた。ミリィは晴れ晴れとした笑顔でいる。こんなミリィを見るのははじめてのことだ。

「お……嬢様……？」

えへへ……、とミリィは笑い声をあげた。そのとき、ミリィは十八才の少女そのものだった。

「ただいま、遠山。あたし、帰つてきたよ」

その声を聞いて、遠山は胸がいっぱいになつた。

「お帰りなさいませ。ミリィさま」

うん、とミリィはうなずいた。

立ち上がり、ユーローン号を見上げる。

真つ青な空に、ユーローン号は白銀の船殻を輝かせている。ニア・ロックからはパックが顔をのぞかせていた。ミリィは手をふつて叫んだ。

「パック、ありがとうつ！」

パックは手をふりうなずいた。

そのころようやく報道陣が殺到してきた。記者がミリィをとりまき、口々にレースの勝利の感想をもとめる。ミリィはあつとつまみにのみこまれてしまった。

「やれやれ、なんとかおわったな……」

パックは満足そうだった。

「おーい。パック」

船内からへ口へ口の声がした。ふりむくとへ口へ口は操縦席でからだじゅうにコードを繋がれっぱなしでふくれている。

「いつたいいつになつたらもとにもどしてくれるんだ?」

「わるい。忘れてた!」

パックは頭をかいだ。へ口へ口はへつゝ、とうすく笑つた。ともかくレースはおわつたのである。

表彰式がはじまつた。

洛陽宇宙港にしつらえた表彰会場では参加したパイロット、関係者、報道陣らが勢揃いしていた。表彰台にはミリイがいた。そしてその両隣にパックとへ口へ口がいた。

「おれ、ほんとにここにいていいのか?」

パックはすっかりあがつていた。ミリイはそんなパックを見てにっこりと笑つた。

「だいじょうぶよ。もつと背をのばして堂々としてなさい」

「うーむ……」

ミリイの提案で表彰台にはパックとへ口へ口も一緒に登ることになつたのである。へ口へ口の足は元どおりになつていた。表彰にはマローン少佐が授印をおこなつていた。

「おめでとう、ミリイくん。それにパックくん。へ口へ口くんも」

マローンにそう言われパックは顔を赤くした。

わあつという喚声があがり、どつとばかりに拍手がわく。カメラマンたちはジャイロシステムを内蔵した手持ちカメラをもつて表彰台に登つている三人を撮影する。パックはかちんかちんにしゃつちしばつていた。

ミリイはそんなパックの肩をつつきじぶんにふりむかせる。

「え?」

ぽかんとした顔つきのパックのほほにミリイはすばやくキスをし

た。

それを見たへ口へ口はうくつ、となつた。

—

ふとそれでも不安そうな顔つきになる。

「でも、ほんとうに「ねでおわりなんだうな?」

そうではなかつたのである。報道記者のひとりがこんな質問をし

「いいえ」

ミソイはかぶりをふる。

「来年、またやります！」

おー、ミ、と声援かわいた。ハックはミリイを見つめた。足元のへ

口へ口を見る
ノロノロは子ノなハ、ノを見て
ホーとい、カ顔
ニはつ一。

二月廿四日晴。晚晴。夜半晴。

「おい、パック
まさか？」

うん、とパックはうなずいた。

「…ばかねがせばせめがねがね…」

あーあ、とくとくはためく

クはまったく懲りていないので。 ともかく今回のレースは有終の美

た。

終
わり

大団円（後書き）

いかがでしたか？
ちょっと懐かしめのSFの味を出してみたかったのですが、楽しんでいただけたでしょうか？
ぜひ感想など、お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6260c/>

宇宙狂時代

2010年10月8日14時43分発行